
夢見る家来とお嬢様

片弓和美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る家来とお嬢様

【Nコード】

N6842M

【作者名】

片弓和美

【あらすじ】

大悟は夢の中で憧れのお嬢様女子高生にデートを申し込みに行った。

明晰夢と呼ばれる、自由に動けて何でも有りな夢の中で。

そして、家来にされた。

そんな二人が繰り広げる、ゆるめのファンタジー。

家来、出会う

その日、佐藤大悟は昼寝さとうたいごをしていた。

このところおかしな夢を見る。

その夢の中では自由に動き回ることができた。夢を見ているという実感がありながら、思うがままに歩き回り、ときには空を飛び、可愛い女の子とデートすることだってできた。

十九歳でフリーター、現在は求職中で生活するのがやっとな大悟だったから、そんな夢にはまり込むのが唯一の楽しみだった。

この日も当然、大悟はデート相手を探していた。現実においては中学校時代に彼女がいて以来デートなどしたことがなかったが、こうして明晰夢めいせいむと呼ばれる夢を見るようになってからは毎晩、毎昼寝がデート続きであつた。あくまでも夢の中では。

ここは大悟が住む地方都市の住宅街。夢の中では空を飛んだり、世界中のどこにでもワープしたりが可能だったが、スタート地点は眠った場所と一致した。世界中の美女達とデートを重ねてきた大悟だが、そろそろ日本人が恋しくなっていた。日本人の女の子がやっぱり一番可愛いやと。

自宅近くの公園でブランコに座りながらガールハントの計画を練る大悟。そういえば気になっていた女の子がいた。二つ下の後輩で、高校を出るまでは毎日その子を眺めるために学校に通っていたようなものだった。小早川咲希こはやかわさきという子で、今は十七歳の高校二年生のはずだ。

「よし、待ってるよ、小早川」

大悟は飲みかけていた缶コーラを一気に飲み干し、空き缶をくずかごに向けて放る。放物線を描いた空き缶はくずかごに入るまでの間にクシャクシャに潰れた。夢の中では超能力さえ使うことができたのだ。

家来、出会う 2

地元でも有名な大邸宅である小早川邸についたが……。

コンクリート打ちっぱなしの外壁が素敵なお屋敷を中心に、ドーナツ型の衝撃波が走り、小早川邸が地面に沈んでいった。

「なんだ、これ……」

門柱にもたれかかっていた咲希が気怠そう（けだるそう）に大悟を振り返った。

「お城を建てようと思って。邪魔だから片付けてたの」と、涼しい顔の咲希。

「な、なるほどね……まあ、ここは夢の中だし……あはは」
砂埃がおさまると、屋敷はがれきの山さえ残さずに消え失せていた。

咲希は小花柄のキャミソールと白いミニスカートをパンパンと払って埃を落とす。そして、手のひらに発生させた手鏡で髪の乱れを直した。

爆心地に向かって歩きだした咲希に大悟も続いた。

「なんか用？ できれば夢の中でも人の敷地に勝手に入らないでほしいんだけど」

ギクリとする大悟。夢の中の人達は細かいことなど気にせず、女湯をのぞこうが街中で堂々とナンパしようが、嫌がられたことなど無かったのだから。

「おまえ、ひよつとして……これが夢だって気づいてる人？」

咲希はほどよく膨らんだ胸の前に腕を組む。そして、いかがわしいものでも見るような細い目をした。

「さてはあんた、女湯とかのぞいたでしょ？」

「あ、あれは事故だ！」

そう、事故だったのである。超能力が物珍しかった時期に壁抜けなどしながら飛びまわり、たまたま女湯にも通りかかったただけだっ

たのである。残念ながら若い女の子は入っていなかったのだから、やましいところは無い。と、胸を張る大悟。

「まあ、別にいいけど。で、このわたしをデートに誘おうとか企んでここに來たのね？ 夢の中だから『あんなこと』や『こんなこと』ができると思って」

図星をつかれて気まずい顔をする大悟。

「まあ、そうだ。……嫌か？」

咲希は腕組みから右腕を立て、人差し指を頬に当てる。

「そうね、リアルでなら、このわたしが初対面のさえない男なんかとデートするなんてありえないけど……」

咲希は現実のことを『リアル』と呼んで区別しているらしい。

もったいぶった口調に加えて『初対面』などと言われて大悟はガツクリきた。

「初対面じゃないんだけどな。ま、いいわ。嫌がつてるやつとデートしたってつまらないしな」

「ちよつと待つて、あんたひよつとして『普通の佐藤』じゃない？ そうだ、普通のくせに生徒会長に立候補して……生徒会長になつたんだっけ？」

三年間の高校生活で唯一普通じゃなかった功績だった。それをあつさり忘れられたところか、生徒会選挙に受かったかどうかも覚えていないらしい。これは脈無しだ。夢の中にまで来て大恥かいたと背を向ける大悟だった。

「ねえ、ちよつと待ちなさいよ……佐藤先輩！」

咲希の小さな手が大悟の手を握って引き止める。柔らかな感触と温もりにグラツときたが、高校卒業と同時に封印したニツクネームを呼ばれた屈辱で素直になれない大悟。

「小早川のお嬢様が普通の佐藤めに何かご用でしょうか？」

「やだ、気にしてたの？ 普通の佐藤って呼ばれるのがそんなに嫌だったんだ」

きゃははは、うける。などと笑われて大悟は仏頂面ぶつちやうめんになった。

咲希は咳払いを一つして真顔を取り戻した。

「あれって、『薄気味悪いほうの佐藤』と区別するためだったんじゃないの？ あんたってほら、生徒会長……だったのよね？ で、有名人だったし、あっちの佐藤は別の意味で有名だったし」

たしかに、数々の奇行で有名な『薄気味悪いほうの佐藤』というやつがいた。当時、学校に二人しか佐藤姓がいなかったものでそういう区別をされていたんだと思い出す。ちなみに、教師にも一人佐藤がいたが、そちらは『先生の佐藤』であった。

「だけど、生徒会長だったことも覚えてなかったんだろ？」

「わたしはあんまり他人に興味が無いから」

なんでそんなこと訊くの？ と、いうように小首を傾げる咲希。少し茶色がかった肩までの髪がシャランと揺れる。大きな瞳に侮蔑の色はなかった。

ふてくされた自分を引き止めフオローしてくれたんだと自信を取り戻す大悟。

「それで、デートしてくれる気になった？」

「そうそう、それ。ちよつとわたしと賭けをしない？」

「賭けってなにを？」

「もしあんたが負けたら……」

腰の後ろで手を組んで石でも蹴るようにモジモジする咲希。

「わたしの家来になってほしいの」

家来、出会う 3

咲希のおねだり顔にポーツとなっていた大悟だが、咲希の顔をまじまじと見た。驚いて二度見した。

「家来ってなんで？ おまえんちって使用人とか大勢いるんだろ？」
「大勢かどうかは別として、たしかにうちには使用人がいるけど、こっちの世界ではないから」

家来ってなにをするんだ？ 期間は？ 給料は？ と、疑問がかけめぐったが、高校を卒業して二度とチャンスは無いと思っていたお嬢様とお近づきになれるかもしれない。これはどっちに転んでも美味しいぞとほくそ笑む大悟。

「……まあ、いいだろう。その賭け乗った。で、なにをするんだ？」
「じゃあ、戦いましょう」

咲希は即答した。

「戦いつてなんだよ？」

「戦いは戦いよ。ほら、こっちではなんでも思うとおりにできて超能力まで使えるのに、戦ったことってないでしょ？」

言われてみればこちらの住人はみんな黙って言うことを聞いてくれて、葛藤が生じたり争ったりしたことなど無かった。

「でもさ、もしこっちの世界で傷付いたり死んだりしたらどうなるんだ？ 危なくないか？」

咲希はうーんと考えこむ。

「まあ、死なない程度に。無理だと思ったらまいったするから」
大悟はうなずいて、数十歩の距離をとった。超能力戦ということだから炎とか光線とかファンタジーな何かで攻撃してくるかもしれない。こちらは意表についてテレポーションで背後を取り、ワッ！と驚かせておしまいにしようと作戦を立てた。

「じゃあ、いくわよ、さん、に、い、ち」

ゼロを言うかどうかで一瞬ためらったが咲希の背後に回り込んだ。

あんまりあつさり決まって咲希がふてくされるかなとほくそ笑んだ瞬間。

「ひざまづいて金縛りにかかりなさい」

「え？」

大悟の身体が強力な磁石にでも引かれるように地面にへばりつく。土下座の姿勢で硬直したまま首は咲希を見上げていた。大悟はふと短いプリーツスカートに着目した。

「風よ吹け！」

咲希はスカートと髪を手でかばい、目を閉じた。

「両手をあげて硬直！」

咲希が心の中で抵抗しているのかゆつくりとはあつたが、その両手があがってゆく。吹きすさぶ風の中、白と紺のストライプ模様が、キャミソールのはためく裾から細くくびれた腰がチラリチラリと見えた。

咲希の眉間に縦のシワが寄り、こめかみがヒクヒク震えている。

「どうだ、まいったか？ おとなしく降参すればこれぐらいに……」

咲希は突然目を開けて満面の笑みを浮かべた。何か思いついた顔だった。とっさに大悟は半透明のバリアーをはって攻撃に備えた。

咲希の表情が余裕の笑みに変わる。

「降参したと言いなさい」

その手があつたかと気づいたときには口が勝手に動きだしていた。……こ、こうさん……した」

二人の身体に自由が戻った。お互いに勝負あつたと確信した瞬間にそうなったようだ。

「面白かった。これで、あんたはわたしの家来だからね、セ・ン・パ・イ」

面白くねえ、と、腕組みする大悟だったが、戦闘中に見たストライプ模様が脳裏に浮かぶ。

「まあ、しょうがないか」

「なにニヤニヤしてんのよ？ あ、そういえば、あんた見たでしょ

？」

再度硬直させられ、ゲシゲシと足蹴にされる大悟。

「おまえ、やめろ、人を足蹴にするな……って、おかしいな、なんでおまえは言うこと聞かないんだ……」

「ご主人様には反撃できないんじゃない？ おまえは犬よ、奴隷よ、わたしの下僕しもべなのよ」

おーっほっほと高笑いする咲希。眺めていただけの頃には清楚可憐なお嬢様と思っていたが、ずいぶんとアレなやつだったようだ。と、気づいたときには遅かった。こうして大悟の家来生活が始まったのだった。

家来、就職する

就職情報誌を定期購読状態の大悟は、この日も近所の書店に出かけた。就職情報誌を買うや否や書店をあとにする。本が嫌いなのではなく、余計な出費を避けるために毎度そうしているのだった。

「どっかにいい仕事ねえかな」

高給で、可愛い女の子の同僚がいて、拘束時間があんまり長くない仕事。作業内容もきつなくて……。と、夢のような仕事を妄想する大悟だったが、実際に情報誌を眺めるときには、そこまで『より好み』してはいなかった。それでも、まだ生活費がそれほど切迫していなかったので、いい仕事があったらやろぐらいの気持ちだったのである。

ふと、あれ以来咲希に会っていないかったなと気づく。このところインターネットでゲームをやっている大悟は、朝寝て夕方に起きる半ネトゲ廃人状態だったのだ。咲希は高校生だから普通に夜寝て朝起きる生活をしていることだろう。つまり、寝る時間がすれ違っているから夢で会えないのだ。

「ま、いいか」

咲希に会いたいような気もしたが、会えば家来としてこき使われるに違いない。勝負に負けたから家来という属性にはなってやったが、生活パターンまで変えてこき使われに行く必要もないだろう。

それでも、なんとなく小早川邸を通るルートで帰ってみようかと思いつく大悟。情報誌をペラペラめくって眺めつつ、リアルの世界では歩くの面倒だな、などと考えつつ歩いていくと、小早川邸が見えてきた。リアルでの小早川邸は以前のままで、モダンな大邸宅だった。

わざわざチャイムまで鳴らして会っていくこともないかと、そのまま通りすぎようとする大悟。なんだか視線の隅で自分の名前を見たような気がして門柱を振り返った。門柱に張り紙がされている。

急募 佐藤大悟 三食昼寝付き 社員寮あり 給与その他詳細は面談にて。と、あった。

激しく畏の予感がしながらも、三食昼寝付きで社員寮ありなら生活費の心配がいらなくなる。給料もくれるつもりらしいから、念願の『小遣いに余裕のある暮らし』ができるチャンスなのだ。

「ええい、ままよ！」

と、後先考えないようにしてチャイムを押した。

「どちら様でしょうか？」

落ち着いた感じの男の声だった。父親か？ と思って背筋を正しつつ答える。

「佐藤と申します。咲希さんはいらっしゃいますでしょうか？」

「失礼ですが、身分を証明されるものを何かお持ちでしょうか？」
財布から免許証を出して、インターフォンのカメラに見せると、音も無く門扉が開いた。

「失礼しました、佐藤様。その求人を見て偽の佐藤大悟が数名訪ねてきたもので。どうぞお入りください」

偽の佐藤大悟ってなんだよと苦笑いしつつ、敷地に入る。リムジンで出入りするのが似合いそうな舗装の道と、手入れの行き届いた芝生。歩きだと数分かかりそうな道のりを歩いていくと、向こうからダークスーツ姿の青年が出迎えにきた。

「お嬢様はメディテーション（瞑想）をなさっておいでです」

「……メディテーション？」

俺は高僧にでも会いに来たんだっけか？ と、ポカーンとしつつも、

「じゃあ、またあとで来ます」

と、背を向けようとする大悟。

「いえ、佐藤様がいらっしゃったら、お連れするようと言いつかつておりますので」

家来、就職する 2

うながされるまま男についていくと、屋敷に入り、『エレベーター』で三階に上がった。そこは室内プールになっていた。二十五メートルプールの向こうの窓辺には、サマーベッドとテーブルが置いてある。黄色地にオレンジの花柄ビキニを着けた咲希が、サマーベツドに寝そべっていた。かたわらのテーブルには果物がささったトロピカルジュース。フロアのどこから、ごく自然な室内楽が抑えたボリユームで流されている。

「これのどこがメディテーションだ！ 自宅にいながらのんびりバカンスしやがって！」

と、突っ込みを入れつつ咲希に歩み寄りながらも、目は咲希の水着姿に釘付けだった。ついさっきまで泳いでましたというように、水滴を弾くつややかな白肌。大きすぎず、小さすぎず魅惑の谷間を形成する胸。細すぎる腰からムツチリと盛り上がっていくヒップのライン。そして、張りつめて輝く太もも、太もも、太もも。まるでグラビアアイドルのような、住む世界の違う美少女のオーラをまとっていた。

「泳いでると考えがまとったりするのよ。それに、こうやってリラックスしていると、細かいことなんかどうでもいいっていう心境になれるし」

大悟はうながされて隣のサマーベッドに腰かける。メイド服を着たメイドさんが咲希のものと同じトロピカルジュースを持ってきてニコリと一礼して立ち去った。

「で、佐藤大悟急募っていうのは？」

咲希は身体を左を下にして大悟のほうを向く。柔らかそうな胸が寄って、さらに谷間が強調された。

「あんたっていつ寝てるの？ あの日以来どこを捜しても見当たらないし。なんで主人のわたしが家来を捜しまわらなくちゃならない

のよ？」

大悟が近頃の生活パターンを説明すると、咲希は「あきれた」というようなため息をついた。

「どうせそんなことだろうと思ったけど。つまり、あんたと寝食を共にして、わたしがあつちにいる間は家来として仕えてもらうつていうアイデアなんだけど、どうかしら？」

中身がちよつとアレな子とは知らずとはいえ、ずっと憧れてきた咲希との共同生活。一つ屋根の下で寝食を共にする。在学中なら学校で噂になりそうだからとためらったかもしれないが、使用人の一人として就職するのなら断る理由などないだろう。それでも、一応待遇について訊ねてみた。

「そうね、お給料については他の人達と同じ計算で……」

目が点になるような高給だった。他の使用人は定時で自宅に帰るが、大悟の場合は住み込みで拘束時間百パーセントだから給与も破格に跳ね上がるのだ。

「だけど、そんなに給料出して俺に何をさせるつもりなんだ？」

咲希が起きている間は基本的に自由時間だが、咲希が寝るときには、それが昼寝であろうがなんだろうが直ちにかけつけて一緒に寝なくてはならないそう。夢の中での目下の仕事は城の建築らしい。「まあ、あつちでは城を建てるって言っても力仕事にもならないし、本当にいいのか？ それに親御さんはこの件について知ってるのか？」

「パパもママもあんまり帰ってこないし、遊び相手を一人雇うって言ったら、あつさりオーケーしてくれたわ」

金で友達を雇うなどと聞いて何も言わない親ってどんな人なんだろうと思いつつ、親御さんが不在なら気楽でいいやとホツとする大悟だった。

「じゃあ決まり。契約とか詳しいことは中条さんなかじょうから聞いてやつておいてね」

中条というのは、先ほど大悟をここまで案内してきた男のことら

しい。

二、三日中に引越し屋を向かわせるので、それまでに用意しておくようにと言われ、ひとまず帰宅しようとする大悟だったが、
「そうそう、わたしが眠るときに眠れないとかは困るから、生活パターンをしっかりとっておいてね。まあ、どうしても眠れないときには方法が無くはないけど」

クスクス笑いに嫌な予感を感じ、生活パターンの変更を心に誓う大悟であった。

家来、初仕事

大悟は小早川邸のゲストルームの一つに無事引越しを終えた。勤務初日のこの日、咲希は家庭教師でもある中条の授業を受けていた。もうすぐ期末テストだそうで、夕飯時を過ぎてもなかなか終わる気配を見せない。

メイドさんに「先に夕食を召し上がりますか？」と訊ねられたが、初日から『ご主人様』を差し置いてというのも気が引ける大悟だった。

小早川邸観光も一通り済ませてしまった大悟は自室に戻り、パソコンを起動した。太い専用線でも引いてあるのか、アパートにいたときよりもずっと快適にネットゲームが動いた。

初日から遊んでいいのかよと自分に問いながらも、他にすることが無かったのだから仕方がない。料理洗濯掃除その他雑用まで、プロの使用人達が完璧にこなしているのも、大悟が買って出るような仕事など残っていないかったのだ。

引越越し疲れが出たのか、大悟の頭がコックリコックリと船をこぐ。

「おっと、いけね」

ブルブルと首を振って眠気を追い払う。咲希が眠るときに眠らないといけないのだから、眠気は大事にとっておかなければならない。それが大悟の唯一の仕事なのだから。

ネットゲームの中では『ギルド戦』と呼ばれるチーム対チームの戦争が始まるうとしていた。多くのユーザーが定刻に集まり、一斉に戦うのである。この日は、かねてからのライバルギルドと戦うことになっていたから、マウスを握る手にも武者震いが走った。大悟はギルドの中でも幹部クラスで、重要な戦力なのだ。

二十一時開始までのカウントダウンが始まる。相手ギルドの一人が姿を消す術を使ってこちらの陣に入りこんでいる。あまり歓迎さ

れる戦法ではないのだが、禁止もされていない。大悟は開始と同時にそいつを狙おうとカーソルを合わせた。

三・二・一・開始。キャラクターを強化する補助魔法などの仕度が一斉に始まる。案の定、隠れていた一人が暴れまわる。レベルの低い仲間達が倒され、一気に形勢不利になった。

「こんなにやる、今やってやるからな」

すばしっこい敵にカーソルを合わせようと苦戦していると、携帯が鳴った。

「おいおい、こんなときに誰だよ？」

片手で携帯を開いて確認すると中条の名があつた。とつさにモニターの電源を切って電話に出る大悟。

「お嬢様が、うたた寝をなさっています。すぐにあなたも眠ってください」

「は、はい。了解しました」

うたた寝にまで付き合わされるのかよと苦笑しつつも、初仕事に気分がたかぶってくる。アパートで使っていたものとは天と地ほどの差があるフカフカのベッドに横になった。

さっきまで大悟も居眠りしそうだったくせに、どうにも眠くならない。ギルド戦の興奮や初仕事に対する気負いなどから目がさえてしまったようだ。羊を数えてみても、いつの間にか「ギルド戦負けるだろうな」とか考えてしまつて、『仕事』に集中できない。

そこへ、ドアの開く気配があつた。眠れないで目を閉じていた大悟は些細な物音にも敏感に反応した。思わず目を開くと中条と目が合った。

「眠れませんか？」

穏やかな笑顔を浮かべるハンサムな顔。なんでも完璧にこなしそうな執事と自分を比べて、一層申し訳ない気分になる。

「す、すみません、なんだか急には」

「慣れないことですし、仕方がありませんね。では、起きてください」

初日だから、うたた寝ぐらいいは大目に見てくれるのかなと上体を起こした瞬間、

「御免！」

静かながらも鋭い一言と共に、中条の拳が大悟のみぞおちを抉った。大悟は白目をむいてベッドに沈む。中条はそのまま大悟の手首を取り、自らの腕時計と照らし合わせて脈を測った。

「問題ありませんね。では、良い夢を」

中条はモニターの電源を入れ、とどめを刺される寸前だった大悟のキャラクターを操る。眉一つ動かさずに相手ギルド員を着々と片付けていく。圧倒的不利だった戦を逆転勝利で終了するや否や、

「ごめん、仕事入ったから落ちるわ」

と、大悟っぽいセリフを残してゲームを終了したのだった。

家来、初仕事 2

「ちよつと、大丈夫？」

夢の中で目を覚ましかけた大悟は、後頭部に魅惑的な柔らかさを感じていた。膝枕だ、ご主人様の細っこいのにムツチリした太ももに膝枕されているのだ、と、鼓動を速くしながらも、タヌキ寝入りを決めこんだ。この幸せを一秒でも長く企んでいると、

「ほら、仕事よ。起きなさい！」

両方のほっぺをいやというほどつねられた。それでもまだ寝たふりを続ける大悟。しまいには膝枕がはずれて胸ぐらをつかまれ、目の覚めるような『往復ビンタを頂戴する。』

「つてゝな、何すんだよ！」

大悟が起き上がると咲希は胸を撫で下ろした。

「もう、死んじやったかと思っただじやないの。中条さんに限って失敗なんかしないとは思っただけど……」

「なんで俺が中条さんに当て身くらったの知ってるんだ？」

咲希はきょとんとして小首をかしげる。

「あら、ずいぶんと荒っぽいね。『大悟が眠れないときには手伝ってあげてね』とは言っただけど。きっと他の手段を用意してる暇が無かったんだわ」

キヤハハと可愛く笑っているが、この屋敷の人達は基本的に容赦無いのだと悟る大悟。ちなみに、採用されてからこちら、咲希は大悟のことを『大悟』と呼び捨てるようになっていた。

「で、城を建てるんだっけ？」

「そうよ。図面を用意したから早速取りかかってちょうだい。わたしはまだ勉強があるから」

と、更地には場違いな学習机に向かい、問題集の続きに取り組む咲希だった。

「それって、こっちでやっても意味あるのか？ リアルでやらない

と提出できないだろ」

咲希は顔も上げずに答える。

「もう宿題は全部済んでるけど、こっちでやると理解が深まる気がするのよ」

鼻歌まじりにスラスラと問題を解いていく咲希。楽しそうに勉強する人間がこの世に存在したなんてと軽くシヨックを受けながらも、大悟は仕事に取りかかった。

図面といっても詳細に描かれた城の絵だった。図面を左手に持ち、右手のひらを前方にかかげて主要なパーツを発生させていく。大悟はこれまで創作活動に意欲を持って取り組んだことなどない。慣れないながらもそうやって物作りをしてみると楽しくなって、どんどん夢中になった。時折、勉強に夢中な咲希の横顔を盗み見る。着々と問題集のページを進み、もう半分ぐらい終わっているようだ。なんとなく咲希に負けてはいられないという気がして、大悟は創作のペースを速める。咲希が顔を上げたときには、もう城が出来上がってましたという光景をイメージしてニヤニヤする。

家来、初仕事 3

「よし、終わった」

咲希は本を閉じて片付けるとウーンと伸びをする。真つさらだった問題集がページをめくられ、書き込まれて空気を含み、多少厚みを増している。問題集が自分のものになったという達成感が好きだった。

「そっちはどう？ 進んでる？」

近くに大悟の気配が無いことに気づいて見回すと、図面のとおりの城が既に出来上がっていた。きっと内装にでも取りかかっているのだらうと城に歩み寄る。

ノイヴァンシュタイン城というドイツの城をモチーフにした建物。上下逆さまのシャンデリアのようにいくつもの尖塔が配された城は、むしろ咲希が幼い頃に見た遊園地の城に似ていた。白い壁にターコイズ色の屋根のメルヘンチックなお城。甘やかされて育った咲希でも、さすがに父に城をねだったことなどない。

駆けだしたい衝動を抑えつつ、『プリンセスの威厳』を保ちながら城に近付くと、多少仕上げが粗い部分を見付ける。魔法少女のワンドのような小ぶりの杖を手に発生させ、それで指した部分を自分好みに修正していく。屋根の色味を多少明るく変更して、咲希は満足げにうなずいた。

大悟の初仕事に満足した咲希は「手の甲にキスぐらいさせてあげようかしら」などと上機嫌なまま城に入る。

天井を向いてシャンデリアを構築中の大悟は咲希に気づいて振り返った。

「勉強はもう終わったか？ お姫様」

大悟は照れ笑いのような表情を浮かべて作業を再開する。

「あんたって結構器用だったのね。わたしの目に狂いはなかったということかしら」

まあな。と、言ったきり、また天井を向く大悟。よく見るとシャ
ンデリアの造形があまり良くない。

「疲れたんじゃない？ あんまりこっちに長居してると夜眠れなく
なるから、そろそろ帰って夕食にしましよう？」

そう言った途端に大悟のお腹がグーッと鳴った。あははと笑って
咲希に向き直る。

「あ、そうか。下で作って、あとから吊したほうが楽だったのか。
まあでも、今日はこれぐらいに……」

大悟は言葉を切って咲希に駆け寄る。そして、そのまま咲希を突
き飛ばした。

「ちよつと、なにをするのよ!？」

大悟はさらに手のひらを向けて咲希を浮かせ、突き飛ばす。
尋常ではない大悟の様子に圧倒されていると、高い天井からシャ
ンデリアが降ってきた。

水滴を落とした瞬間をスローカメラで見たように、クリスタルの
破片が飛び散った。

咲希をかばった大悟は下敷きになり、背中から胸にかけて銀の突
起に貫かれていた。

咲希はとつさにシャンデリアを指差して消滅させたが、腰が抜け
たようになつて起き上がれない。

「ぶ……ぶじ……か？」

赤い絨毯がジワジワと黒く湿ってゆく。大悟はつらそうにうめき
ながらも咲希に向かってはってくる。

「馬鹿！ 動いちゃだめ！」

咲希は駆け寄り、大悟の手を握った。

「ちよつと突貫工事が過ぎたか……ごめん」

「わたしのわがままに付き合わせたばかりに……ごめんなさい……
……許して……」

大悟の手を胸に抱いて涙をこぼす咲希。大悟は長いため息を一つ
ついて全身の力を失う。

建てたばかりの城に主の悲鳴ばかりがこだました。

家来、初仕事 4

「怖い夢でも見たのかい？」

咲希は自分の悲鳴に驚いて目を覚ました。中条と勉強しながら居眠りしていたのだと気づく。

「大悟が死んじゃったの……」

「佐藤君が？」

中条は穏やかな表情のまま、咲希の瞳をのぞき込む。

咲希は肩にかけられたタオルケットを脱ぎ捨て、大悟の部屋に走った。

「あらあらお嬢様ったら」

メイドがクスクスと笑う光景を通りすぎ、大悟の部屋に飛び込む。

「よう、どうしたんだ？ おまえも今起きたのか？」

大悟はベッドで上体を起こし、胸の辺りをさすっていた。

「馬鹿！ 心配したじゃないのよ！」

咲希はベッドに飛び乗り、大悟のシャツをまくり上げる。

「お、おいっ！ ……ずいぶんと積極的な」

大悟の身体には傷一つ無いようだった。話す口調からして、痛みがひどいということもないのだろう。

「心配して損した」

大悟は何を思ったか咲希の手を握って振り返り、熱烈に抱き締め、ベッドに組み敷いた。唇を尖らせてタコのような顔をしながら咲希の唇に迫る。

「ちょ、ちょっと！ なにするのよ！ 放しなさいよ変態！」

「えっ、違うの？ ご主人様のご所望ならと……？」

大悟はあっさり引き下がり、きょとんとした顔で咲希を見下ろしている。

「やだ、覚えてないの？」

「あ、そうか。夢の中で何かあったんだな？ でも、今回はなんだ

か覚えてないんだ。初仕事なのに、ごめん」

咲希は、かいつまんで夢の中での出来事を語った。

「なるほどな、夢の中で死んでも実際に死ぬわけじゃないのか」

いつの間にかベッドの脇に立っていた中条が続ける。

「夢の中で死を体験するような恐怖に出会って、その記憶をシャットダウンするということなのかもしれないね。いわば安全装置のようなものかと」

お嬢様と二人でベッドにいる場面を目撃され、ギョツとした顔の大悟。

「失礼しました。お嬢様を取り乱されていたようなので。お邪魔いたしました」

中条は入って来たときと同様、物音も立てずに出ていった。

家来、怖い夢を見る

調理師や栄養士の免許を持つメイドさんが作った、豪華でありながら健康的でもある夕食を終え、大悟は自室に併設のバスルームで入浴を済ませた。大悟にあてがわれた『社員寮』は元々ゲストルームだった部屋である。でたらめなお金持ちの小早川家がゲストをもてなすための部屋なのだから、一流ホテルのスイートにだって負けないほどだ。

あまりの好待遇に、これは夢じゃなかるうかとか、贅沢させたあとで放り出すドッキリとかではないかと心配になる大悟だった。

風呂上がりの火照った身体を真つ白なバスローブに包み、一度味わったら二度と起き上がれなくなるような安楽椅子に沈む。壁にかかれたテレビまでは結構距離があるものの、馬鹿でかいサイズだから文字まできちんと読み取れた。映してみると、当たり前前の地上波からケーブルテレビの各種まで、様々なチャンネルが用意されていた。そうになると、男の子の見てみたいもの第一位は決まっていた。

「おーう、いえー」

コインの投入口も有料ボタンも無いのに大人向けのチャンネルを見られる幸せ。ここは二階で奥まった場所に位置する部屋だったから大して気にする必要もないのだが、つつい音を小さくしてドアや窓をチラチラ気にしてしまう。気にしながらもサイドテーブルに置かれたリモコンで部屋の明かりを間接照明に切り替え、暗く絞る。すると、廊下で足音がした。誰かこちらに向かっている。大悟は慌ててチャンネルを替えた。

「大悟、起きてる？」

ノックと同時に聞こえてきたのは咲希の声だった。時計を見ると深夜十二時を過ぎていた。

「ああ、起きてるよ」

咲希がドアを開けて入ってくる。シルクと思しきツヤツヤのピン

クのパジャマを着ていた。子どもっぽいキャラクターの入ったスリッパをスタスタ鳴らしながら近付いてきて、大悟が座っている安楽椅子の脇にちょこんと腰かけた。女子の存在感、美少女の香り、めちゃくちゃ可愛いお嬢様の石鹸とシャンプーの香り！と、心臓が早鐘をうつ。

大悟はテレビを消した。慌てて替えたチャンネルもまた大人向けだったことに気づいて大急ぎで消した。テレビを消してしまうと一気に部屋が暗くなる。お嬢様のほうから深夜にパジャマ姿で訪ねてきたんだから、恥をかかせちゃいけないのか？と、手を伸ばしかける。しかし、さっきは「放しなさいよ変態！」なんて言われてしまった。

「なんだか眠れそうになくて、映画でも付き合ってもらおうかと思っただけ、いいかしら？」

大悟は答えるより早くテレビの電源を入れ、闇雲にチャンネルを押しまくった。

「なんか、チャンネルいっぱいあってよく分らないんだよ」

普段は恋愛映画など見る習慣が無い大悟だったが、恋愛映画に付き合えばなにか素敵なごほうびが待っているかもしれない。そう思っ、大ヒットした洋画らしきチャンネルで手を止めた。

「ところで、明日は学校じゃないのか？」

「やだ、明日は日曜じゃないの。大丈夫？」

ネトゲ廃人などしていると、曜日感覚がなくなるのであった。

「それなら、俺もまだ眠くなかったし、かまわないよ」

あわよくば一つの安楽椅子に二人で寝そべって肩を抱きながら、などという展開を期待し、左腕を広げる大悟だったが……。咲希はさっさと鏡台の椅子を引きずってきて安楽椅子に並べた。

「あんたはこっち」

しぶしぶながらもご主人様に席をゆずり、直角に近い背もたれの木の椅子に座り直す大悟。すると、咲希が左手を差し出した。

「手をつないでいてほしいの……」

主従関係をはっきりさせながらも、やっぱりそういう気分なので
すね、ご主人様！ と、右手を出して手をつなく。

「キヤー……！」

いきなり悲鳴が上がって大悟は手を放そうとした。しかし、咲希
が強く握って放さない。見れば、画面はホラー映画に替わっていた。
血まみれになった女性がバスタブに沈められるシーンだった。

「途中まで一人で見てたんだけど、結構怖いよ、これ」

途中まで見ていたというだけあって、一時間ほどすると映画
は終わった。クライマックスの恐怖シーンばかりを見せられて、大
悟はトイレに行けなくなりそうだった。カーテンの外はまだ暗い。
もう一本怖くないのでも見てから寝ようかという提案も却下された。
「じゃあ、あんたもすぐに寝てね。おやすみなさい」

咲希は片手で覆って可愛くあくびをしながら出ていった。怖いから一緒に寝てほしいなんて素振りを一つも見せずに、さっさと出て
いった。

照明を明るくしてトイレを済ませる大悟。洗面台の大きな鏡が怖
い。ユニットバスを見れば血まみれの女性が沈んでいそうで怖い。
ドアを開ければアイスホッケーのマスクがいそうで怖い。まだここ
が自宅という感覚がないアウェイな気分で、何もかもが怖かった。
バスローブからTシャツ短パンに着替えた。まだ少し自分の家の
タンスのにおいがして、ホッとする。キングサイズのベッドに横に
なり、少し迷ったが照明をつけたまま寝ようと思った。思ったが、
なかなか睡魔が訪れない。

生あくびとため息を繰り返していると、部屋の明かりが消えた。
小早川家に限ってブレーカーが落ちるなんてせいせい失敗はないだろ
う。しかも今は夜中だ。きつと、メイドさんがきて電気を消してく
れたんだ。そういえばあのメイドさんも結構可愛かったな。俺と同
じか、ちよつと上ぐらいの歳に見えたから、高校出てすぐ働いてる
のかな。なんてニヤニヤしていると、フローリングの床に足音が。
どう聞いてもこの部屋の中、こちらに向かって歩いてくる。

足音はベッドのすぐそばで止まった。絶対、咲希かメイドさんだ。コツコツという細い靴音からして女ものの靴だったはずだ。そう確信して目を開く大悟。すると突然目の前のシルエットがライトアップされた。

「寝ない子はいねが〜！」

寝ない子はいないか？ という意味の、秋田名物なまはげのようなセリフ。右手に包丁、顔にはアイスホッケーのマスク。大悟は気を失った。ベッドに入る前に用を足しておかなければ、まずいことになっていただろう。

「おやすみなさい、佐藤君」

なまはげもどきはマスクをはずし、オモチャの包丁をエプロンのポケットにしまう。細身の懐中電灯を持ち替えながら、メイド服のフレアスカートをつまんでお辞儀するのだった。

家来、怖い夢を見る 2

「大悟、起きなさい。ここから出るわよ」

押し殺したきつい口調だった。二度目の遅刻でさすがに咲希も怒ったのかなと、大悟は慌てて飛び起きる。自室で『眠った』のだから自室に出るはずだったが……。そこは大悟の社員寮に間違いないようだった。馬鹿でかいベッドに寝ていて咲希に起こされたのだから。しかし、なんだかだいぶ様子が違う。あ、そうか、お城を建てたんだから、お城の中のしかるべき場所に出たというだけのことかと気づく。

「ごめん、これで遅刻二回目だな。俺もしっかりしないと。ところで寝る前になまはげみたいいな……」

咲希は鋭く話を遮った。

「今はそれどころじゃないの、外に飛ぶわよ」

咲希はじれったいとでもいうように大悟の手を取り、敷地を出た門柱の辺りにテレポートした。

「なんだ、これ……」

門柱や塀に無数の落書きがされていた。「死ね、小早川」などという幼稚なものから、大人の間で出回る怪文書のような内容まで、おびただしい数の落書きだった。

咲希が城のほうを向いて肩を落とし、ため息をつく。視線を追って見てみると、大悟の傑作が見るも無惨に崩壊していた。かろうじて残っていた大悟の部屋から脱出するために、咲希は急いでいたのだろう。

「いったい、誰がこんなことを……」

「知らないわよ」

うわの空といった感じの咲希にとりつく島もなく、大悟は落書きを一つずつ消しにかかった。

「街の景観を守れ！ ラブホテル建設を許すな！」

どこから現れたのか、三十代と思しきチンピラ風のいかげしい男が扇動し、十数名の主婦のような女達がシュプレヒコールを上げている。落書きの内容と照らし合わせてみると、どうやら住宅街に突如出現した城をラブホテルと勘違いしているらしい。

「これは俺が建てた城だ！ おまえらのほうこそ、変なことばっかり考えてるから、これがラブホテルに見えるんじゃないのか！ 大體、留守を狙って人んちぶっ壊して、落書きまでしやがって！ それで正義面とか恥ずかしくねえのかよ！」

普段大声など出したことがない大悟は、身体じゅうがワナワナと震え、涙目になっていた。これがいわゆるキレたという状態なのだろう。

神経質そうな痩せた主婦が、片手でメガネを押し上げながら大悟に詰め寄る。

「あなたが建てた城ですって？ 建築の資格をお持ちなのかしら？ こんな大きな建物を設計なさるからには一級建築士の先生ですわよね？ お若いのに、ずいぶんとご立派ですこと……」

便乗した主婦達にネチネチと嫌味を言われる大悟。女を相手に乱暴なこともできないと困っていると、咲希が近付いてきて主婦達ににらみをきかせる。主婦達は言葉を失って一歩後ずさる。女のケンは女の咲希に任せたほうが良さそう。咲希に限ってやりこまれとは思えなかったし、危害が及びそうなら連れて逃げよう。そう思った矢先、

「この城の建設を命じたのはわたしです。たしかに、街の景觀などに対する配慮が足りませんでした。ごめんなさい。ただちに城を撤去し、元通りの家にしますので、ご容赦いただきますようお願いします」

咲希はペコリと頭を下げた。主婦達にどよめきが起こり、

「ま、まあ……お嬢さん自らそうやって素直に謝るなら、私達だって鬼じゃないんだから」

ホッと胸を撫で下ろす大悟。わがまま姫かと思っていたが、咲希

も結構やるじゃないかと頭の一つも撫でてやりたくなつた。

「残念だが、問題はそれだけじゃねえんだよなあ、お嬢ちゃん」

主婦達を扇動してきたチンピラがからんでくる。

「おまえの親父が何をやってるか知らないのか？ この俺もカタギではないが、『小早川の旦那様』のやってることはえげつねえというか……」

チンピラはねちっこく咲希をいたぶる。小早川が政治家と結託しているせいで不況が続ぎ、増税が繰り返され、と、巧みに主婦達の怒りを煽る。

「増税は困るわ。息子と娘が大学と高校受験で重なって、ただでさえ手一杯なのに！」

「うちなんて、旦那がリストラされて、お義母さんが認知症になつて……。いつになったら景気が良くなるのよ！」

主婦達の不幸自慢の矛先は、やがて咲希に突き付けられる。

「あなたからもお父さんに言っただけなさいよ。国民の血税で私服を肥やすなんて恥ずかしいことはやめて。娘さんに言われれば何か気付くところはあるんじゃないかしら？」

諭すような上から目線で説教する主婦を、咲希はにらみつける。

「嘘よ！ パパはわたしに『世の中に塞がなければならぬ穴があるから塞ぐ、それが仕事だ』って言っただけもの。『人様の役に立つことをして、公明正大に報酬をいただく。それは決して間違っていない』って言っただけのもの！」

咲希が鼻声で叫ぶのを聞いて、主婦達の剣幕が弱まったものの、チンピラは続けた。そこは嫌がらせのプロであった。

「可愛い一人娘の前で格好をつけたただけだろうよ？ わざわざめえの娘に悪事を告白する親がいるか？」

多勢に無勢の中、咲希は気丈に頑張ったが、とうとうポツリポツリと涙がこぼれ落ちた。

家来、怖い夢を見る 3

「泣けば許してもらえと思ったのか？ たしかに俺だって若いお嬢ちゃんに泣かれていい気持ちはいねえけどよ、おまえの親父に泣かされた人達がどれだけいると思ってるんだ？ お嬢ちゃん一人が泣いて許されるとしたら、それは不公平だよなあ？ 泣いてもわめいても、せこい借金を返せなくてこの世とおさらばする奴だっているんだぜ？」

大悟は突然、何も言わずにチンピラを殴った。すわった目をして、危ない人のような顔をしている。

「兄ちゃん、それはまずいんじゃないのか？ 傷害だぜ？ おまえ、小早川に雇われてるんだろ？」

チンピラは袖口で口元の血を拭ってニヤニヤする。大悟はかまわずもう一発殴った。チンピラの顔に困惑が浮かぶ。

「俺は今日入ったばかりのバイトだ。お試し採用だ。そいつが傷害事件起こしてクビになったからなんだっていうんだ？ ていうか俺、もうこのわがままお嬢様に付き合いきれねえからさ、今この場でやめるわ。こっから先はてめえと俺とのケンカだ。かかってこいよ」

押し殺してうめくような、どこか冷静すぎる声だった。

「おっと、その手には乗らねえぜ？ お嬢様を助けるためにクビになって、ヤクザの俺様とタイマンはろうってか？ 安っぽいヒーロー気取りはそこまでにしときな」

大悟は咲希の腕を乱暴につかんで立ち上がらせ、胸を鷲づかみにした。キャミソールの裾から手を突っ込んで、荒い手つきで揉みしだく。

「や、やめて……どうしてそんなこと……？」

大悟はかまわずに咲希の顔を引き寄せ、強引に唇を奪った。

「何するのよ！ ……初めてだったのに……あんななんかクビよ！」

咲希は元々大きな目をさらに見開いて叫んだ。それでも大悟は抱きすくめて放さない。

「いいよ？ 俺はお前の体だけが目当てで、おままごとに付き合っただけなんだからさ。今ここでやっちゃえばお前は用済みだ」

咲希のキャミソールを引き裂こうとした腕を主婦につかまれる。

「やめなさい、これだけの人が見てる前で何考えてるの、あなた？」

大悟はつかまれた手を引き寄せ、主婦にキスをした。主婦のメガネがずり下がり、肩の力が抜けて放心したような顔になる。

「奥さんでもいいや。俺って頭おかしいからさ、アウトドアでもなんでもありだぜ？ 旦那が忙しくて、『ご無沙汰』してるんじゃないのか？」

まんざらでもなさそうだった主婦だったが、さすがに大悟の胸を押して拒否の姿勢を見せた。

「あゝつまんね、実に退屈だ。退屈で退屈で気が狂いそうだぜ！」

大悟は八つ当たりとばかりにチンピラを蹴り飛ばした。夢の中の力で遠慮無く蹴って塀に叩きつける。盛大に壊れた塀の向こうからチンピラを拾い上げ、サッカーのリフティングよろしく着地させずに蹴り回す。極め付けにボレーシュートで電柱に叩きつけ、ボロ雑巾のようになったチンピラの襟首を持ち上げる。

「やめ……てくれ……」

「何を？」

大悟の手刀がチンピラの胸をめがけて突き刺さる。女達が悲鳴を上げる。

「ころ……さないで……くれ」

「痛いかな？ 今俺がつかんでるこれはなんだろうな？ これを握りつぶしたらおまえはどうなる？」

チンピラは声にもならないような悲鳴を上げた。スラックスの股の下で地面が濡れていく。

「おいおい、汚ねえな。いっぱしのヤクザ気取りがしょんべん漏らして命乞いかよ」

「たのむ……なんでもいうこときく……」

チンピラは空を仰いだままつぶやいた。その目から幾筋もの涙がこぼれていた。

大悟はチンピラの髪をつかんで目を凝視した。

「二度とここに来るな。二度と俺の前に顔を出すな。小早川家にちよつとでも危害が及んだら、そのときはいつでもめえの心臓握りつぶしてやつからな。目を覚まして忘れるな！」

チンピラは安心したのか、穏やかに目を閉じて気を失った。その体が半透明になって消えていく。リアルで目を覚ましたようだった。

大悟は主婦達にらみをきかせ、

「おまえらも分かってるな？」

と、凄んで見せる。

「は……はい……」

と、返事をしながら後ずさりして、主婦達は逃げていった。

主婦達の姿が見えなくなって気を抜くと、大悟は猛烈に吐いた。吐き気が一段落して振り返ると、そこに咲希の姿は無かった。

家来、怖い夢を見る 4

「起きなさい、女の敵!」

大悟は頬に痛みを感じて目を覚ました。咲希にビンタをはられたようだ。

「つてゝな、あの状況ではああでもしないと、奴を納得させられなかっただろ?」

「……だからって……初めてだったんだから」

急にしおらしくなつて唇を尖らせる咲希。仲直りのチューか? と、起き上がろうとした大悟。体の自由がきかない。

「なんだ、これ?」

大悟は布団にくるまれ、ロープで縛られていた。いわゆる『すまき』というやつである。

「あんたがああいうこと考えてる人だったなんて知らなかったわ。いっちゃった顔してヤクザのお腹に手を……。ああ恐ろしい!」

咲希の隣で腕組みしていたメイドさんがロープをつかむ。

「お嬢様、どうなさいます? 大川にたたっこんでやりましょうか?」

「大川? なんのこと?」

メイドこと鈴木美夜は言う。

「すまきにして大川に叩きこむというのは、我が国の伝統的な懲罰とでも言いましょうか。ほら、よく時代劇とかであるじゃないですか。例えば賭場でいかさまをはたらいて捕まったときとかに……」

やだゝふるゝい、と、にこやかに美夜の腕を叩く咲希。

「美夜さんっていくつだっけ?」

「このあいだ二十六になりましたが、なにか?」

ツンとした表情で美夜は答えた。しかし、それは女同士のじゃれ合いのようだった。

「どうせ私は田舎育ちで爺さんと婆さんに育てられた古い女ですわ

よ……。お風呂上がりだつて水滴が肌に染み込んで、ピチピチと弾いたりはしませんとも……」

美夜が本気でひがむ前にとも思つたか、咲希は心持ち大きな声で言つた。

「まあ、大川にたたつこむかどうかは、本当に危ない奴かどうか中条さんに診てもらつてからでも遅くないわ。もうすぐ来る頃でしょ？」

美夜は腕時計を確認してうなづく。

「中条さんに診てもらう？」

いくらか緊張感がほぐれたのを見計らつて、会話に加わつた大悟。咲希はなんだか誇らしげな顔で答えた。

「中条さんはT大からアメリカのH大を経て、医師と弁護士免許を持つスーパーエリートさんのよ。いつでも冷静沈着で、大人でハンサムで……」

要するにスーパーマンなのね、と、ため息をつく大悟。俺だつてヤクザ相手に頑張つたのに、咲希の泣き顔を見てられなくて頑張つたのに、と、ふて腐れた顔になる。

そこへ、窓の外から車が止まる音がした。

家来、怖い夢を見る 5

「こんな朝早くからどうしたんだね？」

「パパ！ お帰りなさい！」

六十代と思しき紳士が部屋に入ってくると、咲希はその首にまわりつくようにして抱きついた。主人の帰宅に尻尾を振って出迎える小犬のようだった。

「これこれ、私も若くはないんだから、勘弁してくれ」

言いながらも目尻の下がりきった小早川。ビジネスマンでもなんでもない大悟でさえ、その顔には見覚えがあった。

「それで、このすまきにされているのが佐藤君かね？」

大悟がひたすら恐縮しつつ自己紹介を済ませていると、中条が入ってきた。

咲希が合流した二人に事情を説明すると、小早川は大悟の頭をよしよしと撫でてロープを解いた。

「うちの娘が世話になったね。夢の中とはいえ、そんな連中に立ち向かうとは頼もしいじゃないか」

体が自由になった大悟は、なんとなく正座して小早川に問う。

「あの、夢の中でお嬢さんに仕えるとか、そういうのって……なんというか……ご理解がありすぎるような……本当に雇っていただいていいんでしょうか……？ あはは」

「私も若い頃にはそういう夢を見たものだよ。君はもう『世界旅行』をしてきたのかね？」

小早川はハッハッハと豪快に笑った。世界じゅうの美女とデートをしてきたのかね？ という意味らしい。

「ま、まあ、おかげさまで」

父の手によってあっさり和大悟が解放されて面白くなかったのか、咲希は中条に医師としてのテストをねだった。

「私は精神科医ではないので、どうしてもと言われるなら友人をこ

紹介しますが、その必要は無いかと。夢の中では日頃抑えていた欲望などが、ときには残虐な形で表れたりするものですよ」

咲希は「ふーん」と、つまらなそうに鼻を鳴らした。

「方法はどうあれ、佐藤君はお嬢様を守りたかったのでしょうか。その気持ち、ならず者の願望を上回ったからこそ勝てた。それだけのシヨックを与えれば相手も深刻なトラウマを抱えているかもしれません。とっさの思い付きにしては上出来だったと思いますよ」

咲希が小早川の顔を見ると、小早川は一つうなずく。咲希は大悟の目を見てつぶやいた。

「……ありがとう」

小早川は大きな手で娘の頭を撫でつつ、少し頓狂な声を上げた。

「なるほど、そういうことか……」

滅多に帰宅できない小早川がこうして帰ってきたのは、一つの問題が解決したおかげだった。何者かによる理不尽な脅迫を受け、その対応に悩まされていたのだ。例のチンピラがリアルでの脅迫の犯人で、その願望を打ち負かしたから脅迫が止んだ。小早川はそう推論した。

「夢の中での出来事が現実を変えるってということ？」

咲希の質問に中条が答える。

「ユングの『集合的無意識』とは少し違うかもしれませんが、人々の無意識に何らかのつながりがあるのは確かなようです。もし仮に、無意識と呼ばれるものが『もう一つの世界』のような場所だとすれば……。いえ、現にお嬢様と佐藤君は夢の中で意識を持ったまま出会っているわけです、その中で他人に干渉すれば、相手が現実でとる行動にも影響が及ぶかもしれません」

「それって、パパの本に書いてたあれのことかしら？」

小早川が得意気な顔をする。

「そのとおり。『願って確信したことは実現する』んだよ。そもそもあの本は夢を利用して事業を成功させ、若くて美人な君のママにも出会い、ウハウハだった頃の体験を世の人々と共有したいと思っ

て書いたものだ」

大悟はハッと気づいた。昔、そんな本を読んだことがあった。『願って確信したことは実現する』という、そのままのタイトルだったはずだ。小早川の顔に見覚えがあったのは、著者近影か何かで写真を見たのだろう。

「でも、あの本の中には夢について書いてなかったような……」

大悟が問いかけると、小早川は満面の笑みを浮かべる。

「君も読んだのかね？ よし、あとでサイン本を贈ろう」

咲希に脱線を指摘されて、しぶしぶ話を戻す小早川。

「たしかに、あの本の中では夢そのものについては書かなかった。企業人として、あまりオカルトな内容を書くとか社の信用に関わると思ってる。だが、君には効果があったんじゃないのかな？」

言われてみれば、このような夢を見始めたきっかけはあの本だったのかもしれない。夢の中の賭けで負けて、この屋敷に引き寄せられてきたことにも合点がいく。

「あら、私も旦那様のご本は読ませていただいたのに……。私は学がなくて、お嬢様や佐藤君みたいに若くはないからということかしら……？」

美夜がいじけ虫を発生させると、小早川は首を横に振った。

「むしろ、現代人は頭が良すぎるんだね。理屈っぽさが過ぎるんだ。その点、中学を出てそのまま働きに出た私は知識を身に着けなかった分、物事を素直に受け入れられたのかもしれない」

「佐藤君と私は同じ高卒で働きに出ていますけど……。お嬢様は成績も優秀でいらっしゃるし……」

まだ納得のいかない美夜。

「君のそういうところだよ、美夜ちゃん。理屈で考え、あれこれ条件を設定する。その上ちよっとひがみっぽい。そうじゃなくて、願望をありのままに願い、素直に期待すればいいんだ」

「なるほど、夢の中では理性の検閲が薄れる。つまりは願望の効果が増幅されるということでしょうか。しかし、どうやってそのよう

な夢を？」

中条の問いに、小早川はまた上機嫌な顔をする。

「よし、美夜ちゃんと中条君にもサイン本を進呈しよう」

またしても咲希に叱られて話を戻す。

「単純に願うのさ。『あんなことやこんなことが出来てウハウハな夢を見たい』と願えばいい」

「と、いうことは……」

美夜がなにやら思いついた様子でニヤニヤとほくそ笑む。

「なにを企んでいるんだね？ 美夜ちゃん」

小早川は訊ねながらフレアスカートの尻を撫でた。

女二人がにらむ。

「パパ、セクハラで訴えられるよ？」

しまった、娘の前だったと頭をかく小早川。

「これはすまん。だが、老人が女性に触りたがるのは、故郷が懐かしくなるような感覚なんだよ。なに、決していやらしい気持ちでは

……」

小早川は何丁目かの夕陽でも眺めるように目を細めた。

「どうせ私は田舎者ですわよ。さしづめ、故郷のお母様でも思い出されたんでしょう？」

「そんなに怒ると可愛い顔が台無しじゃないか。私もあと二十年、いや、十年若ければ……」

美夜がポツと赤い顔をする。

「あゝ、ママに言いつけちゃあゝ」

咲希はニヤニヤして、からかうように父の目をのぞきこむ。

「咲希ちゃん、なにか欲しいものはないかな？」

娘を懐柔しようとする小早川。

「あ、賄賂だ。パパって悪い人なんだ」

小早川は心持ち神妙な顔付きになって言う。

「いいかい、咲希ちゃん。経営などしていると多少の根回しぐらいは仕方のないことだが、後ろ暗いことはしていないつもりだよ。パ

パを信じてくれるね？」

「かつこいいこと言ってもだ〜め」

言いながらも父の肩に甘える咲希。美夜もとっくに笑顔を取り戻していた。

「小遣いは足りているか？ 本当に欲しいものはないのかね？」

一人慌て続けている小早川。

「じゃあ、お城！」

「あら素敵。私もメイドをやっているからには、一度ぐらい大きなお城で働いてみたいわ」

女二人は手に手を取ってはしゃぐ。

「うむ、それならドイツにいい出物があつたな、ゆくゆくは終の棲家にと考えていたんだが……」

シャレが通じにくい年寄りに白い目を向ける二人。

「中条君、早速手配してくれ。可愛い娘のためなら城の一つや二つ

……パパ頑張っちゃうぞ〜」

「じよ、冗談だつてば……」

「そうか、いい機会だと思つたんだが……」

歳をとってから若い妻をもらい、遅く授かつた咲希が可愛くて仕方ないようだ。小早川なら娘のために本当に城でもなんでも建てかねない。住む世界が違うのかなと少し寂しくなる大悟であつた。

窓の外でスズメが鳴き出して、美夜がカーテンを開ける。雲一つない青空の下、また新しい一日が始まっていく。

「さ〜て、帰つて寝るぞ〜」

美夜はウーンと気持ちよさそうに伸びをした。

「すまなかつたね、美夜ちゃん。この埋め合わせはいつか」

美夜に向かって手を合わせる中条。大悟は初めて中条の人間らしい部分を見た気がした。

「そうよ、貴重な土曜の夜に宿直を替わつてあげたんだから、美味しいものでも食べに連れていってもらわなきゃ」

美夜は「お先に失礼します」と、スカートをつまんでお辞儀した。

バサツと音がしそうなまっげでウィンクまでして、なかなか萌えどころを心得ているなあ和大悟は感心する。事実、三人の男はポーツとその後ろ姿がドアを出ていくまで眺めていた。

「大悟、いつまでも鼻の下伸ばしてないで、わたし達も寝るわよ」
お父さんの前で危ういことを言う、と、冷や冷やする大悟だったが、誤解はされなかったようだ。いや、むしろ誤解されるようなことをしてみたいのだが。

メイド、初恋の人に会う

美夜は自宅マンションに着くなりパジャマに着替えた。白地に小さなデイベア模様の可愛いパジャマだった。ふつくらと重そうなバストとは対照的に少女趣味の持ち主である。

早速ベッドに入ろうと思ったが、お腹がグーッと鳴る。仕方なしにトーストを焼いて、部屋のだ真ん中のテーブルについた。こちらは白地にハート模様の丸テーブル。ちゃぶ台のような形をしている。トーストを焼いている間に引っぱり出してきた小早川の著書を片手に、パンにかじりつく。本から目を上げないまま、左腕を伸ばしてテレビのリモコンを巧みに操り、朝のニュースにセットする。ようやく買い替えた薄型のテレビは少し奮発したサイズだった。白い縁取りで可愛かったから、メーカーなど知らないで買ったものだ。「……容疑者を、小早川グループ恐喝未遂の疑いで逮捕しました」ハッと顔を上げた。背もたれも兼ねたベッドに背中をゴリっとやっつけてしまつて顔を歪める。

なるほど、本当に夢の中で解決した事件が現実でも。

一層期待をつのらせて本を読み進む。ところどころ飛ばし読みしながらも、読み終わったときには朝の十時を過ぎていた。

「あら、早く寝ないと」

ベッドに入って大きなデイベアに抱きつく。真っ白なシーツはいつも勤務に出る前に替えていた。帰ってきたときにサラサラの清潔なシーツで眠るのが何よりの幸せだったのだ。

夢の中で自由に動き回れる、例の明晰夢というのを見たい。そう唱えるようにして心の中で繰り返す。すると、なかなか眠れない。隣の部屋に暮らすOLが起きたらしく、朝風呂からドライヤーの騒音が延々と続く。デートかな、いいなとやっかみつつも、眠ろうと眠ろうと集中する。

佐藤君の仕事って案外大変なのかも。と、若干の『給料泥棒視』

を改めつつ、昨夜の大悟の驚き顔を思い浮かべてニヤニヤしてしま
う。ンギャツと変な声を出して気絶した様が愉快だった。初めて会
ったときからなんだか親近感を感じて憎めない子だと思っていたが、
お嬢様がわざわざ選んで連れてきた男の子だし……。私みたいなお
ばさ……。と、言いかけて心の声をストツプする。

夢を使って現実を変えられるなら、私はなんでもできる。お嬢様
より可愛くだってなれるし、素敵な恋人だって見付けられる。メイ
ドの仕事を気に入っただけだが、メイドを使うお嬢様にだってなれ
るんだわ……。などと妄想を繰り広げるうちに意識が遠のいていっ
た。

「上手くいったわ！」

思わず独り言を叫ぶ美夜。夢と知りながら自由がきく世界に目覚
めたのだった。

まずは何をしようかしら？ と、考え、身仕度をととのえようと
思い立つ。相変わらずのワンルームマンションではあったが、住む
ところは後で考えてもいいだろう。それよりもやりたいことがあっ
た。

鏡の前に立つて、「私は世界一美しく可愛い女の子！」と、唱
える。鏡の中の美夜がライnstーンのシャワーでも浴びたように
キラキラと光を放つ。光の洪水が止むと……。

「あら、あんまり変わってない？」

肌や髪の手やがよくなり、何年か若返ったような感じはした。し
かし、世界一美しいかどうかは疑問であった。元々の顔が嫌いでは
なかったが、もっとこう、ハリウッドセレブのような、ファッショ
ンモデルのような、近寄り難いような美人になりたかったのである。
そうか、いきなり別人になるほど変わったら、知り合いに会って
も気づいてもらえないからだ。と、気付いて機嫌を直し、シャワー
を済ませた。

バスタオルを巻いたままクローゼットを開けると、欲しかったけ

どちよつと手が出なかつたあの服やあのバッグなどがあつて、夢見心地になる。小早川家からもらう給料は安くはないが、女一人の都会暮らしだから備えを十分にしておこうと、節約気味に暮らしてきただのである。

こちらで贅沢をしたらリアルでツケが回つてこないかしら？ などと不安になりつつも、小早川の本を思い出す。不安に思うから不安な現実がやってくる。そう書かれていたのだ。つまり、素直に喜んでおけばいいということらしい。

あれもこれも着てみたいし身に着けてみたかったが、やり過ぎは禁物。だいぶ薄れたとはいえ、ファッションに対するコンプレックスが少しあつた。

中二で母と二人暮らしを始めるまでは父方の祖父、祖母と暮らしていた。美夜が幼い頃に離婚した父の家はお金持ちではあつたが、『古くは庄屋の』というような田舎くさい家だつたのだ。祖父や祖母と野山を散歩して、山菜や食べられるキノコ、食べられないキノコの種類などについては詳しくなつた。祖父や祖母が大好きだった。しかし、それがコンプレックスにもなつていた。

そうだ、あの人に会いに行つてみよう。と、思い立つ。私を田舎者呼ばわりしてからかつたあの人に。

メイド、初恋の人に会う 2

三船幸三さんの居場所は……。と、考えてみると、インターネットの地図で検索するようなビジョンが頭の中に浮かんだ。集中して焦点を合わせ続けるとズームが進み、目的地が判明した。昔、夜遊びに夢中だった頃の行動範囲に彼はいた。今で言うクラブ、昔で言うディスコがあったり、おしゃれなバーがある繁華街だ。地図をクリックするように決定の意思を念じると、その場所にテレポーターシヨンした。

隣の席に突然美夜が現れても、三船はさして驚いた様子でもなかった。人気の無いプールバー（ビリヤード台のあるバー）のカウンターで、細長い葉巻などくゆらしていた。三船と仲間達が入り浸っていた店では、マスターがいないときには常連客が店番していたのだ。

「やあ、こんな時間にお客なんて珍しい。何か飲む？」

昼間からお酒なんて思いつつも、夢の中だし、今日はお休みだからいいかとメニューを眺める。眺めている間に三船はシェイカーを振りだした。まだ頼んでないのと言いかけたが、何が出てくるのか楽しみになって抗議を取りやめる。

「ちよっとお手洗いに」

美夜は迷うことなく店内を歩く。店の様子は当時のままだ。カウンター席と通路を挟んでボックス席がいくつかある。窓辺のボックス席からは繁華街のビル群が見える。十二階に位置するこの店からは、夜になると夜景がそこそこ楽しめた。奥に進んでいくとビリヤード台が二つあり、さらに進むと手洗いがあった。

手洗いに入ったものの、用を足したかったのではなかった。バツグから財布を取り出し、中身を確認する。十分すぎるほどお金は入っていた。緊張していたのか少し汗ばんだ手を洗い、ハンカチで拭いて席に戻る。

「どうぞ」

ちようど出来上がったカクテルが差し出された。一口飲んでみて、美夜は確信した。

「幸ちゃん、覚えてくれたんだ」

お酒の強くなかった美夜のために考案された『バナナラム風バナナミルク』だった。三船は昼間の繁華街に遠い目をしながら葉巻をくわえなおす。

「元気だったかい？ 美夜子」

何度訂正しても『子』をつける呼び方まで当時のままだった。無言の微笑を交わす二人。

「……ところで、何か言うことはないの？ 綺麗になったねとか、んとか」

「どこがだよ？ お、そうか。ようやくバナナミルクが効いてきたんだな」

三船の視線が豊かに育った胸に注がれていた。もう……と、頬を染める美夜。

「幸ちゃんも変わらないわね」

短めに揃えられた黒い髪。薄紫のスーツを無造作に着こなし、レンズが大きいサングラスをかけている。

旧交を温める会話をしつつ、飲み物を賭けたビリヤードをしてはしゃぎつつ、しばしの時が過ぎた。

「いらっしやい」

入ってきた客を振り返ると、当時ちよっぴり苦手に思っていた女だった。美夜よりいくつか年上で、三船を取り合った仲だ。逃げだしたくなって三船に精算を頼む。

「おごるよ」

「ありがとう。……じゃあ、また来るわね。ごちそうさま」

知らんぷりして女とすれ違おうとしたが。

「ちよつと、あんた美夜なの？ 綺麗になったね」

捕まってしまうってそのまま少し立ち話をした。結局、その女の名

前を思い出せなかった。彼女はその後、別の男と結婚し、今では二
児の母であると聞いて、美夜は心置きなく店を後にした。

メイド、初恋の人に会う 3

美夜はマンションに戻ると化粧バッグを取り出した。蓋の裏全体が鏡になっていて、その鏡とにらめっこする。ライバルだった女は綺麗になったと言ってくれたが、肝心の三船にはどこも変わっていないと言われてしまった。こうなったら……。

「鏡よ鏡、私って世界一の美女でしょう？」

『世界一の美女は誰？』と訊ねるよりも、美女にしろという脅しのような口調だった。朝方と同じようにキラキラした光が美夜を包む。またしても少しだけ綺麗になったような気がした。

「で、世界一なのかどうか答えてくれないの？」

鏡からウーンとうなり声が上がった。

「そうさね、あんたは確かに器量よしんだけど、世界で何番目かと訊かれれば三百五十一万四千七百二十九位としか言いようがないのさね。ちなみに、今朝変身するまでは一千八百三十五万四千

……」

六、七十億の世界人口のうちの半数と比較してみれば、それでも大したものかと一応納得する。

そこへ、インターフォンが鳴った。受話器を上げると、カメラに咲希と大悟が映っていた。

「遊びに来ちゃった」

美夜の許可が出ると同時に二人は室内にテレポートしてきた。咲希は美夜の顔を見るなり奇声を上げた。

「どうしちゃったの？ 美夜さんすっごい綺麗になって。あ、さては……」

そのために明晰夢を研究したのがばれて、美夜は斜め上の何かを見るような目になった。石膏のように白い肌が、温度計みたいに見える赤くなっていく。

「て、照れた顔もまた……」

大悟はポケットと呆けたまま美夜の顔を眺め続けている。気を良くした美夜は二人にこれまでのいきさつを語った。

「へー、その人かっこいいの？ わたしも会ってみたいな」

やぶ蛇だった。この子達は次のデートを申し込みに行くところまで、きつとついてくる。暇を持て余してずつと尾行されるに違いないと、美夜は肩を落とした。

「鏡よ鏡、俺って世界で何番目のイケメン？」

美夜の話を聞いて興味を持ったのか、大悟も鏡に話しかけていた。「訊くのか？ 本当に訊いていいのか？ おまえへこまないか？」

鏡の声がなんだか大悟っぽい口調になっていた。

「いいからもったいつけるなって」

言いながらも大悟はゴクリとツバを飲み込んだ。

「十一億……」

そこまで聞いて大悟は化粧バッグを閉めた。部屋の隅っこで体育座りをしながらも、

「ま、まあ、好きな女に惚れられればいいことだし、野郎は顔じゃないよな！」

と、自分を励ましていた。

美夜はふとした好奇心から再度バッグを開け、鏡に問うた。

「鏡よ鏡、お嬢様は世界で何番目に美しいのかしら？」

「や、やめてよ！ 変なこと言われたら自信無くなっちゃうじゃない！」

慌てて閉じようとする咲希の手を大悟がつかんでいた。ニヤニヤする二人を見て、咲希は「もうっ」とふくれっ面をしつつも抵抗をやめた。

「これはこれは、見目麗しいお嬢様で。あなたほどになられますと比較することあまり意味など無いかと存じますが、どうしてもとおっしゃるなら。……八千三百三十二位と申し上げさせていただきます、はい。いえいえ、このレベルになられますと、もうあとは相手の殿方のお好みによると言いますか……」

ひたすら恐縮する鏡を美夜は力強く閉めたのだった。

「じゃあ、夜に寝られなくなると困るからそろそろ起きよっか」

ご主人様がそう言いだしたら二人は従うしかない。美夜は夢の中の家来ではないのだが、咲希の言葉にはなんだか逆らえない。

美夜と咲希は狭いベッドで横になり、大悟は絨毯の上でクッションを枕にした。

「なるほど、こちらで眠るとリアルで覚醒するんですね」

「そうよ。十分に眠ったら勝手に起きちゃうみたいだけど、あえて起きようと思うときにはこうするの」

会話が途切れると三人はすぐに寝息を立て、半透明の体になって消え去った。美夜は自室で、二人は小早川邸のそれぞれのベッドで目覚めたのだった。

メイド、初恋の人に会う 4

美夜は当直でずれ込む日以外は夜の十一時に眠る習慣があった。

昼間にたつぷりと寝てしまったから少し不安だった。それでも対策はしたつもりだ。夕方に河川敷でジョギングして体を疲れさせ、半身浴でリラックスし、レタスタつぷりのサラダと缶入り梅酒で安眠効果を狙った。ホットミルクを飲み終えて歯磨きを済ませ、いよいよベッドに入る。

べ、べつに幸ちゃんになんか会いたくないんだからね！ と、ツンデレ娘のように胸の高鳴りと格闘しつつ、気付けばナンマンダブと心の中で念仏を唱えていた。

祖父は困ったことがあつたとしても念仏を唱える人だった。田舎くさくてかつこ悪いなと苦笑していた習慣を、美夜はいつしか継承していたのだ。ちなみに少しひがみつばいところは祖母ゆずりである。私なんてもう古い先短いんだからと言い続けて十年以上もピンピンしている。要するに、自分が死ぬとか病気をするなんて本気で思っていないのだろう。

そうして育ての親、育ての故郷に思いをはせるうちに美夜は眠りに落ちていった。

寝る仕度をとくに済ませていた大悟と咲希は、テレビゲームに夢中だった。大悟が部屋でオフラインの格闘ゲームをしていると、咲希が訪ねてきて「わたしもやる」と言い出した。教えてやると上達は早かったが、それでも大悟に勝てず、ムキーっとなって何度でも挑戦続けた。

「明日から期末テストなんだろう？ こんなことしていいのか？」
パジャマ姿の二人は画面から目を離さず、操作を怠ることもなく会話している。

「普段からコツコツやってちゃんと理解してるから大丈夫よ。理解

した知識はちょっとやそつとのこととで忘れてしまいいんだから」

咲希の口調にひけらかすような感じは受けない。同じセリフもメガネの似合うガリ勉優等生が言ったなら、さぞ嫌味だったことだろう。自分を信じて疑わない。自分を愛するがゆえに自分という存在を最高に保っておきたい。そんなストイックさにも似ていながら、本人は苦労と思っていないだろう感覚がにじみ出ている。さすがはあんな本を書いた著者の娘だと少し感心する大悟だった。

「あ、そろそろ寝ないと美夜さんのデートが終わっちゃうわ」

大悟が時計を見た隙に、咲希のフィニッシュブローが決まった。

「あ、汚ねえぞ」

「いいじゃない、一回ぐらい女の子に花を持たせてくれたって」

そついうときばかり『女の子』かよとブツブツ言いつつも、大悟はゲーム機をしまう。

「それにしても、美夜さんのデートを邪魔しちゃ悪いんじゃないか？」

そんなにデートが気になるなら俺とどうだい？ と、言うべきか言わないべきか、それが問題な大悟。

「うちの美夜さんに悪い虫がついたら困るじゃないの」

おまえは母親か、と、突っ込みを入れたところだが、大悟にしても、仲良くなりかけた美人メイドさんがよその男とどうこうなるのはちょっと複雑な気持ちではあった。

「でも、悪い虫じゃなかったら？ お嬢様のせいで行き遅れたとか言って化けて出るぞ、あの人」

一度化けて出られた本人が言うのだから間違いない……かもしれない。

「まあ、『益虫』だったらわたしも邪魔なんかないわよ。ただ、美夜さんってちょっとずれてるところがあるから心配で……」

言いながら、咲希は『大悟のベッド』に横になった。

「って、ずれてるのはおまえのほうじゃねえか。……それとも？俺と一緒に？」

待ってました！ と、飛び込みたい大悟だったが、また何かの罠かもしれない。大悟は学習する家来だった。

「馬鹿なこと言っていないで、さっさと寝なさい。あんたはそっちな」
指差された安楽椅子にタオルケットを引きずっていく大悟。

「あ、そっか」

夢の中の城をまだ撤去していなかったから、咲希の部屋で眠ると危険な残骸の辺りに出るのだった。それで比較的ダメージの少ない大悟の部屋からあちらに出ようということらしい。

安楽椅子に沈んで目をつむる。革のいい匂いに混じって、なんだか甘やかな香りがしてきた。咲希がつけているコロンか何かだろう。隣に座ってゲームをしていたときには気付かなかったが、目を閉じたことで感覚が鋭くなっているのかもしれない。鼻をクンクンさせるとはニヘラーっとだらしない顔をする大悟。咲希はといえば、既に可愛い寝息を立てている。まずい遅刻する、と緊張しつつも近くにいつて寝顔を見てみたい。もうちょっとそばでクンクンしてみたい。

大悟はついに我慢できなくなって立ち上がる。抜き足差し足でベツドに忍び寄る。

「あれ……なんだか……あしがおもい……」

体の力が抜けて、まぶたが落ちてくる。咲希の寝顔を見てにやけた瞬間、大悟はベツドに突っ伏した。

ガスマスクのようなものを着けた中条が、部屋の入り口でうちわをあおいでいた。小早川グループ各社の名前が入ったうちわだった。中条は香炉の中身をひねり潰してガスマスクをはずす。

「ハーブ由来の成分だけで、これほど効果があるとは興味深い」
満足そうにうなずいて去っていく中条だった。

メイド、初恋の人に会う 5

「それにしても、間違えたな。あの美夜っ子がこんなに綺麗になるなんて」

美夜は三船の助手席で、口元にクールな笑みを浮かべていた。ようやく本懐をはたして饒舌になりたいところだったが、大人の女を演じてみせる。三船の真っ赤なイタリア製スポーツカーは、夜の繁華街を抜けて埠頭に向かっていた。

美夜はメイク中に鏡と相談して奇抜な格好をしていた。少々野暮ったくも見えるワンレングスの髪。エナメル素材のボディコンは目が痛くなるようなショッキングピンクで、背中が大きく開き、スカート丈もギリギリのセクシー過ぎる姿。眉毛も太めのザ・バブル期ファッションだった。

三船はといえば、黒いTシャツとジーンズ。愛用のサングラスを前髪にのせて、肩には白いカーディガンを結んでいる。腕には貴金屬の部類に入るごっつい時計をしていた。

スポーツカーの爆音が道行く人々を振り返らせ、痛いぐらいに注目される。

「みんな美夜子に注目してるぜ？」

三船は若い女の集団を通りすぎるたびに、派手なダブルクラッチを使って空ぶかしした。

「今の子見たか？ 結構マブイ女だったぜ」

デート中によその女を物色して歩く三船。まあ、この人らしいやと目を細める美夜だった。

「本当はへりで夜景でもと思ったんだが、あいにく予約が取れなくてね」

そこで一晩かけて湾内を回るクルージングデートにしたという。埠頭につくとスポーツカーを無造作に止めて乗り捨てる。こんなところに止めて悪戯とかされないの？ と、心配になる美夜だった

が、あくまでもクールを決めこんだ。

二、三百人は乗れそうな客船は豪華なものだった。しかし、ほぼ貸し切りと言ってもいいぐらいの乗船率である。

「不景気なのね……」

美夜はデッキからの暗い海を見つめてつぶやく。

「まあ、野暮なことはいっことなしだぜ」

正装をしたボーイさんからウエルカムドリンクのシャンパンを渡され、二人はグラスをそつと掲げる。

「君の瞳に乾杯」

「誰にでもそういうキザなこと言ってるんでしょ……」

「可愛い子限定だよ」

肩を抱かれた美夜は、三船の肩に頭をもたれさせて寄り添うのだった。

大悟と咲希は夢に入るなり城の撤去を済ませた。

「とりあえず、更地にしといてもいいんじゃないか？ あとは明日からゆつくり作れば……」

咲希はおかまいなしといった様子で、城跡の更地に手のひらを向けた。

「もうちよつとこっちに来て……」

人気ひとけの無い夜の空き地で二人きり、これは今度こそと期待する大悟だった。が、

「だから、もつと離れないと危ないってば。人柱にでもなつて我が家に骨を埋めるつもり？」

やっぱりな、と、ため息をついて咲希に近寄る大悟。咲希のテリトリー空間を侵さないギリギリの距離を保った。

咲希がえいっ！ と掛け声をかけると、ボウワーンと白煙のようなものが上がり、リアルのものでそっくりな小早川邸が復活した。

「なんだ、そんな簡単だったなら城も自分で作りゃよかったのに」
「住み慣れた家だからイメージがかたまってるのよ」

そんなことより、と、咲希は目を閉じた。これはチューの催促ではない。大悟はもはや悟った。咲希という子はたまに意味深な行動をとるが、それは大悟を男として意識していないという大前提に基づいているのだと。好きな男の前でガードを解くのではなく、元々がノーガードなのだ。

「見つけたわ。埠頭からクルージングデートに出るところみたい」
差し出された手を握るべきか握らないべきか迷う大悟。大悟自ら美夜を探すという二度手間を省くためだろうと思い、えいやっ！
と手をとった。

しめた、怒られないぞと思った瞬間、二人は埠頭にテレポートしたのだった。

メイド、初恋の人に会う 6

出港してからしばしの時が過ぎ、大悟と咲希は目当ての二人を発見していた。盗み聞きまでするつもりはありませんよという距離を保ち、デッキから夜景を眺めている。歩くような速度で流れる景色まるで、船が動いているのではなくて、華やかに電飾した街がパレードしているように見える。

「なんか美夜さん、すごい格好だな。昔はデイスコで鳴らしたイケイケ姉さんだったのか？」

盗み聞きをするつもりなど無かったはずが、段々とにじり寄る咲希。

「まずいつて……こつちの話だつて聞こえちゃうだろ……」

突然咲希が抱きついてきた。こればかりは間違いようが無いと、大悟は熱く抱擁して応える。

咲希は背伸びしながら、大悟の耳にヒソヒソ命令を出した。

「（あっち向きなさい。気付かれるわ）」

美夜には尾行する旨がばれているし、相手の男とは面識が無いのだから大丈夫だろうと思いつつも、大悟は命令に従った。役得とばかりに咲希の髪を撫で、滑らかな感触にため息を漏らす。

「あら、あの二人」

美夜がそう言うのを聞いて二人は硬直した。いつそう強く抱き合つて、合わせた胸から鼓動を共有する。大悟の胸にはみつしりと『柔らかい物体』が押しつけられているのだから、心臓はパンク寸前だった。

「あの人達がいなくなつたら私達もやってみましょうか？ ……ちよつと恥ずかしいけど」

どうやら別のカップルのことを言っていたらしい。上機嫌そうな美夜の声につられて見ると、両手を広げて船首に立った女性を、男性が後から抱く姿があった。「私、飛んでいるわ」という、例の映

画のワンシーンをやっているのだろう。

「お、美夜子はあの映画もう見たのか？」

「やだ、何年も前のことじゃない。どうせ、幸ちゃんなら女の子と何回も見たんでしょう？」

「まあな」

クスクス笑いが止んで静かになる。大悟が横目で見ると、男の手が美夜の背中をさすり、よどみない動きで抱き寄せて唇を合わせるのが見えた。

「ふむふむ、なるほどな」

抱き合ったままの咲希の背中をさすり、そつと顔を寄せてみる。咲希は切なそうな赤い顔をして目を潤ませている。これはいける、夜の船上デートで昂ぶり、たとえ一夜のあやまちだったとしても……。

「ご主人様……じゃなくて……咲希……好きだよ」

お手本を真似た大胆さで接近を続ける大悟。足の甲に鋭い痛みを感じた。きつと咲希が脱力してバッグでも落としたんだろう。ここで引いたら男じゃないとばかりに、かまわず口付けた。

「ん〜！」

小顔のキャンバスに見事に整列した目鼻、そして柔らかな唇。恥ずかしがっているのか、目をきつくつむっている咲希。眉間に縦のシワを寄せる咲希。こめかみがヒクヒクと震える咲希。

咲希の左手が大悟の後頭部に回り込み、よりいっそう強く口付けた。魅惑的な感触に大悟は脱力気味になる。そして、大悟の脇腹に突き刺さる痛烈な右フック。

「んぐっ……」

鈍いうめき声を咲希の口中に漏らし、大悟の腕が落ちる。咲希は知らん顔して海に目を向けた。

「（あんだ興奮しすぎ。熱でもあるんじゃないの？ あゝ暑苦しい）」

なるほど、赤い顔は抱き合って体温が上がったせいだったのだから

う。それにしても、キスそのものは怒られなかった。間違いじゃなかったのか？ と、また咲希の肩を抱く。ペチツと手の甲を叩かれて目を落とす。足下にバグはおるか、なにも落ちていなかった。足を踏まれたんだ。そしてフックを決められたんだ。やっぱり全面的に拒否されてたんだといじける大悟。

「そろそろ……行こうか？」

男がジャラリとキーを出して見せた。船室をとつてあるのだろう。これはもう帰るしかないかと、顔を見合わせる十代の二人。

「そんな、今日再会したばかりじゃないの……また今度にしまし
よう……」

美夜は声に笑みを含んだまま、サラリとかわしたようだ。

「いいじゃないか。知らない間柄でもないだろ？」

「だめよ。女の子には心の準備があるの」

美夜の声から甘さが消え、ピシヤリと釘を刺すようだった。

「乗りの悪い子は嫌いだよ。美夜子は、まだお子ちゃまのままかい？」

「そ、そんなこと……ないわよ……」

押されている。今晚落としたいという男の心境が分からなくもない大悟だが、美夜さん頑張れと応援してしまう。

「最低三回はデートしてからって田舎のおばあちゃんに習ったのかい？」

「田舎者扱いしないでよ」

「じゃあ、都会の女らしくイケイケでいいだろ？」

「もう……しょうがないわね……」

まんまと挑発に乗せられてしまった美夜。肩を抱かれて歩き出してしまふ。双方合意の上なら俺達の出る幕じゃないのかと地団駄を踏む大悟。そこへ咲希が頓狂な声を上げた。

「ねえ、見て？ あの人達ってば仮装パーティーか何か？」

バブルよ、バブルを引きずってるんだわ、うける〜と大声で笑う咲希。男はしかめっ面して咲希に詰め寄った。

メイド、初恋の人に会う 7

「君、失礼じゃないか。僕のことはどう言ってくれてもかまわないが、彼女に謝ってくれ」

おっと、実はいい奴？ と、意外な顔をしながら大悟が謝った。咲希はツンと険しい顔をしてそっぽ向いている。美夜は申し訳なさそうにして小さくなっている。

「謝ってもらいたいのは君じゃない、こっちの失礼な君のほうだ」

三船はビシッと咲希を指差した。美夜が男の袖を引いて制止する。「いいの、この子達知り合いだから。私が嫌がってると思って気をきかせてくれたんだわ」

そうか、と、引き下がる男。美夜がそれぞれを紹介して、いくらか空気が和んだ。

「ところで美夜さん、ずいぶんとセクシーな格好だね。ま、まあ……俺としてはそういう美夜さんも……嫌いじゃないけど」

大悟が目のやり場に困っているのに気付いたのか、美夜は頬を染めてうつむく。

「鏡に相談したら、幸ちゃんの好みはこれだって言うから。……ちよつと着替えてくるわ」

美夜がいなくなったことで、またしても陰悪ムードになりつつ、しばし待った。

美夜が現代人に戻って帰ってきた。黒いパンツスーツと下ろしたままの髪。色気こそ半減だが、無造作がかっこいいお姉さんといういでたちだった。眉も細くなっている。

「またそんな色気の無い格好か。せつかく垢抜けたと思ったのに」お泊まり拒否の姿勢と受け取ったのか、三船は腕組みをしてぶっきらぼうに言ったのだった。

「ねえ、幸ちゃん……あなたひよつとして……事故か何かで植物状態だったりするの？」

「なんだって？」

「だってあなた、……トレンディドラマの時代から何も変わっていないんだもの」

そういう考え方も出来るかと大悟は手のひらを打つ。しかし、リアル之三船はピンピンしているそうだ。そのまま話し続けると、三船の着ているものが入れ替わっていく。腕時計は安っぽいデジタル時計に。ジーパンがよれよれになったかと思うと、その上にゴムのかつぱが出現した。薄汚れたポロシャツにウィンドブレーカー、頭には野球帽をかぶっている。

「そうだよ……これが俺の本当の姿だ……」

しまいには客船の存在感が薄れてくる。

「三船さん、いじけるのはかまわないけど、他の乗客を巻き込まないでくれ！」

強く恥じ入る気持ちで『こんな船じゃないや』とでも思ったのだろう。だが、本人は全くその迷惑さに気付いていないらしい。三船は夢を操れることを知らない、ごく一般的な人間のようなだった。

咲希が非常ベルを鳴らす。大悟と美夜は手当たり次第に乗客乗員にタッチして超能力を使い、港に送り返した。

間一髪、無事に避難が済んだところで、客船は中型の漁船に変わっていた。大きな電灯が沢山ぶらさがったイカ釣り船だ。

洋上の真っ暗闇の中、椅子が一つだけの狭い操舵室の明かりだけが頼りだった。三船は苦々しい口調で語りだす。

「バブル崩壊と同時に会社が潰れてね。田舎に帰って今ではイカ釣り漁師ってわけさ……みじめだろ？」

美夜は、節くれ立って汚れた三船の手を愛しげに握る。

「そんなことないわ。あの頃はみんなどうかしてたもの。こういうお仕事って地に足がついて……海の上だからついてないのかしら……でも、立派だと思うわ。おしゃれなレストランのिकासミパスタだって、幸ちゃんみたいな漁師さんがいるから作れるんじゃないの」

「ま、まあな……」

咲希はポツリと呟いた。

「わたしもちょっと言い過ぎたわ。ごめんね、三船さん」

三人がかりで励ますうちに、三船は「よっしゃ！」と掛け声をかけて立ち上がった。大きな電球が一斉に点って青白く光った。直視できないほどの漁り火で、船上だけが昼間のように明るくなる。

「おまえらに美味しいイカ刺し食わせてやるぞ！」

三人の素人を交えた漁は賑やかだった。大悟は滑って転び、美夜は酔いかけて空中に浮かび、咲希は釣り上がったイカを怖々と指でつつついた。

船の中央にある『いけす』がイカだらけになると、三船は後片付けを始めた。

「美夜子、イカさばいたことあるか？」

「もちろん、私は有能なメイドなんだから」

二人が手際良い分業を始めると、入っていく余地もない大悟と咲希。

「なんか、夫婦めおとづね船みたいだな。美夜さん、このまま寿退社か？」

美夜はなんだか寂しそうに首を横に振った。

「三船さんの手に指輪があるのが見えないの？」

咲希に「空気読め」とでもいうような口調で突っ込まれる。

「ばれたか。大人になった美夜子と一晩ぐらいデートしてもいいかと思っただけだな」

三船は今では三児の父で、幼馴染みだった嫁さんの尻に敷かれていたのだという。三船は美夜を田舎者扱いして一線を引いていたが、それは若すぎた美夜を案じての口実だったそうだ。当時、美夜はまだ十四歳の中学二年生だった。一緒に暮らすまでに数回しか会ったことの無かった母との二人暮らしで、少々『グレた』時期があっただという。

「まあ、たしかに少し垢抜けないところはあったが、それはみんなお互い様だろ？ 誰でも田舎から出てきて内心オドオドしてるもの

さ。それにしても、美夜子はあの頃からいい女だったんだぜ」

「逃がした魚は大きかったでしょ？」

「漁師だけにな」

決まったとばかりに笑い声を上げる三船と美夜。「大人のジョーク」に多少ついていけないものを感じる若い二人だったが、つられて微笑んでいた。

「あいよっ、一丁上がりっ！」

美夜がこしらえたイカ刺しは鮮度が良すぎてバキバキした食感だった。足の部分などは口の中でもまだ踊っていた。女二人はキヤーキヤーはしゃぎ、大悟は勧められたコップ酒を「来年まで待つてください」と辞退する。代わりに飲まされた美夜はトロンとした目付きで三船に甘えだした。

「じゃあ、わたしたちは気をきかせて帰るとしますか。でも、不倫はだめよ？」

ウィンクして大悟の手をとる咲希。美夜が気の抜けた返事をするのを見届けて、二人は屋敷に戻ったのだった。

お嬢様の天敵

その日大悟が目覚めると、枕元に『願って確信したことは実現する（愛蔵版）』が置かれていた。小早川パパが約束通りサイン本にして置いていつてくれたようだ。革張りに金文字のタイトルや意味ありげな模様が凹凸に加工された豪華な本である。その様子はまるでありがたいお経か秘密結社の魔導書か何かのようであつた。いかにも効き目のありそうな本だなど大悟は思う。

それにしても、寝ている間に誰でも出入りし放題なんだなと苦笑いしてしまう。母一人子一人で育つた大悟には夜中にこっそりサンタさんが来てくれたことなど無かつた。母は優しい人だが、ちよつとドライな性格で、大悟が小さな頃からクリスマスプレゼントは手渡しだつた。誕生日プレゼントにしてもサプライズを仕掛けることなど無く、「そういえば誕生日だつたわね」と、買い物に出たついでに何か買ってくるような方式だつた。

母さん元気かな？ と、携帯に手が伸びかけてためらう。きちんと就職するまでは母さんに電話しないと決めていたのだ。小早川家の待遇は悪くないし、まともな就職先と言えないこともないが、それでも母さんにどう説明したものか。

「便りが無いのが良い知らせで、母さんも元気だよな？」

大悟は豪華サイン本を手に再びゴロンと横になつた。一時期は何度も何周も読み返した本だつたから、内容に取り立てて目新しいところは無い。

ページをパラパラめくりながらも、大悟はとある雑念を膨らませていた。教科書を開いた途端に掃除をしたくなるように。いや、それどころか若い大悟の煩惱はもつともつといかがわしいものだつた。生活苦から抜け出せたことだし、一応、毎日可愛いお嬢様と行動を共にしている。年上のお姉さんであるところの美夜さんともお近づきになれたし……、と、大悟の暮らしが奇跡的な大変化を遂げた

のは間違いなかった。しかし、何かが足りない。そう感じていた。

「……やっぱ、モテてみたいよね」

思わず出た独り言だった。美夜の鏡には十一億……と言われてしまったことだし、俺って実はかわいそうなやつだったのか？ と、余計なことに気付いてしまった。気付いてしまつと愛されてみたくて仕方が無くなってしまふ。

母親以外の女性に愛されてみたい。できることなら『あんなことや『こんなこと』もしてみたい。足を踏み付けられたり、強烈な右フックをもらうことなくチューしてみたい……。でも、咲希にそこまで望むのは難しそうだし、咲希以外の女の子とそういうことになったら、ひよつとしてクビにされるかもしれない。咲希は快適な犬小屋と美味しいドッグフードをくれるが、鎖だけは解いてくれないご主人様だと思った。こうなったら向こうから訪ねて来てくれる可愛い子を待つしかない。そう結論して、朝食に向かう大悟であった。

お嬢様の天敵 2

咲希はこの日から期末試験で帰りが早いはずだったが、「ちよつと買い物して帰るから、夕ご飯までには戻る」と連絡があつた。わざわざ大悟の携帯に知らせてきたのだから、ちよつとは気にかけてくれているのかもしれない。そうか、俺は少し焦りすぎていたのか。こうやってゆっくりお嬢様と仲良くなり、いずれば……。大悟はムフフとほくそ笑んだ。

咲希が帰つてこないなら暇だからと、パソコンのスイッチを入れる。夕方までならネットゲームのキャラクターを一つぐらいレベルアップできるかもしれない。

そう思つた矢先、ドアがノックされた。美夜だつた。

「大悟君、ちよつといいかしら……？」

手招きしている様子から、どこかについてきてほしいということのようだった。大悟は立ち上がったばかりのパソコンをシャットダウンして美夜について行つた。

案内されたのはメイド詰め所だつた。その響きから禁断の花園を想像して近寄りがたかつた部屋だ。

入ってみると、右手にスチールのデスク。その脇に同じくスチールのロッカー。左手に客間よりはいくらか簡素なベッド。奥にユニットバスの浴室等があるだけの部屋だつた。なーんだ、と、ちよつと幻想を打ち碎かれた気がしながらも、ふとした疑問が浮かぶ。

「メイド詰め所って言つても、美夜さん以外にメイドさんなんていたっけ？」

「いないわよ」

常勤の使用人は中条と美夜の二人だけで、小早川夫妻が『長期滞在』する場合や、ゲストが来た場合などには非常勤で人員を補充しているそうだと、いうことは、ここは美夜専用の控え室である。ちなみに、勤務時間の長い中条にはきちんとした部屋が与えられて

いた。

そう気付くと大悟は途端にぎくしゃくしてしまう。女の子の部屋に「大悟君、ちよつといいかしら……」と呼ばれたのだ。そういえば『佐藤君』ではなく、『大悟君』と名前で呼んでくれている。これはひよつとして……。

「ちよつと暑いわね……」

美夜はメイド服のフリルエプロンをはずし、背中を手を回した。ファスナーが下がると紺色のフレアワンピースがストンと落ちる。

「ちよ、ちよつと、美夜さん!？」

大悟は頓狂な声を上げつつも、ああ、思えば長い道のりだったなあと不毛だった青春時代を振り返る。中学の頃に付き合った彼女とは何度かキスをしただけだった。それ以来、その思い出だけを牛の胃袋みたいに何度も何度も反芻して生きてきたのだ。つい最近、咲希ともキスを交わしたが、受け入れられてしたことではない。

「冷房をきつくすると体に良くない気がして。……大悟君も暑かったら脱いじゃっていいのよ？」

ああ母さん、僕はいよいよ大人になるみたいです。姉さん女房は金のわらじを履いてでも探せというし、僕の運命の人はきっとこのお姉さんなのでしょう。世界で三百五十一万四千七百二十九番目に綺麗な人だそうです。お嬢様よりはいくらかランクが下だけど、僕には勿体ないぐらい素敵な人なんです。今度の休みにでも就職の報告がてら二人で帰ります……と、あらぬ方向を見つめて呆ける大悟。

「……大悟君、大丈夫？ 顔が真っ赤よ？」

大悟の目の前で美しい白い手がヒラヒラしていた。いつのまにやら美夜は黒いデニムのホットパンツと、白地にピンクの英文字が入ったタンクトップ姿になっている。その上にフリルエプロンを着け直しているところだ。

またいつものやつか。と、大悟は肩を落とした。お手、おかわり、待てをされたままご褒美をもらえずに放置されたような顔だった。

「あらあら、何か期待させちゃったかしら？」

これまでは咲希と『大人の』中条しか屋敷にいなかったから、ついつい横着をしてこのような着替えをしてきたそうである。風呂掃除やプールの管理、火力の強い厨房での作業など、メイド服では暑苦しいことが多々あって、いつでも脱げるように下に薄着を着込んでいるのだとか。

それにしても、真っ白な太ももがお尻にかわる境目まで見えそうなホットパンツ姿は刺激的だった。そんなきわどい格好にエプロンをしている様は、まるで新婚の夫を待ち焦がれるエッチな若妻みただ。

「……ねえ、聞いてる？」

「……あ、はい」

耳から入って素通りしていった言葉の断片をつなぎ合わせてみる。どうやらパソコンの修理を頼まれているらしい。一応提出した履歴書に『特技パソコン自作』と書いたのでも読んだのだろう。

美夜に出してもらったドライバーでケースを開けると、換気用のファンに綿埃が詰まっていた。それでCPUが高温になりすぎて自動でシャットダウンしたらしい。

「やだ、こんなに汚れてたなんて……」

広い屋敷を隅々まで清潔に保っているメイドのプライドが傷付いたのか、美夜は涙目になって頬を赤らめていた。

「ま、まあ、パソコンを開けていじる習慣が無ければこんなものじゃないかな」

大悟は言いながら応急処置として綿埃をつかみ出し、集めたものをゴミ箱に捨てた。起動してみると正常に動くようだった。

「とりあえずはこれで大丈夫。でも、あとできちんとエアースタ―使って掃除したほうがいいかもね」

「見ちゃった以上、掃除したいのは山々だけど、怖くてパソコンなんて開けられないわ」

「じゃあ、やってあげるよ」

どうせ暇だしと申し出たことだが、美夜は「やった！」と、両肘

で胸を寄せて上げるような可愛らしいガッツポーズで喜んだ。

「いつも鍵なんてかけていないから、時間が空いてるときにでも来てやっておいてもらえるかしら？」

女の子がいつでも部屋に入っていいなんて言うのだから、大悟に気を許しているのだろう。そう思うと大悟はまた有頂天にならずにはいられない。他に困っていることは？ と、訊ねてパソコンの操作やアプリケーションについてあれこれ質問され、次々に解決した。「大悟君って実は凄い人だったのね。見直したわ」

『実は』が余計だと思いつつも、美人のメイドさんにほめられて悪い気はしない大悟。また少しお近づきにもなれたし、セクシーな姿を拝めて良かった。と、ポジティブに考え直すのであった。

「それにしても、この広い屋敷の家事を一人でやってるなんて、美夜さんこそ凄いと思うよ」

ほめられっぱなしで居心地が悪くなった大悟は、つつい美夜をほめ返した。美夜は満更でも無いという顔をする。

「実際やってみると大したことじゃないのよ。お嬢様も中条さんも大人しい人達だから、普段使うスペース以外は定期的なお掃除だけで済むの。お料理は好きだし、お洗濯だって人数が少ないから普通の家庭とかわらないわ」

ふむふむ、これは俺も大人しく暮らさないと美夜さんに迷惑がかかるんだなと考える大悟。まあ、暇だし、美夜さんのアシスタントでもしていれば肩身が狭くなくていいかもしれない。それに、そうやってお近づきになれば……。優勢に進んでいる将棋でも指すようにしめしめとほくそ笑む。

「ところで、まだお洗濯物が出てきてないけど、あんまりため込まないで出してちょうだいね」

「あ、でも……パンツとか恥ずかしいし、自分で洗うからいいよ」
「お嬢様の分だけで洗濯機を回すのつてもったいないから、遠慮しなくていいのよ？」

相手はプロだし、まあいいかと考え直す大悟。

美夜は直ったばかりのパソコンで夕食の献立について検索を始めた。レシピを探しているのではなくて、目新しい献立を考えるために参考にしているらしい。

そこへ、インターフォンのチャイムが鳴った。屋敷じゅうに設置されたスピーカーから全館放送されているようだ。ピーンポーンという柔らかい音が間を置いて何度か鳴り続けた。

「あら、中条さんいないのかしら？」

来客の応対は中条がすることになっているようだ。しかし、中条が出られないときには仕方がないだろう。美夜は壁に設置された受話器を取った。この受話器も屋敷のあちらこちらに配置されている。

「……お嬢様のお友達だって。私はこれから夕食の仕度があるし、ちよっとお相手して差し上げてくれるかしら？」

ようやく手伝えることが出来てホッとする大悟。出迎えてみると咲希と同じ制服を着た女の子だった。お嬢様のお友達というから女の子だろうなとは思っていたが、またしても可愛い女の子の登場である。

お嬢様の天敵 3

大悟は、咲希の友達こと芳野唯依よしのゆいを応接間に案内した。キヨロキヨロと邸内を見回しては「すごい！」と声を上げるのだから、今までに遊びに来たことはなかったのだろう。そんな『お上り（のぼり）さん』状態の唯依だが、仕草などから、育ちが良さそうなオーラを感じた。

大悟の母校でもある高校の制服は男女ともにブレザーだった。一学期末だから唯依は夏服姿である。女子の夏服は白いブラウスにグレーと白の明るいチェック柄のプリーツスカートで、サマーセーターの袖を無くしたような紺色のベストをだぼっと着ている。背は咲希よりもだいぶ小さく、ひよっとしたら百五十センチもないかもしれない。スカートは短め、サラサラストレートの髪は腰までの長さだ。あどけない顔付きといい、まるでお姉さんの制服を借りて着ている中学生みたいだが、ロリ属性がある男子にはたまらないんだろ
うな、と、大悟は『鑑定』した。

「あの、そんなに舐めまわすような視線で見ないでくれませんか？」
唯依は自らを抱き締めるように腕を交差させて胸をかばった。しかし、かばうほどのものか？ と、大悟は思う。ペタンコだった。
「あの……先輩って女子高生萌えなんですか？」

大悟はギクリと硬直した。つい今朝方、咲希の制服姿を「やつぱり女子高生はええの〜」と、ジットリした視線で眺めて白い目で見られたばかりだったのだ。

「あれ、今なんて言った？ ひよっとして俺のこと覚えてるのか？」
「はい、元生徒会長の佐藤先輩」

ああ、存在を認めてもらうというのはいいものですね。と、大悟はジーンときた。胸が多少控えめだったとしても、この子は絶対にいい子だ。とっても素敵な子だ。と、鑑定に手心を加え直す。

「ところで、咲希ちゃんは？」

寄り道して夕方まで帰らない旨伝えと、「テスト期間中なのにずいぶんと余裕じゃないのよ!」と、急に怒りだした。キーっとハンカチでも噛みそうな勢이었다。そして、妙なことを言いだした。「どうして咲希ちゃんばかりこんな大きなお屋敷に住んで、お勉強もスポーツもなんでもできて、可愛くて、かつこいいダーリンがいて……」

聞き捨てならないセリフが飛びだして、大悟は思わず遮った。

「咲希って誰か付き合ってる人いるのか?」

考えてみればあんなに美人で非の打ち所がないお嬢様だ。ちょっと大悟をぞんざいに扱うものの、性格だって悪くはないだろう。……同級生かもしれないし、ひょっとしたら中条さんと? 憶測が脳裏を駆け巡る。ただでさえ教え子に手を出す家庭教師がいるというのに、中条は完璧人間のスーパーマンで、しかも執事だから毎日一緒にいるのだ。そう考えてみれば末期ガンでも宣告されたみたいに、何もかも手遅れな気がしてくる。

「あれ? 先輩と同棲してるのかと思ってたんですけど……」

たしかに同棲といえば同棲だが、使用人として雇われているだけだと説明する。

とりあえず、同級生の女の子がそう勘違いしていたのなら、学校に彼氏がいるという線は消えそうだ。大悟はホッと胸を撫で下ろした。すると、唯依もなんだか似たような表情をしていた。

「佐藤大悟急募なんて張り紙をしてたから、学校で少し噂になってるんです。でも、よかった」

自業自得とはいえ、学校で変な噂が立って大丈夫かなと咲希のことが心配になる大悟。あれ、でもなんで唯依が「よかった」なんて言うんだ? と、不思議に思う。思ったが、近頃上手い話に乗っかってがっかり続きだったからと慎重になる。

「ところで、咲希になにか用事だったのか?」

「はい、えと、その、……ちよっとお勉強を教えてもらおうと思いまして。咲希ちゃんってテストでも毎回学年トップなので」

そういう予感はしていたが、改めて学年トップなどと言われると『高嶺の花』感が増してくる。俺も苦学生でもいいから大学行けば良かったかなと、大悟は後悔した。

「学年トップか。夢みたいな話だな」

「でしょ。私も学年トップになってみたくて」

唯依は「実は……」と、ある計画を告白した。

「ちよつと待て、俺は咲希の使用人だぞ？ 言ってみれば咲希の仲間だ」

咲希がいるせいで万年二位の唯依は、勉強を教えてもらうためではなく、咲希の試験勉強を妨害しに来たのだという。丁度いいから先輩も手伝ってと言いだしたのだった。

「まあ、トップになってみたいっていう気持ちが分からなくもないが、相手を妨害して勝つてのはどうかと思うぞ？」

唯依は突然グスングスンと鼻を鳴らし始める。

「……私だつて……頑張ったんだもん……でも、勝てないんだもん」大悟は幼女趣味ではなかったが、喜怒哀楽の激しいちびっ子のような少女を憎めないなと感じた。さすがに妨害活動の片棒をかつぐ気はないが……。

「ちよつと待つてくれ」

ティッシュ箱を差し出して応接間をあとにする。

自室から小早川の本を持ってきて唯依に手渡した。サイン本をもらつて一冊余つていたのである。

「いいか、このことは咲希には内緒だぞ？ これは咲希の親父さんが書いた本だが、たぶんこれが咲希の完璧さの秘訣だと思う」

「そんな凄い本を……いいんですか？」

こいつ、嘘泣きか？ というほどに、唯依はケロツとした笑顔になった。渡された本を大事そうに胸に抱きしめている。

「先輩からプレゼントもらっちゃった！」

内股気味の足をジタバタさせて、心底嬉しそうだ。

大悟の胸にズキンという衝撃が走る。しかし、これは畏だ、こ

いつはとんでもない女狐に違いないと大悟の中の警報がけたたましく鳴り響いた。

「さてと、明日も試験だろ？ そろそろ戻って勉強したほうがいいよ」

唯依は「はい」と、聞き分けよく返事して帰っていったのだった。

お嬢様の天敵 4

咲希は帰ってくるなり中条との授業に入り、大悟は美夜と二人で夕飯を済ませた。咲希を待たなくていいのかと訊ねてみたが、気にすることは無いということだった。お嬢様なんて呼んではいるが、家族のように、三人兄妹みたいに過ごしてきたそうだ。滅多に家にいられない両親が、兄や姉のような役回りも兼ねて二人を雇ったということらしい。

大悟は自室で一風呂浴びて、早く就寝のお許しが出ないかなと待ちわびていた。居眠りしないように、それでいて興奮し過ぎないように、海外のコメディドラマなど見て時が過ぎるのを待った。

結局、日付が替わる寸前になって咲希が訪ねてきた。淡いピンクのバスローブを羽織っている。

「そろそろ寝るわよ。おやすみなさい」

内線電話で言えば良さそうなものを、けっこう律儀なやつだと感心する大悟。咲希の顔を見て用件を思い出した。

「そういえば、昼間友達が来てたぞ」

「あら、誰かしら？　そういう用件は早く言ってくれなきゃだめじゃないの」

名前を思い出そうとしたが、一度聞いたきりの名前をなかなか思い出せない。

「うーん、なんて言ったっけあの子……背はちんちくりんで、ツヤツヤの髪がお尻ぐらいまで伸びて……」

すっかりしなさいよとも言いたげな細い眼で見られる。

「あ、そうだ！　テストで毎度学年二番手っていう……」

咲希はゲツと言った。お嬢様なのに、はしたなくゲツと驚いた。

「まさか芳野が……うちに……来たの？」

「そうだ、芳野唯依ちゃんって言ったな。やっぱり類は友を呼ぶっていうか、美人の友達は美人なんだな」

ついつつかり咲希が美人であると堂々と言ってしまつて赤面する大悟。何か突っ込まれるかと待ちかまえたが……。

「あいつ、なんでうちがわかつたのかしら……教えてないのに……」
咲希はブツブツ呟いている。駅を降りて、タクシーの運転手に「小早川さんのお屋敷まで」と言えばまずここに案内されるだろう。遠くから咲希を眺めて幸せになつていた時期の大悟でさえ知つていたぐらいだ。一年ちよつともの間、同級生をやつてきた唯依が知らないと考えるほうがおかしい。しかし、咲希はそんなことにも気づけないぐらい動揺しているらしかつた。

「そんなに仲悪い子なのか？」

「仲が悪いっていうか……」

なんでもかんでも一番になりたくてしょうがない子なのだという。それを咲希が悪気無く邪魔してしまふものだから、咲希を目の敵にして付きまとつているらしい。

「あいつ、勝手にわたしのライバルで大親友を名乗つているのよ。ほら、あいつつてば小動物みたいに可愛いくて、泣いたり笑つたり賑やかで、その上計算高いから……」

ほめているのかけなしているのか分かりづらいが……。要するに、男女問わずにクラスメイトからの人気を集め、その発言力の大きさでなんでも思い通りにしてしまうらしい。咲希としても、そんな危ないやつを敵に回すのは得策でないと、あからさまに拒絶できないでいるようだ。

「おまえにも天敵がいたんだな」

ウププっと、つい噴き出してしまう大悟。咲希はふくれっ面になる。

「で、なんの用事だつたのよ？」

例の本を渡したことは言わないで、唯依の用件を伝えた。

「そう……。それは受けて立つしかないわね……」

咲希は心底、仕方がないという面持ちで肩を落としている。大悟は昔のマンガみたいにならずこけた。

「受けて立つなよ。ちょっと手抜きして、あいつにトップを取らせてやればそれで済む話だろ」

咲希は信じられないという目付きで大悟を見た。宇宙人でも見るような表情だ。

「わかつている問題をわざと間違えろっていの？ そんな気持ち悪いこと生理的に受け付けないわ。それに、そんなことをしたらわたしという存在の完璧さに傷がつくじゃないの……」

ああ恐ろしい！ とでも言うように寒気がするような仕草。こいつらどっちもどっちなんじゃないの？ と、大悟はあきれるばかりだった。咲希にしたって学年トップになるほど頭がいいのだから、下手を打っていじめられっ子になるようなこともないだろう。

「まあ、好きにすれば」

大悟は傍観者を決めこむ宣言をした。

「もう、他人事だと思って……」

咲希はフラフラと大悟のベッドに崩れ落ちた。純白の布が見えてもおかまいなしのようだ。

「おいおい、見えてるぞ」

即座にバスローブを整えて隠したものの、ゴロンと仰向けになった拍子に胸の谷間が見えた。

「お、おまえ……ノーブラ……」

咲希はうるさそうに胸元を隠す。

「おやすみだけ言って戻ろうと思ってたから、いちいちブラなんか着けてこないわよ」

そう言ったきり、咲希は帰ろうともせずタオルケットをお腹にかけて目を閉じてしまった。やれやれ、バスローブなんかで眠ったら風邪ひくぞと心配しつつも、大悟はいつもの安楽椅子で眠ることにした。咲希のチャリズムをしばらく反芻して寝付きが悪かったものの、なんとか『深夜の訪問者』が来るまえに眠りに落ちていったのだった。

お嬢様の天敵 5

「ちょっと、どうして二人揃ってこっちに来るんですか？ あなた達ってやつぱり……。二人で『いいこと』して、先輩の腕枕で……？」

大悟と咲希が夢の中で覚醒すると、やつがいた。唯依は目を見開き、握りこぶしを口元に当てて驚いていた。

「そんなわけないでしょ。それよりも、なんであなたは人の家に上がりこんでるのよ？」

「だって、咲希ちゃんに用事があるんですもの。チャイムを鳴らしても誰も出てこないし、中で待たせていただこうかと……」

言葉のやり取りだけを聞いていると、気の弱いお嬢ちゃん（唯依）が気の強いお嬢様（咲希）に押されているように見える。この子が計算高い『裏番』的な存在だなんて、咲希の思い過ごしじゃないのかと大悟は思った。

咲希が怖い顔をして唯依をにらんだまま、いたたまれない無言の時が続く。助け船とばかりに大悟は口を開いた。

「それにしても、よくあの本を読んだだけで……」

よくあの本を読んだだけで明晰夢を見られるようになったな。と言いかけて止めた。しかし、手遅れだった。

「あの本？ どういうこと？ まさか、あんたが芳野をこっちの世界に呼び寄せたんじゃないでしょうね？」

「き、記憶にございません」

咲希の鋭い眼光が大悟をとらえる。

「佐藤大悟、命令よ、白状なさい。全部話して楽になるといいわ。素直に言えば怒ったりしないから」

素直に言えば……と言われて怒られなかった試しがない。しかし、改めて命令されると大悟は逆らえなかった。咲希の命令にも何らかの超能力が宿っているのかもしれない。

「ふ〜ん。あんたつてば、わたしの家来でありながら『可愛い唯依ちゃん』に鼻の下を伸ばして、スパイだとわかった上であの本をプレゼントしたんだ」

咲希の繊細な指が、その姿形からは想像出来ないほどの力で大悟の頬をつねる。

「いででで……」

「先輩をいじめちゃだめ！……です」

唯依がそう言うのと、咲希の握力がゆるんだ。

「あら、これはどういうこと？ わたしが大悟を折檻したい気持ちよりも、芳野の気持ちのほうが上回ったっていうことなのかしら？」

唯依はポツと頬を赤らめた。咲希はふ〜んと意地悪そうに鼻を鳴らして、大悟を一瞥する。

「ねえ大悟、あんた芳野の家で雇ってもらったら？ ずいぶんと気に入られてるようだし」

一般ピープルの家庭に家来を雇う余裕なんてないでしょうけど、ウププ。という嫌味かと思う大悟だったが……。

「咲希ちゃん、ずるいです。そうやって払い下げみたいになれば、私のプライドが許さないのを知ってて言ってるんでしょう？ 素敵な先輩を譲ってくれる気なんてないくせに……」

払い下げとか譲るとか、なんだか遠い異国に売り飛ばされる娘になったような心境の大悟。どうやら、唯依の家にも家来を雇う余裕があるらしい。

「そう……知らないのね。後悔したって知らないわよ？ まあ、明晰夢を見られる家来なんてそう多くはないから、もうしばらくうちに置いておこうかしら」

やっぱり唯依よりも咲希のほうが怖いと縮こまる大悟だった。

「ところで、どうやってわたしを妨害するつもり？ 受けて立つから早くなさい」

堂々と妨害するとか受けて立つとか宣言する潔さ。この二人、世が世なら相当な女傑になっていたかもしれない。

芳野軍が仕掛けた計略は『超難解クロスワードパズル』という雑誌だった。一冊まるごとクロスワードパズルで、しかも超難解ときたら、大悟など想像しただけで肩がこりそうな代物だ。

「言っておくけど、わたしは一夜漬けなんかしなくても、三年生の分まで全部『理解』してあるから無駄よ？」

なんか今日のご主人様ってちよつと可愛くないかも。と、幻滅しかかる大悟。しかし、それは余裕が無いことの裏返しなのかもしれない。

大悟は咲希を手伝おうとして一緒にパズルを考えたものの、足手まといに終わった。それでもなんとか一冊まるごと仕上げたときには夜が明けていた。唯依は唯依で三教科ほどの教科書の例題を全てやり終え、おさらいは十分と満足げに肯いたのだった。

咲希と唯依はお互いの成果を交換して答え合わせしている。三人揃ってあくびが出て、なんとなく顔を見合わせる。いつの間にか険悪ムードも消え去っていた。一晩じゅう一緒に頑張ったという連帯感のようなものまで生まれつつある。

「あ、起こされてるわ……じゃあ、また学校で……」

女子二人は互いに手を振って目覚めていった。大悟は特に起こされてはいなかったが、ベッドに横たわってリアルで目覚めるための眠りについた。

お嬢様の天敵 6

「……最悪だったわ」

学校から戻った咲希に手応えを確かめた答えがこれだった。文系教科のテスト中にクロスワードの要領で連想が連想を呼んでしまい、全然集中出来なかったのだという。終了時間ギリギリでなんとか答案を埋めて、見直しをする暇もなかったそうだ。

「まあ、一回ぐらい勝たせてやれよ。そんなに悪い子じゃなさそうだしさ」

咲希は細い眼をしてギロリと目を動かす。軽蔑の眼差しであった。「これが芳野の狙いだったのよ。試験勉強じゃなくて、試験そのものを妨害する気なんだわ。昨夜あいつが口ずさんでた歌、覚えてる？」

そういえば、唯依は昔のCMソングの一節を延々とハミングしていた。集中したときの癖かなにかだろうと気にしていなかったのだが、言われてみれば大悟の脳内でも起きてからずっとその曲が流れ続けていた。しかも、ハミングだったから、肝心の歌詞が分からない。大悟こそネットで検索して歌詞を確かめたが、咲希はその前に登校してしまったのである。

「ご愁傷様」

大悟はニヤニヤしながら、問題のCMソングをハミングする。

「やめて！ せっかく止まってたのに！」

咲希は大慌てで耳を塞ぐのだった。

そこへ、固定電話が鳴った。中条からの内線である。

「芳野様がいらっしゃいました」

咲希に伝えると、居留守を使えと指令が下された。その旨中条に伝えるとしばらく間があった。中条が妙なことを言い出す。

「『入れてくれないと、あのこと言っちゃいますよ』と、おっしやっていますか？」

あのこいつてなんだろう？ はったりか？ と、大悟は考えたが、咲希が受話器を引ったくる。

「……通してあげてちょうだい」

何か弱みでも握られてるのか？ と、大悟は訊ねてみた。

「昨夜わたし達が同じ部屋で寝ていたことを言ってるんだわ。そのことを、尾ひれをつけて言いふらすに決まってる。ああ憎たらしい！」

大悟は遠くから鏡台を見て、髪の流れをチェックした。何気なくとった行動だったのだが、咲希は面白くなさそうな顔をする。

「ねえ、わたしの前では気にならないのに、あいつと会うときには髪型を気にするの？」

大悟は『あれ？』と、思った。

「ひょっとして、やきもち焼いてるのか？」

咲希は「ばっかじゃないの？」と吐き捨てるように言いつつ、鏡台の椅子に座った。

「そこに座ったら見えないだろ」

「しーらない」

これはどういう心境の変化だろう？ 所有物を取られそうになつて惜しくなったのか？ と、分析を開始する大悟。そうこうするうちにドアがノックされた。

部屋の隅にある応接セットで向かい合う三人。大悟と咲希が並び、咲希の向かいに唯依が腰かけた。

「今日の手応えはどうだった？」

大悟は早速唯依に話しかける。

「はい、ばっちりでした。咲希ちゃんは？」

咲希のこめかみがピクリと動く。

「絶好調だったわ。今回は全教科満点も狙えるかもね」

咲希は手の甲で口元を隠すようにして、オホホホとわざとらしいセレブ笑いをする。

「そ、そんな……あれだけの妨害を受けながら……咲希ちゃんの意

地悪」

強がりとも気付かないのか、唯依はどんよりとしたオーラに包まれる。

「あんだね、どっちが意地悪なのよ？ あんな迷惑な歌をよく仕入れてきたわね」

これでは歌に効き目があったことを白状したようなものだ。咲希は相当お疲れのようである。大悟は唯依の口元が一瞬ニヤリとしたのを見逃さなかった。

「で、今日はどんな妨害を企んでるんだ？」

大悟が代わりに探りを入れた。

「その前に、ちょっと面白いものを手に入れたんですよ」

学生靴から一枚のディスクを取り出して大悟に手渡す。『フラッシュ暗算』をするためのソフトらしい。大悟は無視するわけにもいかずにパソコンを立ち上げた。

「また、白々しいことを。今日の妨害はそれなのね？ でも、おあいにくさま、わたしはこれから中条さんとお勉強するところだから」と、噂をすれば何とやらで中条から内線が入った。

「申し訳ありませんが、旦那様から呼び出しがかかりまして……」咲希の退路は断たれてしまったのだった。

本日の計略は、パソコンのモニターに次々と点滅する数字を足し算して、答えを打ち込むだけというシンプルなソフトだった。大悟が試してみても、二つ三つ点滅した時点で諦めてしまうようなものだ。さすがの咲希もこれには苦戦した。唯依は得意気な顔をして、正答を重ねていく。そうなれば咲希はムキになる。咲希がはまっていくのを見届けながら、唯依は自分の勉強道具を広げるのだった。

結局、唯依はリアルの小早川邸にお泊まりした。十二時過ぎには三人とも眠ったが、夢の中でも似たような活動は続いた。咲希は聴覚を『侵食』されないために耳栓をしながらフラッシュ暗算に挑み続けた。一方の唯依は早々に勉強道具をしまつて大悟とゲームをし

ていた。

「今日はもう勉強しないのか？」

「はい、明日は得意科目なので、もうバッチリです」

唯依は無邪気にゲームに没頭していた。アパートやマンション暮らしなら苦情がきそうないはいはいでいた。楽しい様子をチラチラと盗み見る視線があった。咲希はつつい、耳栓をはずして二人の会話に聞き耳を立てた。

「……そうなんですよ、私ってば小さな頃からずっと『ドナドナ』が好きだったみたいなんです。悲しい歌だなんて知らなかったし」
唯依はチラッと咲希のほうを見て、ニヤニヤしながら歌いはじめる。

「ドナドナドゥナドゥナッツ」

最後がドーナツになっているところが何とも寒い。しかし、大悟は愉快そうに一緒になってドーナツと歌っている。唯依は壊れたレコードのようにその部分ばかり歌い続ける。暗算に集中していて対応の遅れた咲希は、いつしか一緒に口ずさんでいた。

「……やられた」

やけになった咲希は大声で正しいドナドナを歌いながら暗算を続行した。唯依も大声でドーナツと対抗する。大悟はやかましきと感じながらも、なんだかこいつら可愛いなと、ニヤニヤするばかりだった。

またしても夜明け頃になって、咲希はフラッシュ暗算を体得した。「すげえな。なんだかんだ言って一晩でマスターしちゃうんだ」

咲希は胸をはって満足げな顔をしている。その目は真っ赤に充血していた。集中しすぎてまばたきを忘れていたのかもしれない。

その日の咲希はまた、うなだれて下校してきたのだった。数学や化学のテストで数字を見るたびに手当たり次第に足してしまい、例の誤ったドナドナが脳内に流れ続けたのだという。

お嬢様の天敵 7

そして、答案が返される日。

この日まで唯依は毎日小早川邸に通って、お泊まりを続けていた。咲希は「全滅だわ」と、泣きそうな顔をしながら、唯依と二人で出掛けていったのだった。

大悟は娘の受験の合否でも待つかのようにジリジリしていた。

答案を受け取ったら終了の短い一日を終えて二人は帰ってきた。

どういうわけか、唯依はとぼとぼと、咲希は会心の笑顔だった。

「結果はどうだった？」

咲希は全教科満点で文句なしの学年トップ。唯依は二位。いつもどおりの結果だったようだ。

「しかし、手応え最悪だったんじゃないのか？」

「無心の勝利ね」

咲希にしても、パーフェクトは初めての経験だったそうだ。いつも時間が余って余計な見直しをついついやってしまい、その結果いくつかの誤答をしてしまう。いわゆる『蛇足』だったらしい。今回は時間がギリギリで、その悪癖が出る暇もなかった。それが幸いしたようだ。

唯依は唯依なりに自己ベストの点数だった。全教科中で、たったの一問間違えただけだったのだ。それでも、唇を噛みしめて、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「おまえも頑張ったじゃん。ご褒美に甘いものでもおごるから、二人とも着替えてこいよ」

大悟はヨシヨシと、敗者の頭を撫でた。すると、唯依はポツリポツリと涙をこぼした。

「……私だって……頑張ったのに……どうして……咲希ちゃんばかりずるいです」

大悟はやれやれとため息をつく。

「どちらかといえば、ズルしたのは唯依のほうだろ？ お互いに頑張って勝負がついたんだから、文句を言うのは失礼ってもんだ。次にまた頑張れ」

肩をポンと叩いたのがスイッチだったかのように、唯依は「あーん」と声を出して泣いた。

「もう、しょうがない子ね……」

咲希は唯依を抱き締めて泣き止むのを待った。差し出したティッシュで鼻をかませて、優しく目をのぞき込んだ。

「芳野もパパの本を読んだのよね？ でも、肝心のところを理解してなかったんだわ」

願望達成のために誰かを押しのけようとするのがそもそもの間違い。相手を意識すればするほど相手の存在を大きく感じて、とてもかなわないと思い込んでしまう。ただ単純にパーフェクトなテスト結果を望めば良かったのだ。咲希はそう解説した。

唯依は「そっか」と、笑顔を取り戻した。根は素直な子らしい。「それにしても、満点と一問だけ間違いつて凄いな。俺からしたらどっちも神レベルだ」

咲希が「まあね」と自慢げに言うと、唯依も「まあね」と続けた。勝ち負けを差し引いてみれば、自分だって大したものなんだと気付いたのだろう。

「……ねえ、咲希ちゃん、よかったら私のお友達になってもらえませんか？」

唯依は怖ず怖ずと願いだした。

「わたし達つてとつくに『大親友』なんでしょ？ 誰かさんが言いふらしてたのが本心だったなら」

咲希はクスクス笑う。そして、唯依の手を引いて自室に連れていく。

「ほら、着替えて大悟にたかるわよ」

もっとお嬢様らしい言い回しはできないものかと苦笑いの大悟。近場で人気のスイーツ店を検索する。ドーナツ屋さんでもいいかな

？ と、悪戯小僧のような笑みを浮かべるのだった。

家来、大いに戦う

ここは、とある新興宗教の寺院。温泉旅館の大宴会場にも似た畳敷きの広間に、二百名ほどの信者がひしめき合っていた。棺桶の中で着るような真っ白な装束の男女だった。集合がかかって集まってから一時間ほども待たされ、かんかん照りの猛暑日に冷房無しときたら、熱中症になりかけている年寄りもいるほどだ。

「御柱様おはしらがいらっしゃいます」

だらけていた信者達がシャキッと正座し直す。額から汗がたらだら伝つても身動き一つしない。

レースのカーテンの向こうに、御柱様こと教祖が座った。和服姿の中年で恰幅がいい。まるで大物演歌歌手のような男だ。アンテイクの仰々しい椅子は、玉座のようにさえ見えた。傍らには巫女装束の美女を伴っている。

教祖と巫女は二言三言交わして、巫女がうなずく。巫女はその場にペタリと座り込み、恭しく八礼した。続いて祝詞のりとのようなものを唱えはじめる。巫女は唱えるうちにガクンと首を落とした。しばらく間があつて顔を上げ、語り始めた。美貌に似合わない、押し殺した老婆のような声だった。

「大龍神おおたつがみの復活は近いのだぞ。これすなわち天界の大掃除が迫っていることを表すのじゃ。大蛇おろちのたまの民は大龍神に宿す魂を集めなくてはならぬ。毎晩勤めて龍神様たつがみさまにその身を捧げるのだぞ。心して励めよ」

大蛇の民こと信者達は、時代劇で印籠を出されたときのように深々とひれ伏した。御柱様！ の大合唱が巻き起こった。

咲希と唯依は夏休み初日のこの日、大悟の部屋で宿題をしていた。すっかり、大悟の部屋がたまり場になってしまっていたのだ。夏休み初日から真面目に宿題をやる人間がいたなんてと驚愕した大悟だったが、二人のやり方はちょっと様子が違う。二人で全教科の半分

ずつを受け持ち、パソコンのプリンターのように一切迷いの無い動きで、みると問題集を埋めていく。大悟と借り出されてきた美夜の二人で、担当じゃないほうの問題集に解答を書き写していく。つまり、唯依が解いた数学の解答を咲希の問題集に、咲希が解いた英語の解答を唯依の問題集にといった具合である。

「もうちよつと綺麗に書いてくれないと、わたしの字が汚いと思われるじゃないの」

咲希の問題集を埋めていた大悟への注文だった。美夜も唯依の丸文字には苦戦していたが、それでも器用に似せているようだ。

「大事な元手なので、丁寧にお願いますね」

と、唯依も続けた。どうせ宿題などやってこない男子達に貸し出し、恩を売って人気を取ったり、掃除当番などの『雑務』を替わってもらったりするらしい。万が一誤答があったとしても、このコピーが大量に出回ることになるから、教師からしても「これはみんな間違ってるし、ちよつと分かりづらい問題だったのかな。あの小早川と芳野までが間違うぐらいだから」と思っのが関の山だそうな。

大悟は面倒がって「宿題は自分でやったほうがいいぞ」と説教してみたが、「手が疲れるだけの作業だから分業したほうが合理的でしょ」と、返された。夢の中専用の家来だったはずが、すっかり『サービス残業』させられている大悟だった。

それにしても、つい先月までは金無しで女っ気無しの寂しいプー太郎暮らしたのに、今ではタイプの違う三人の美女と一緒に立派なお屋敷で、いつでも快適な冷房のきいた部屋で過ごしているんだなあ。などと、感慨にふける大悟。

黙々と作業を続けるうなじ、おくれ毛、キャミソールの胸元からちらつくブラ、ブラ、ブラ。三者三様のほのかな甘い香り。咲希は夏場は湿気が多いからコロンなどつけないと言っていたが、するとこれはシャンプーの香りなんだろうか。それともデオドラント？などと、大悟は締まりの無い顔で考える。

「あら、大変。先輩ったら一問飛ばして書き写してます」

「もう、何やってるのよあんだ」

ついでに美夜までが白い目で見えてきて、大悟は縮こまった。

「まあいいわ。こっちは片付いたから、みんなでやり直しましょ」

筆跡を真似てコピーしていた二人よりも、実際に解いていた二人のほうがはるかに早く片付いてしまった。唯依と美夜のチームは順調に唯依の分を終わらせて、あっという間に合流してくる。咲希の分を四人がかりで片付けて、大量の宿題が終わった。

「すげ〜な。なんか、自分のでもないのに、夏休み初日から宿題終わらせると気分がいいな」

咲希と唯依は「何をいまさら」というような顔をしているが、美夜は「わかるわかる」と、うなずいていた。

家来、大いに戦う 2

唯依は「とりあえず今日はこれで」と言い残して帰っていった。

四人がかりでやったとはいえ、既に夕飯時だった。美夜が慌てて仕度をすると言いだしたが、咲希が「今日はどこかに食べに出ましよう」と提案した。美夜がそのまま帰れるように着替えをしている間に、二人は中条を誘う。

大悟は中条の部屋に入っていきづらい気がして、廊下につっ立っていた。咲希はさつさと中条に歩み寄る。

「みんなでご飯食べにいきましょ？」

「すまない、まだ仕事があるんだ」

咲希は中条の両肩に手を置いて「ちょっとだけ抜けられないの？」と食い下がった。

「お土産に何かテイクアウトしてきてくれれば助かるよ。僕のは気にしないで楽しんでくるといい」

どうやら大悟がいることに気付いていないらしい。二人きりになるとこういう話しかたをするのかと、大悟はちよっぴり寂しくなった。咲希には同級生に恋人がいらないらしいことは判明していたが、中条はやっぱりかなりの有力候補だ。難問を解いて「ご褒美にチューして？」と甘える咲希。「大人の恋愛も教えてくれるかしら？」と、手取り足取りの『授業』を受ける咲希。そんな妄想を繰り広げて、大悟はその場にへたり込んだ。

半開きだったドアの前でへたり込んでいた大悟に、重い扉が炸裂した。ゴスツと鈍い音がする。

「あ、ごめ〜ん。痛かった？」

いつもなら、「ぼけつと座ってたら危ないじゃないの」とか叱られそうなところだったが、中条の前で猫をかぶっているのか、それとも中条に会って機嫌がいいのか……。

「どうしたの？ あ、わかった。お腹空いて歩けないんでしょ？」

そのまま嫉妬を口にするわけにもいかず、

「……実はそうなんだ。もう歩けないから……何か取って食べよう」
行き倒れ風に床に這いつくばる大悟。たしかに歩く気力は失っていた。

「本当にそれでいいの？ 二人にはいっぱい手伝ってもらったからおごるわよ？」

しまった、咲希のおごりなら高級レストランで、見たこともないようなごちそうを振る舞ってもらえたかもしれない。覆水盆に返らず。おごりと聞いた途端にやっぱり歩けるというのもみつともないと思い、今日は厄日だと絨毯を掻きむしる大悟だった。

「もう、なんでもいい……」

「やだ、そんなにお腹空いてるの？ ちょっと待っててね」

咲希は部屋の中に駆けていくと、

「おにいちゃん、大悟が行き倒れてるから、ダイニングまで運んであげてくれるかしら？」

お、おにいちゃんだと？ 苗字が違うのに『おにいちゃん』だと？ 萌え萌えなアニメやエッチなゲームなら、『おにいちゃん』すなわち年上の恋人を意味する言葉じゃないか。終わった。何もかも……。そのまま眠ってしまいたい大悟だったが、『おにいちゃん』に抱きかかえられて食卓に連れていかれるのも癪だった。壁に手をつき、えいやっ！ と起き上がる。そこをねずみ取りよろしくドアでサンドウィッチにされる。

「これはすみません。怪我はありませんか？」

中条に腕をとられ、肩を貸されそうになって大慌てで立ち上がる。
「や、やだな、いくらなんでも歩けないなんて冗談ですよ。あははは」

中条の目をキツとにらみながらも、ヘラヘラする大悟。中条はどこまでも穏やかな笑顔で、

「きつと頭を使いすぎて血糖値が下がったのでしょう。冷や汗も出ているようだし、チョコか飴でも舐めて、その間にデリバリーして

もらうのがいいかもしれません」

「そうね。明日からも留守番頼むのに、今日も置いてきぼりじゃ中条さんがかわいそうだし」

咲希、大悟、美夜の三人は翌日から芳野家の別荘に遊びに行くことになっていたのだ。呼称こそ『中条さん』に戻っているものの、やっぱり氣遣っている。こうなったらヤケ食いだ。ヤケ食いをしてやろうと心に決める大悟であった。

美夜は「せっかくのチャンスだったのに」と、残念がったが、結局は近所のラーメン屋から出前を取った。咲希はちゃんとした中華料理店の、漢字だらけのナントカ麺しか食べたことが無かったらしく、大悟が好きな庶民の味を食べてみたいと言いだしたのだ。

中条の分は自室に届けられ、残りの三人は食卓についた。『晚餐会』という言葉が似合いそうな長いテーブルの左から順に美夜、咲希、大悟の順で並んでいた。中条と四人で食べる場合は二対二で向かい合うことが多かったが、このときはなんとなくラーメン屋の力ウンターっぽく座っていたのだった。

大悟はチャーシュー麺大盛りとチャーハン、餃子のヤケ食いメニュー。咲希と美夜は野菜たっぷりラーメンと、餃子を二人で一人前注文していた。どんぶりには今どき珍しく張りつめたラップと輪ゴムがかけられている。

「待てっ！」

大悟は咲希が不用意な行動に出そうなのを見て鋭く制止した。

「なによ？」

「やれやれ、これだから素人は」

三人分の丼を手元を集める大悟。まるで爆発物処理班である。

「離れろっ！」

咲希と美夜は、なんの冗談だろうといった具合に、やれやれと首を振りながら離れた。

大悟は自らの手の大きさを武器にしてラップを押さえつける。そして、輪ゴムに手をかけた。

パシッという音と共に熱い汁が弾け飛んだ。

「あちちっ！……おかしいな、手で押さえてやれば簡単だって聞いたんだけど」

残りの二つも見事にまき散らして、大悟のＴシャツに油ジミの水玉模様ができていた。

「なるほど、危ないもののね。ありがと、大悟」

美夜が布巾で大悟の胸を拭く。

「大悟君って、意外と頼もしいのね。結果は残念だったけど」

「そういえば、夢の中でシャンドリアが落ちてきたときも、わたしをかばってくれたのよね。気付いた時点で消滅させてれば、痛い思いしなくて済んだはずだけど」

『意外と』、『けど』はついたものの、ちょっとはいいところ見せられたかなと、大悟は頭をかいて照れた。下ろした手がチャーシュー麺を直撃し、熱さで引いた拍子にひっくり返った。

「あゝあ、なにやってるんだか。美夜さんは食事中で休憩扱いだからね。自分で片付けなさい」

大悟は変わり果てた姿のチャーシュー麺をなんとか丼に戻し、三秒ルール？ と訊ねてみたが、みつともない真似はやめなさい、と叱られた。布巾で汁を拭き取り、テーブルクロスは洗濯するからほつといていいわよと言われて、チャーハンをつついた。

「味が濃いめでニンニクと油でごまかしてるわね。でもまあ、そんなに悪くはないかしら」

女二人がたっぷり過ぎる野菜に苦戦している間に、大悟はチャーハンと餃子を平らげてしまった。

せっかく大盛りチャーシュー麺なんて贅沢なものを頼んだのに。これがメインだったのに。と、諦めきれない大悟。せめてチャーシューだけでもと、そーつとそーつと箸を伸ばす。

「やめなさいってば、意地汚い」

慌てて箸を引っこめたスペースに咲希の丼が差し出された。

「もうお腹いっぱいだからあげるわ」

きれいなテーブルの上にちょっと転がったものはだめで、食べかけはいいのかよと理不尽なものを感ずる大悟だった。……待てよ、これはまるで恋人同士のようにじゃないか。と、気付いた。ジュースの回し飲みなんかとは違って、かじった麺が混ざっているかもしれない。これはかなりディープな間接キスなのだ。嫌いな相手なら絶対にこんなことはできない。そう考えればぬるくなりかけたラーメンが宝石のように輝いて見える。

咲希が野菜だけで力尽きてしまったせいか、麺の大部分が残っていた。それを大事に大事に食べていると、美夜もギブアップを宣言した。

「大悟君、もし嫌じゃなかったら私のも食べちゃってくれるかしら？」

「嫌って、なにが？ 喜んでお引き受けますとも」

リレーされてきた井と並べて、二つのラーメンを交互に食べる大悟。美夜はわりとバランス良く食べていたようで、野菜もいくらか残っていた。面倒だから一つにまとめようとする、また咲希に叱られた。

あれ、でも、こういう余り物の処理って家族でもよくやるんだよね。と、気付いたのはきれいに完食したあとだった。

家来、大いに戦う 3

芳野家の別荘は高速道路を使つて四時間ほど走つた別荘地にあつた。美夜の小型乗用車で、途中大悟と運転を交替しながら走つて辿り着いた。長距離運転に慣れていない美夜と、そもそも初心者マークの大悟だったから、道のりはちよつとスリリングなものだった。それでも、お嬢様達は後部座席でスヤスヤと仲良く眠っていた。

「ついたぞ、起きろ」

大悟は旅に浮かれた気分で、咲希の頬をつねり回して起こす。咲希は「無礼でありましょう！」と、寝言をつぶやきながら目を覚ました。いつもと違う景色に気付いてキョロキョロと見回し、ウーンと伸びをした。

美夜の真つ赤な小型車のエンジンが、チン、チン、と音を立てて冷めていく。高原の夕方は涼しい風が吹いてきて、なかなか快適であつた。

林の中にかなりの間隔を置いてログハウス風の別荘が並んでいる。そのうちの一軒が芳野家の別荘だ。林の中とはいつてもセンターラインのひかれた道路に面していて、綺麗に刈りこまれた芝生の敷地だった。中に入ってみると、丸太のいい香りがした。それでも、不便なほどの本格的なログハウスではなく、モダンな住宅とのハイブリッドといったところだろうか。

「そつえば寝室が二つしかないんですが、どうでしょうか？」

玄関からすぐの吹き抜けのある場所には階段があり、二階は左右に寝室、一階の正面奥にはキッチン、右手に陶芸などの道具が置いてある作業部屋、左手にリビングがある。元はと言えば、唯依の両親が『息抜き』と称してデートに来る隠れ家なのだから。

「あ、俺はどこでもいいよ。毛布の一枚でも貸してもらえれば、ソファでも絨毯の上でも」

「そんな、とんでもない。私のほうからお誘いしておいて、お客様

をソファで寝かせるだなんて」

あれこれと話し合う女達だったが、

「わたしと相部屋でいいでしょ？ どうせいつも一緒に寝てるんだし」

と、咲希。

唯依は目を真ん丸くして驚いた。

「やっぱり、あなた達って……」

咲希はカラカラと笑って答える。

「この大悟にそんな度胸あるわけじゃないの。まあでも、変なことしたら折檻だからね？」

意気地無しと言われてムツとする大悟だったが、そういえば『変なことしたらクビ』ではないんだな。と、気付いた。いくらか進歩しているのかもしれない。堂々と相部屋するというのもなんだか口マンチックだし、ひよつとして『一夏の経験』があったりするのか？ と、いつもの妄想を開始するのだった。

唯依と美夜はベッドが二つある両親の寝室に、大悟と咲希はベッドが一つしかない唯依の部屋に泊まることになった。その部屋割りでも一悶着あったのだが、唯依と美夜はまだ知り合って間もないし、一つのベッドでというのかわいそうだと咲希が気をきかせたようだった。何だかんだ言って俺と一緒に寝たいのか？ と、ニヤニヤする大悟だったが、寝室に入ったところで冷徹な一言。

「こんなこともあるうかと思って、寝袋用意してきたから。あつちの二人だったら、あんたの図々しさに負けてあやまちを冒すかもしれないし」

事前に唯依から間取りを聞いて、こうなることを予想していたのだという。咲希は車から寝袋を持ち出してきた。もう片方の手には、細いながらも丈夫そうなロープが握られていた。

「ここには中条さんもないし、寝るときは縛るけどかまわないわよね？」

「そこまでしなくても、そんなに嫌ならリビングで寝るからいいよ

……」

咲希はなんだか唇を尖らせてウーっと唸っている。

「そうじゃなくて……あんたってば……せつかちなんだもん」

棚から巨大なぼた餅が落ちてきて押し潰され、窒息しそうな大悟。ゆっくり育む愛なら脈有りだったのか、と、衝撃の事実を知る。

「俺のこと……好き……か？」

「しらない」

咲希は知らんぷりで窓の外を眺めているが、その表情はなんだか楽しそうだった。

「一つ気になってたんだけどさ、中条さんのこと『おにいちゃん』って呼んでただろ？ その、なんていうんだ、……ずいぶんと親しそうだっていうか」

咲希はポカーンとしたあと、ワナワナと震え、しまいにはキャハハと笑いだした。

「あんたってば、ほんと、想像力たくましいわよね。それで昨夜は様子がおかしかったんだ」

「つけるゝ。と、大笑い。ティッシュで涙を拭いつつ、咲希は続けた。

「おにいちゃんは、わたしの従兄なのよ。いとこ同士で結婚する人もいるみたいだけど、わたしはそんなこと考えてもみなかったわ」

大悟は背中から羽根が生えて昇天しそうな気分だった。日常から離れた別荘にいるせいで、まるで現実味がない。これは夢じゃないだろうかとほっぺをつねる。だが、明晰夢でも痛みは感じていたから、これが現実だという証拠にはならない。そうだ、超能力を使ってみよう。と、思い立ち、風よ吹け！ と、念じた。

「きゃっ！」

咲希のミニスカートが風にあおられ、白地にピンクのハート柄が見えた。

「なんだ、夢か……」

「どうしたの？ それより、見て。なんか変な人達がいるわ」

咲希が開けた窓から風が吹いたらしいと気付いて、別の力を試してみる。指先に炎を出してみようと思ったが、上手くいかない。夢じゃない！と、喜びつつ、窓辺に駆け寄った。

「ほんとだ、あいつらなんだろうな。お遍路さんとかそんなのか？」

「でも、なんだか様子が違うわ。全身真っ白で、幽霊みたい。あれってお棺に入った人が着る衣装じゃないの？」

白装束の群れは黙々と行進していった。脚はあるし、舗装道路を歩いているという現実っぽさに救いはあるが、咲希が言うとおり幽霊みたいで不気味だった。

「怖かったら手をつないで寝てやつてもいいぞ？」

「美夜さんにおどかされて気絶したくせに」

咲希は窓枠に左手をついて、右手はブラブラさせていた。なんとなく許されている気がして、大悟はその手をとった。咲希は一瞬驚いたようにその手を見たが、すぐにまた白装束に目を戻した。大悟も知らんぷりしてそのまま手をつなぎ続ける。白装束が視界から消えた頃には、夏の夕陽が咲希の横顔を金色に染めていた。

「咲希……綺麗だよ……大好きだ」

右手で咲希を抱き寄せ、口づけようと顔を寄せていく大悟。体のどこにも痛烈な折檻など訪れなかった。

「だゝめ、それがせっかちだって言うのよ」

咲希は大悟の唇に人差し指を当てて制した。そして、大悟の頬にチュツとキスして振りほどく。

「さてと、買い出しに行かないと、また誰かさんが行き倒れになる前に」

悪戯っぽくウィンクなどする咲希。大悟はこのイベントを提案した唯依に、咲希と出会ったきっかけの一つであろう小早川本に、そして天に、宇宙に、やあよろず八百万の神々に感謝の祈りを捧げるのだった。

家来、大いに戦う 4

四人でぞろぞろ買い出しにいつてもしょうがないということになり、美夜と荷物持ちの大悟が二人で出かけることにした。

「じゃあ、行ってくるよ」

「……うん、気をつけてね」

大悟と咲希は名残惜しそうな顔をして、視線を絡ませ合う。二人の異変に気付いた唯依は、

「着いた途端にあやまちを……！？ 先輩の裏切り者！」

と、陶芸部屋に走って行ってしまった。裏切り者と呼ばれた大悟は、いたたまれなくなって追いかけた。

リビングに残った二人はヒソヒソ話しをする。

「『一夏の経験』もいいけど、あんまり急いではダメですよ？ もうちよつと彼がどういう人なのか見極めてからでも……」

なまめかしい話をする美夜。咲希は首をブンブン振って否定する。「あ、あいつにもちよつとはご褒美が必要かなと思って。夢を見させているだけよ」

言いながらも、咲希は人差し指と人差し指をぶつけ合わせてモジモジしていた。

「旦那様と奥様に代わって一つだけ忠告させていただきます。『対策』だけはきちんとしてくださいましね。せめて大学が出るまでは、ママになるようなことなどあつては……」

咲希は湯気を噴き出しそうなほど頭を沸騰させて、目を潤ませた。「ないないない、絶対ないから心配しないで！」

「なにがないんだ？ スーパーまでは結構あるから、欲しいものがあつたら今のうちだぞ？」

と、大悟が戻ってきた。

「なんでもないわ。遅くなるから早く行ってきたさいよ」

ツンツと横を向いてしまう咲希。大悟は「変なやつ」とつぶやき

ながらも玄関に向かつていった。

「そうそう、あんまりもつたいぶると、彼が他の女性とあやまちを冒すかもしれませんよ？」

「あいつにそんな度胸あるわけじゃない。大体、どこの世界にあんな『普通の佐藤』を好きになる女なんかが……」

美夜は意味ありげに微笑んで言う。

「彼はどんどん頼もしくなっています。自分の可能性に目覚めた男の子って変身するものですよ。唯依さんも明らかに好意を持っていちゃるようだし、年上のお姉さんが誘惑しないと限りませんのよ？」

咲希は真顔になって美夜の目を真っ直ぐに見た。

「受けて立つわ。もしも美夜さんが勝つようなことになっても、卑怯な真似はしない。これは女の勝負よ」

と、男らしくさえもある台詞。

「それだけの気持ちがあれば、十分ですわね」

美夜がニツコリ微笑むと、咲希は肩の力を緩めた。

「美夜さんの意地悪。わたしを試したのね？」

「いいえ、私も自分の気持ちはまだはつきりとはわかりませんが、彼のこと、嫌いじゃありませんよ」

ウフフと笑いながら踵を返し、美夜は出ていった。

優しい姉のように思っていた美夜さんがまさか挑んでくるなんて、ソファに沈む咲希。唯依にもなんらかのフォローをしなければ、と、すぐに立ち上がった。

「まさか、あいつを取られる心配をするようになるなんてね……」
ポツリと呟いた独り言に驚く。そこまで真剣に大悟のことを思っていたつもりはなかったのに。あいつは、たまたま罠にかかった家来に過ぎないのに。それなのに、遠ざかっていくエンジン音をつい
つい耳で追ってしまう咲希だった。

家来、大いに戦う 5

夕食を終え、唯依のリクエストで買ってきた花火をする四人。女達は手持ちの花火をしていた。大悟は地面に設置して噴き出すものや、打ち上げ花火などを担当する。唯依が、手持ち花火を体操のりボンのように回しながら、大悟を追いかける。大悟も手持ち花火をつけたまま、隙を突いては打ち上げ花火に浴びせかけて点火していた。パラシュートが飛び出すものが炸裂すると、みんなで追いかけた。

「ほら、そっちいったぞ！」

「どこ、どこ？」

唯依の真上から頭に着地しそうだったパラシュートを大悟がキャッチする。咲希と美夜が追っていたものは、美夜が身長差で上回りながらも、咲希のハイジャンプで勝負がついた。

実際に手にしてみると、大事にとっておくほどのものではない。

この取り合いこそがパラシュート花火の醍醐味だろう。

少々息の切れたところで線香花火などしていると、見知らぬ女がツカツカと歩いてきた。手にはパラシュートをぶら下げ、どういっわけか巫女さんの格好をしている。美夜と同じぐらいに見えるから、二十代中盤といったところだろうか。真っ黒な髪は踵まで届きそうな長さだった。同じロングの黒髪でも、唯依とは違って身長もある分、かなりの迫力だ。

「申し訳ないが、少し静かにしてもらえないだろうか。信徒達が既に眠っているものでな」

よく通る少し低い声だった。普段から祝詞のりとでもあげて鍛えているのだろうか。クールな美貌に男っぽい言葉がよく似合う。

「寝てるって、まだ八時過ぎじゃないの」

咲希が言い返すと、女は「うむ」と、うなずいた。咲希にパラシュートを渡してよこす。

「都会から来た人間にとってはまだ早い時間であつたな。しかし、すまないが、この打ち上げ花火だけはご遠慮いただきたい」

ちようと打ち上げ花火は打ち尽くしたところだつたし、美夜が「わかりました、すみません」と、了承して詫びた。

女はさつさと踵を返して戻りかけたがピタリと歩を止め、こちらを振り向きもせず言う。

「代わりと言つてはなんだが、明日の花火大会に来られるといい。宗教施設の催しゆえ、地元の衆は気色悪がつて訪れないが、取つて食いはせぬ」

気味の悪い巫女の誘いだつたが、唯依が「行きましょう！」と、乗り気になつてしまつていた。

「よろしい。神代かみしろに招待されたと伝えれば、丁重なもてなしを受けられることだろう」

神代と名乗つた女は、たもとをモゾモゾやつたかと思うと、真横にビシッと腕を突きだした。その手には名刺があつた。

大悟は迫力に負けて、うやうやしく受け取つてしまう。飾り氣のないシンプルな名刺だつたが、龍の顔のようなロゴに『大蛇大社』という法人名、『龍神の巫女』という役職らしきものが書かれていた。

「だいじやたいしやの……りゅうじんのみこ？　じんだい……りょうかさん……？」

「大蛇大社の龍神の巫女、神代涼香だ」
おろちたいしや たつがみのみかみしろすずか

見事に全問不正解で慌てる大悟。

「な、なるほど、神代っていう苗字なのか。てつきり役職か何かの名前かと……。へえ、涼香さんね。綺麗な名前だな。あはは」
大悟がヘラヘラ笑うと、

「世辞はいい。そなた、女難の相が出ておるぞ」

と、静かながらも鋭く一喝されるのだつた。

「へえ、この俺にもついに女難の相が？」

「そなた、恐ろしくはないのか？」

神代の声が少し高くなった。意外だとも言つように。

「女難の相つてのは、もてない男には出ないだろ、普通。ってことは、俺はもてるようになったんだな。きっと、ここにいる三人の美女に取り合いでもされて、なんだかんだ言つてラブコメな展開が待っているんだろ？」

「大した自信だな、小僧。まあよい、せいぜい気をつけることだ」
そのまま神代はスタスタと歸つていった。

なんか凄そうな巫女さんに勝っちゃったぜ、と、達成感の顔で振り返つた大悟に、ロケット花火が飛んできた。ふくれっ面している唯依が犯人だろう。

「こら、人に向けて撃つなつて注意書きにあるだろうが！ それに、あの巫女さんが戻ってくるぞ！」

「先輩にとつてはラブコメかもしれないですけど、そういうことを本人達の前で言うべきじゃないと思います！」

そうだそうだと声援が上がり、大騒ぎしていると、神代が戻ってくるのが見えた。

「やべっ」

「先輩、逃げて！」

唯依は火の付いたロケット花火を大悟に向けていた。それがもう手を離れていて、直撃コースをとっていたのだ。

「つめてっ！」

間一髪かわした大悟は、燃えかすだらけのバケツに足を突っ込んだ。そこに戻つてきた神代がゴツンとゲンコツをはった。

「今のは俺のせいじゃないだろ」

「女難の相だ。私も一応女だからな。どうだ、よく当たるだろう？」

神代はハッハッハと豪快に笑いつつ、歸つていったのだった。

家来、大いに戦う 6

「メイドの私がお風呂をいただきちゃって、すみません」

「美夜さんは咲希ちゃんのお友達さんなのであって、私とはただのお友達でしょう？」

咲希、美夜の順に風呂を済ませたのだった。ゲストが先と氣を使つた唯依だが、

「大悟が入った後じゃ唯依も気持ち悪いでしょ？ 氣にしないでいいのよ」

と、咲希。大悟はグサツときたポーズで胸を押さえたが、

「最後でいいよ。足が火薬臭いし、お湯が汚れそうだからな」

と、余裕の表情を保つた。咲希はきつとツンデレなのだ。みんなの前だから照れ隠しで口が悪いキャラなのだ。と、分析する。

「お嬢様、お疲れになったでしょう？ マッサージでもして差し上げましょうか？」

美夜が申し出ると、咲希はなんだか心外な顔をした。

「やめてよ、それじゃあまるで、わたしがいつもお風呂上がりになんなことさせてるみたいじゃないの」

「じゃあ、終わったら、もみ返してくださいでもかまいませんのよ？」

美夜が首を回すのを見れば真意はばれただった。長距離運転で肩がこつたようだ。

「素直に揉んでって言えばいいのに」

「それでは、お言葉に甘えて」

美夜は、ソファの手すりにちょこんと腰かけて肩もみをされていたが、

「……あつ……はうう……そこつ、たままないわあつ……お嬢様、もつと、もつと強くう……」

と、エロティックに悶え始めた。

「ちょ、ちょっと待って。ここでは大悟がおかしな気分になるわ。上にいきましよう?」

「あら、私ったら何か変なことをしましたかしら? どうぞお氣遣い無く……」

「だめ、こつちいらっしやい」

年上のメイドさんはお嬢様に引つ張られて二階に連行されるのだった。

大悟と唯依は、互いのノートパソコンを付き合わせて対戦ゲームをしていた。こんなところまでノートパソコン持参というのが現代っ子らしい。

「そついえば、ここつてずいぶん通信いいのな」

「はい、例の大蛇大社の教祖が政治的な人脈も持つてるらしくて、この辺のインフラつて都会並みに整備されてるんですよ。実害を受けたことがあるわけじゃないし、あの人達が住み着いてからずいぶんと便利になりました」

なるほどな、と、うなずきつつ、大蛇大社の話から女難の相について連想する大悟。ポケットとそんなことを考えていると、

「チェックメイト」

唯依が勝利宣言した。唯依に教わりながらやっていたチェスだから勝てると思っていなかったのだが、逆に負けてよかったとホッとする大悟だった。大悟が勝てばいつまでも風呂に入れなかっただろう。

「さてと、お嬢様が寝るつて言い出すまえに風呂に入りたいから、さっさと入ってきちゃってくれよ」

すると、どういっわけか唯依は大悟の手を握り、じっとりとした視線で見つめた。

「ねえ、先輩。一緒に入っちゃいましょうか?」

大悟は裏返った声で「なんで?」と、問い返した。

「先輩を一人で入らせたら、お風呂のお湯を飲もうとするじゃないですか。排水口にたまったお毛々を集めて、お守りとか言って持ち

帰るかもしれないでしょ」

「どれだけ人を変態扱いするんだか……」

しかし、妙なことを言われてしまうと、それをやらない自信はなかった。どのみち一人で入れば唯依はそういう目で見えるのだろうか？ と、深読みしてしまう。きつとチエスをやったせいだ。と、大悟は思う。

「じゃあ、先に入って待ってますね。……女の子に恥かせちゃ、だめなんだぞっ」

唯依は顔を真っ赤にしながら、キャハッと奇声を上げ、浴室にかけていった。

大悟はそーっとそーっと階段を登り、耳をドアにくっつけて中の様子をさぐった。大悟と咲希が使っている部屋でマッサージが行われていたのだ。あいかわらず美夜はいやらしい声を出して悦んでいる。

「指痛くなってきた」

「まだ三十分経ってませんよ。ほら、交替まであと十三分」

おあつらえ向きに持ち時間を教わってしまい、大悟は後戻りできなくなる。四十三分あれば、二人に気付かれることなく、唯依との秘密の入浴を済ませられるだろう。

大悟はゴキブリのように音もなく速やかに階段を下り、浴室前で服を脱いだ。タオルで前を隠してドアを開ける。

「やだ、先輩ったら……すっぱんぽん……」

見れば、唯依は黒いスクール水着を着用していた。途端に真っ裸でプールサイドにでもいるような羞恥心が芽生え、大悟は背を向ける。しかし、唯依がその背中を抱き締めて引き止めた。

「ゆ、唯依……当たってる……」

唯依は熱にでも浮かされたような声で耳元に甘く囁く。

「意外と小さくないでしょ？」

普段はペツタンコに見えた唯依の胸だが、水着になればさすがにいくらか膨らんでいた。背中に押し当てられると、男のものとは明

らかに違う柔らかさと体温を容赦なく伝えてくる。

「さあ、入ってくださいな」

浴槽は泡の出る入浴剤と、ボコボコ吹き出るジャグジーで泡だらけだった。背後から唯依に抱きつかれたまま、大悟はそろそろと浴槽に入る。

「洗ってあげますね」

唯依の手が泡を集めて大悟の体を滑る。体じゅうをくまなく滑った手が、ふとためらった。

「そ、そこはいいよ。自分で洗えるから」

そうこうしているうちに、背後でパシッという音が鳴った。振り返ってみると、唯依が水着から肩を抜いてズリ下げていた。

「こ、こんどは、先輩が私を洗ってくださいますか？」

「は、はい、よろこんで」

慌てて背を向けた唯依を後から抱くようにして、大悟は泡を集めた。首から腕にかけて、無難なところに手を滑らせる。そして、いよいよと意を決して二つの膨らみを包みこんだ瞬間だった。

「唯依、ちよつとごめ〜ん」

ドアがいきなりガバツと開く。

「美夜さんったら、蒸しタオルを作ってこいって。まったく人使いの荒いメイドさんだわ……」

湯気が途切れて三人は顔を見合わせた。大悟は硬直して、唯依の胸をつかんだままである。

「……お邪魔……しました」

咲希は静かにそう言い残して戻っていった。熱湯攻撃や水責めを想定して身構えていた大悟は、拍子抜けしてしまふ。しばしポカーンとした表情のまま唯依の胸を握ったり緩めたりして、ハツと我に返る。

「咲希……ごめん」

大悟は前を隠すのも忘れてザバツと立ち上がり、耳まで真っ赤に染まった唯依を残して浴室を出た。それでもなんとかパンツだけは

履いて咲希を追いかける。しかし、無情にも二階からボタン！と、ドアの閉まる音がする。ロックが下りる音がしたかと思うと、しゃくり上げるような泣き声が聞こえた。

「あらあら、あの太悟君がそんな大胆なことを？」

太悟がノックすると、

「変態！ 馬鹿！ 女つたらし！」

と、罵詈雑言が飛んでくる。

「咲希、ごめん！ とりあえず、開けてくれないか？」

コツコツと音がして、ドアが少し開いた。美夜が顔をのぞかせて首を横に振る。寝袋と太悟のスポーツバッグが放り出されて、またドアは閉じられたのだった。

バスローブ姿の唯依がドアの前に合流してきた。

「咲希ちゃん、ごめんなさい。私が誘ったんです。先輩はエッチな人だから断れなかっただけだと思うの」

しばらく間があつて、咲希の絞り出すような声が聞こえた。

「そいつはわたしのものじゃない……好きにすればいいわ……」
すると、唯依は

「わかりました。じゃあ、もらっちゃいますね」

と、あっさり答えたのだった。

「先輩、一緒に寝ましょ？ もしも咲希ちゃんにクビにされたら、うちで雇ってあげますから。……いいえ、私のお嬢さんとして、ゆくゆくはパパの会社を継いでくださいな」

太悟は唯依に手を引かれるまま、寝室に連れこまれるのであった。

「さあ、先輩、ちょっと気は早いですが、唯依をあなたのものにしてくださいませ……」

ベッドにアヒル座りして、ソーッと唇を差し出す唯依。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。風呂に入ったら喉がカラカラでさ」

太悟はひとつ走り一階からスポーツドリンクを取ってきた。その間に、寝室が間接照明で薄暗くなっていた。唯依は目から上だけを布団から出して、太悟に微笑みかけている。太悟は枕元に腰かけて、

ペットボトルをグビッと傾けた。

「ほら、水分補給」

唯依に押しつけて飲ませる。

「あいつ、相当怒ってたな。これはもうだめか？」

そんな切り口で会話を続け、ペットボトルが空になるまで回し飲みを続けた。

「先輩……なんだか……眠い……です」

「無理しなくていいよ。おやすみ」

「せつかくの……チャンス……」

そこまで言って唯依は寝入ってしまった。大悟は、中条からもらった、漢方だかなんだかの眠り薬を一服盛ったのだった。体重が軽い唯依から先に効いたのだろう。大悟もすぐに眠くなってくる。唯依を襲ったり襲われたりしないよう、二人でさっさと寝てしまおうと考えたのだ。

大悟は最後の力を振り絞って隣のベッドに移り、布団をかぶったのだった。

家来、大いに戦う 7

夢に入ると、唯依が大悟の唇を奪っている最中だった。

「こら、やめろ……」

「はい」

意外にもあつさり引き下がる唯依。世界じゅうを回ってデートしてきた娘達のように、指示を待つようにして行儀良く座っている。どうやら、不意打ちで眠らされたことで、自分が眠っていることに気付いていないらしい。つまりは通常の夢を見ているようだ。咲希に出会う前の大悟なら、チャンスとばかりに『いろんな事』をしただろうが、今はそれどころじゃないと部屋を出る。

廊下に出ると、美夜が困った顔で立っていた。咲希がへばりついて「お姉ちゃん、抱っこして」とべったり甘えていた。

「なんだか、子どもがえりしてるみたいなの。夢を見ているのにも気付いてないようだし……」

こちらは明晰夢を拒否したのかもしれない。大悟になんて会いたくないと怒ったまま寝てしまったのだろう。

「まったく、不用意にもほどがあるわよ。お嬢様に限って職権乱用でクビになんてしないだろうけど、ちょっとは気をつけなさい」

美夜は頭を掻く大悟に咲希を託した。

「今はたぶん、とつても素直な状態になってるから、謝るならチャンスだと思っわよ？ だからって悪戯しちゃだめだからね？」

美夜はそう言い残して唯依のいる部屋に入ってしまった。

大悟は咲希を連れて、本来眠るはずだった寝室に入った。

「咲希……その、ごめんな。あれはちよつとした気の迷いだ」

咲希はジーツと大悟の顔を見ている。パチクリとまばたきをする表情が可愛い。

「大悟はそれがあるから悪いことをするんだよ？ 取っちゃいましよっ？」

咲希は大悟の股ぐらに手を伸ばそうとする。夢の中でもそれは痛そうだと、大悟は咲希の腕をつかんで防御した。

「ねえ、それ、わたしにちょうだい？　大悟が女の子になって、わたしは男の子になるの。そうしたほうがしっくりくるはずでしょ？」

大悟は恐ろしくなって、両手で押さえてガードする。

「たぶん、咲希には似合わないと思うぞ」

咲希は残念そうな顔をする。

「じゃあ、それを取って、一緒に女の子になりましょう？　そうしたら、わたし達、親友になれると思うの。あなたを誰かに取られる心配も無くなるでしょう？」

咲希の手に大きなハサミが出現した。大悟はヒートと飛び退いてドアから逃げようとした。しかし、ドアが開かない。咲希は四つん這いになって、大悟にジリジリと近寄る。まるで、ワクワクして黒目が大きくなった猫のようだ。

「ごめん、もう悪いことしないから、こいつだけは勘弁してやってくれ！」

「やだ。やっぱり、それ欲しい……返して……わたしのそれ、返して！」

咲希が『後ろ足』で床を蹴って飛びあがる。

「や、やめろっ！　やめてくれー！」

哀れな草食獣はふと気付いた。こいつ、普通の夢を見てるらしいのに、なんで言うことかかないんだ？　と。

「よし、俺も男だ。責任をとって女になってやろう。ほれ、ほれ、切ってみろ」

大悟は仁王立ちになり、パジャマズボンに手をかけた。すると、咲希の顔がみるみる真っ赤になっていく。

「ちょ、ちよっと、やめなさいよ変態！　大ッ嫌い！」

咲希はベッドに飛び乗って、そっぽを向いて座った。

「本当にすまなかった。もう絶対に咲希を裏切ったりしないから……」

大悟は後から、しっかりと咲希の肩を抱く。すると、咲希はゆっくりと振り向いて、薄気味悪い笑みを浮かべた。

「ねえ、これなんだと思う？」

大悟の手の甲を『柔らかいのかたい何か』がビヨンビヨンと打った。

「こ、これは……俺の……？」

大悟は断末魔の悲鳴を上げて気絶する。つまりはリアルで目覚めていったのだった。

咲希は美夜から渡されていた魚肉ソーセージを眺めて、会心の笑みを浮かべた。しかし、それが何のダミーだったかを思い出して、ポイツと投げ捨てた。

「これで少しは懲りたかしら」

大悟よりも唯依が一枚上手なのは重々承知の上だし、これぐらいで済んで良かったのだと美夜に諭され、咲希としてもちよっとしたお仕置きで勘弁するつもりだったのだ。

そこへ、唯依達の寝室のほうから悲鳴が聞こえた。

「あいつ、またなにかやらかしてるの？」

眠りなおした大悟が腹いせに悪戯でもしているのだろう。咲希は「もう頭に来た」と勢いよくドアを開け、唯依達の寝室に飛び込んだ。

「さ、咲希ちゃん……なんか変なものがいるんです……」

唯依と美夜は手に手を取ってベッドの上で震えていた。指差す先には妙な生き物がいた。熊のような、巨大なネズミのような姿だが、鼻だけが長い生き物。

「……バク？」

「……たぶん」

バクはキューツと高い声で鳴きながら咲希に近寄る。バクといえは夢を食べる『獺』を連想する。獺は伝説上の生き物だが、そもそも実際のバクがモデルになっているらしい。と、咲希が何かで読んだ記憶をたぐり寄せていると、バクは急に咲希に向かって突進した。

「大悟、いい加減にしなさい！」

ずいぶんと手の込んだ悪戯だわ、などと思いながら、跳ね上げるような蹴りで容赦なく応戦した咲希。バクは壁にぶち当たって床に落ちる。哀れっぽい声で苦しそうにうめいていた。

「いつまでそうやってるつもり？ まったく、悪趣味な悪戯しちゃうって」

と、そこへ大悟の姿が現れた。バクとは別の場所、唯依達の隣のベッドからだった。

「……あせったぜ、危うく記憶を失うところだった。ん、なにやってんだ？」

咲希は、『大悟ではない得体のしれない生き物』を蹴ったと気付いてブルブルと震えた。

「これは、バクだな。この辺って動物園とかあったっけ？」

大悟が現れたことで女達は少し落ち着いたようだった。

「無かったはずです。少なくとも、バクなんかがいるようなところ
は」

大悟はバクにツカツカと歩み寄り、突然、サッカーボールよろしくフルパワーで蹴った。バクは気絶したのか、半透明になって消えていく。

「……あんたって、たまに人でなみたいなことするわよね」

得体が知れないとはいえ、可愛く見えなくてもない生き物を容赦なく蹴ったのである。それを非難されたと気付いて、大悟は心外な顔をした。

「バクってさ、夢を食うんだろ？ 食われたらどうなるか分からないし。っていうか、あいつ明らかに俺達を食おうとしてここに入ってきたんだろ」

「そっか……危ない生き物だったかもしれないのね」

大悟は手のひらから次々に散弾銃を発生させて女達に手渡す。

「美夜さんと唯依はここに残って動かないようにしてくれ。咲希、ちよっと外を見にいこう。俺から離れるなよ」

出ていきかけた大悟が振り返る。

「バクに限らず、妙なものが来たら躊躇なく撃て。どうせリアルでは死なないはずだし。あと、万が一仲間に撃たれたとしても気にするな。気にしなければ撃たれても平気なはずだから」

咲希を従えて出ていく大悟。残された女達はポーツとした顔で閉められたドアを眺めたのだった。

結局、他にバクは見当たらず、二人ずつ交替で眠って朝を迎えていた。バクが相手なのだから四人で夢にいたほうがいいような気もしたが、リアルで何かが侵入してくるかもしれない、という不安もあつたのだ。

「保護者代わりとして、これ以上の滞在は認められません。残念ですが仕度ができたら帰りましょう」

交替で眠ったとはいってもゆっくり寝ている気にならず、四人揃って妙に朝早い朝食中のことだった。唯一の成人である美夜はそう提案したのだが、唯依が何か言いたそうにしている。

「……そうか。今回は帰れば済むことだけど、あいつの正体を突き止めないで、この別荘を使えなくなっちゃうんだな」

唯依の顔がパツと明るくなった。

「さすがは先輩。我が家のお嬢さんとして、ちゃんとこの家の心配もしてくれるんですね。ゆくゆくは先輩の持ち物になるんだから、当然といえば当然ですけど」

唯依は大悟の右腕に抱きついた。ささやかな膨らみが押しつけられ、大悟はだらしのない顔になる。

咲希は大悟の左腕に抱きつき、ささやかではない膨らみで対抗する。大悟は、そのままあちらの世界へ早朝パトロールに出られそうなくらい、夢見心地の顔になった。

「そういうことなら、ガードマンを手配しましょう。リアルの心配が無くなれば、あっちでは四人でいられるし、うちの頼もしい家来がいるから平気でしょ？」

美夜は、一旦戻って、どこかしかるべきところに調査を依頼するべきだと主張したが、

「明晰夢を見られる探偵か刑事でも探すつもり？ わたし達でやっちゃったほうが手っ取り早いわ」

と、お嬢様に押し切られる形になった。

咲希は中条を通じてガードマンの手配をした。早速、今晚から来てもらえることになった。

「それまでは不安だし、海にでも行きましようか。三十分ぐらい行くと海水浴場があるんですよ」

と、唯依が提案するのだった。

海水浴を想定していなかったことから、海辺の街で水着を求めるところから始まった。『ファッション中嶋』という古めかしい店に入ると、白髪交じりの髪と無精ひげをばさばさにした、店主らしき男が一人で店番していた。いらっしやいませの一言もないまま、店主はポータブルテレビを眺めていた。

「あら、意外と可愛いのがあるじゃない」

こんな田舎のパツとしない店にしては、という意味にも聞こえたが、店主は一向に振り向きもしなかった。

「でも、サイズが大きいのばかりです。おじさん、もうちょっと……バストが小さめのつて無いんですか？」

店主は「そこにあるものだけだよ」と、面倒くさそうにつぶやいた。

「唯依はスクール水着持ってきてただろ？」

唯依はムーっと唸って悔しがる。

「……こうなったらトップレスでも」

「まあな、案外目立たないかもしれないし」

「ひどいです、昨夜は大事そうに触ってくれたくせに……」

咲希が無言で二人にゲンコツをはって、唯依はしぶしぶ、店先に吊された浮き輪やビーチボールのコーナーを物色し始めた。海に近い店だから、ついでにこの手の商品も置いているのだろう。

咲希と美夜は目星をつけて試着を済ませ、大悟も海パンを選んで会計に向かった。唯依はカラフルな水玉模様の浮き輪を手にした。

「カードは……使えないみたいね。おいくらかしら？」

商品にはことごとく値札がついていなかったのだ。

「……ちよっと、聞ってるの？」

心持ち大きな声を出した咲希に、店主はハーツとため息で応えた。

「金はいいから、さつさと出ていってくれないか……」

「そういうわけにもいかないでしょ？　しっかりしなさいよ」

店主は相変わらずテレビを見たまま、

「じゃあ千円均一でいいよ、そこに置いて、さつさと出ていってくれ」

咲希はムツとした顔で三万円ほど置いた。きちんとした水着なら二着だけでもそれくらいはするはずだった。

「そんないいものじゃねえよ。じゃあ一万な」

咲希は面白くない顔で二万円引っこめる。

残りの三人が財布を出して精算しようとする、

「唯依のお宅にはご厄介になってるし、あなた達の分は福利厚生費っていうことで……」

と、咲希。

すると店主が声を荒げて言った。

「ごちゃごちゃやってねえで、さつさと帰れ」

咲希が何か言い返しそうなを見て、大悟が「ほっとけ」と、止めに入る。

「失礼な店ね。行きましょう」

と、咲希は大悟に荷物を預けてさつさと出ていった。三人も慌てて後を追いかけたのだった。

飲み物や昼食を買おうと入ったコンビニも似たような有り様で、賞味期限から一日過ぎた弁当を無償で押しつけられた。砂浜において取りあえず腹ごしらえとなったが、咲希と唯依はペットボトルのジュースをちびりちびり飲むばかりだった。

「これ、まだ生きてるよ。酸っぱくないし大丈夫だ」

大悟が言っても信用しなかった二人だが、美夜がおいと味を確かめて太鼓判を押すと、しぶしぶ開封して食べ始めた。

「それにしても、こんなにお天気なのに誰もいないわね」

誰かが置き忘れたようなパラソルの下に座っていなければ、あつ

という間にこんがり焼けそうな日差しだった。それなのに、なんだか寒々しいくらい人っ子一人いない。間違って遊泳禁止の場所に来たんじゃないかと確かめたくもなかったが、海水浴場の看板もあるし、誰もいない海の家更衣室で着替えを済ませてきたのだった。

「これだけ貸し切り状態だと、唯依がトツプレスでも問題ないかな」

「じゃあ、さっきのお店で何かビキニを買ってきましようか。さすがに、『アンダーレス』は無理だし」

咲希はエメラルドグリーンのビキニを、美夜は白地に赤い花柄のビキニにパレオを巻いた姿だった。咲希の真ん丸ながらに張りのある胸や、美夜のボリウム満点で柔らかそうな胸、細くくびれた腰からプリッと盛り上がるお尻、まぶしい太もも。唯依は、大悟の視線が二人の体をなめるように行ったり来たりしているのに気付いたらしい。一方の唯依は収縮色の黒のスクール水着で、なけなしの胸をさらに損しているし、自慢のロングヘアもお団子に結い上げているから、『元気そうな女の子』にしか見えない。お姉さんな二人に差をつけられたと焦っているのだろう。

「どうせトツプレスなら海パンでもいいんじゃないか？」

「えゝ。私も可愛い水着を着たいですゝ。でも、先輩がどうしてもそうしてほしいなら……」

咲希がポツリと引き止める。

「なんかあの人病んでみたい。関わらないほうがいいわ」

唯依をからかって盛り上げようとした大悟だったが、またしばし波の音ばかりが繰り返された。

大悟は唯依の浮き輪を膨らませてやって、頭からズボツと装着させた。

「おまえ、泳げないのか？」

「プールでは泳げるんですけど、昔、海で足をつっちゃって、凄く怖かったんですよ。でも、先輩が手をつないでてくれれば大丈夫だと思います！」

やれやれ、と唯依の手をとって歩き出す大悟。

「唯依、待ちなさい。日焼け止め塗らないと」

咲希に引き止められ、日焼け止めを塗られる唯依。これは時間がかかりそうだなと、大悟は一人で海に入った。海水は生ぬるくらいの温度だったが、かんかん照りの中では心地良い。筋肉を慣らすように緩やかな平泳ぎから開始して、クロールに移行し、極め付けに豪快なバタフライを披露した。海でバタフライかよという笑いを女達に提供しようと思ったのだった。美夜は狙いに気付いたのか、指をさして笑っている。唯依が歩き出して、そろそろ女達も泳ごうかという気配だった。

アンコールに応えてもうしばらくバタフライをして顔を上げると、咲希が何やら慌てて浮き輪を抱え、砂浜を走っていくのが見えた。浮き輪を取られた唯依と、美夜も後を追っている。その方角を見てみると、誰かが溺れていた。

大悟はフルスピードのクロールで急行する。近付いてみると、溺れているのは着衣のままの中年女性だった。大悟は抱きつかれないように背後から近寄ろうとした。しかし、女はどうやっても大悟のほうを向く。まさに、藁にもすがる思いなのだろう。そうこうするうちに、にわかライフセーバーは物凄い力で抱きつかれ、身動きが取れなくなった。

「落ち着け！一旦離せ！」

したたかに水を飲みながらも、なんとか動かせる左腕だけで水をかく。

「大悟、受け取って！」

咲希が立ち泳ぎしながら浮き輪を放つてよこす。大悟は辛うじて浮き輪をかき寄せ、左肩からかぶった。浮力を得ていくらか落ち着いた大悟は、女のうなじ近くの襟をつかんで、なんとか呼吸を確保させ続ける。

「放してよ！あたしなんか……もう！」

女が叫ぶ。どうやら志願して入ったらしいと気付いたが、放すわ

けにはいかない。咲希の到着を待つて浮き輪を女にかぶせ、二人で曳航して浜に上がったのだった。

少しふつくらとした四十代ぐらいの女だった。咳がおさまるのを待つて事情を訊ねたが、「余計なことを……」と、呟くばかりだった。いくらか土地勘のある唯依が携帯で警察を呼んだ。大悟はとりあえず、と、流木など集めて焚き火をした。服が濡れたままでは寒いだろう。女が震え続けていたのだ。

「……遅いわね」

待てど暮らせどパトカーも救急車も来なかった。

「……この町はもう……死んでるのよ」

意味深な言葉を聞いて、あれこれ訊ねる大悟だったが、女はまたしても無言を通した。

「あ、おまわりさんが来ましたよ」

美夜が走っていつて警官を引きつれてくる。

「ったく、面倒なことをしてくれたもんだ。この暑いのに調書を書かされる身にもなってみろってんだよ」

非道な一言だったが、真っ先に文句を言いそうな咲希でさえ黙っていた。この町はたしかに何かおかしい。まともに相手をしたところでどうにもならないのは、すでに明白だった。

警官と女はどちらが救助されたのか分からないくらい、よろけた足取りでパトカーに向かった。

「いったい、何があったっていうんだ……」

「とにかく、この町を出ましよう」

せつかく来たのにと唯依が残念がったので、隣町で見つけた市民プールに入って時間をつぶし、一行は別荘に戻ったのだった。

家来、大いに戦う 9

「唯依、もう少しだから頑張りなさい。一人で寝たらバクに襲われるわよ」

帰りついてシャワーを済ませると、もう花火大会の時間が迫っていた。どうしても行きたいと楽しみにしていた唯依が一番眠そうにしている。ソファでコックリコックリ始めた唯依を寝せないためにも、一行は大蛇大社を目指した。

十分ほど登って下つての道のりを歩いていくと、神社らしき建物が見えてきた。歴史のある神社とは違い、まだ新築つぼさが残る建物で、あちこちに金細工が施されていた。都会に立っていたら金泥棒にあつという間に削られていたかもしれない。開放たれた門をくぐると、白装束の男がプレハブ小屋から出てきた。門番をしているらしい。

「神代さんのご招待で来たんですが」

「……あんたらみたいな若いのが巫女様の知り合いだったか？ まあ、今日は一般開放してるから、好きに入るとええ」

男はさつさとプレハブ小屋に戻り、一行はただっ広い敷地を進んでいった。地面が土の、まるで学校の校庭のような場所だった。そこを突っ切って歩くと大きな神社にたどりついた。賽銭箱があつて、なんとなく大悟がポケットから小銭を出して参拝すると、女達も続いた。

「これこれ、あんたらどっから来なさった？ 龍^{たつがみ}神様には八回礼して八回拍手だろうに」

どこからか現れた爺さんに従い、一行はやり直しをさせられた。

「違う違う、おなごは拍手なぞ打たんでええ」

注文の多い神様だなど面倒になってきたあたりで、聞き覚えのある声がした。

「よく来たな。彼等は私の客人だ。案内してやってくれ」

神代はそう言ったきりどこかへ行ってしまったが、爺さんが手のひらを返したように丁寧な態度をとった。

「こちらへどうぞ」

小高い丘を登ってついでいくと、赤い毛氈もうせんを敷いた縁台に野点傘のだてがさのセットがいくつか並んでいた。時代劇でご隠居様やうつかりした家来が団子を頼るシーンでおなじみのあれだ。それぞれに豪華な重箱が並べられていて、その重箱を挟んで一人ずつ座るように指示された。大悟、重箱、咲希、唯依、重箱、美夜という並び順になった。美夜の隣には甚平姿じんぺえの若い男が座っていた。

「おお、すげえ美人じゃねえか。よく見ればそっちのお嬢ちゃんたちも」

「巫女様のお客人ですぞ」

言われると、チャラチャラした男は「おお、おつかねえ」と、あちらを向き、重箱を開けてつまみだした。盃に手酌して、グイグイと飲んでいる。

「ささ、あなた方もご遠慮なく」

爺さんが重箱の蓋を開き、箸やら盃やらをセットする。大悟と美夜の手元に盃が置かれ、爺さんはそばに立っていた女中らしき人に「お嬢さん達にジュースでも」と、声をかけた。大悟は「俺もまだ十九なので」と、言ってみたが、

「御神酒おみきじゃ御神酒おみきじゃ」

と、爺さんは一献注いっけんいでいってしまった。

「あら、美味しいわ」

舌の肥えたお嬢様を唸らせる味。宗教施設だからといって精進料理ではなく、豪華和風懐石といった感じの料理だった。ローストビーフやら刺身やらもあったから、大悟も退屈しない献立だった。

大悟は注がれてしまった盃をちびりと傾けてみる。少し悪戯して飲んだことはあるが、大人が見ている前で飲むのは初めての経験だった。そんな大悟でも飲みやすいと感じる日本酒は、喉ごしがいいのに芳醇で、米からできているのにフルーティといわれるようなも

のだった。

「ふむふむ、酒って美味いんだな」

「酔いつぶれたら置いて帰るからね」

見知らぬ施設で遠慮がちではあったが、それでもワイワイと食事していると、小さな女の子が丘を登ってきた。小学校低学年ぐらいだろうか、大人達と同じような白装束を着ている。遠巻きに大悟と咲希のいる辺りを見て、指を咥えていた。

「どうした？ こっちきて食べるか？」

大悟が手招きすると女の子は嬉しそうにかけつけて、大悟の膝にちょこんと座った。大悟は左腕で女の子を支え、右手で盃を傾ける。咲希は楽しそうに女の子のリクエストに応え「あーんして」と、食べさせていた。

「おねえちゃんは、お名前なんていうのかな？」

咲希がいつもより高い声で訊ねた。ちびっ子や小動物に話しかけるととき特有のあれだ。

「あたし、^{あおい}葵」

「あら、素敵なお名前ね。わたしは咲希、こっちのお兄ちゃんは大悟よ。ところで、葵ちゃんのパパやママは一緒じゃないのかしら？」
葵はシュンと暗い顔になる。美夜の向こうで飲んでいた男が代わりに答えた。

「そいつに親はいねえよ。いつの間にかこの施設のどこかで生まれた孤児だ^{みなしこ}」

いたたまれなくなつた咲希は次々に料理を勧めた。大悟はガブリと盃をあおった。

「お、いたいた、お客人に迷惑かけたらだめでねえか。おや、おめえまだ『二つめ』のガキンちょのくせして……これは反省房さ入らねえばねえな」

大悟達を案内してきた爺さんだった。葵の手を引いて大悟から引き剥がそうとする。

「反省房ってなんだよ？」

大悟は爺さんをジロリとにらんだ。だいぶ酔いが回っているような顔だ。

「いえ、この子はまだ位の低い修行者でしてな、肉や魚、嗜好品の類は厳禁なんですわ」

客に氣遣ったのか、にこやかな表情になった爺さんだが、なおも葵を連れていこうとする。

「俺は葵と花火が見たい。葵が美味い美味いつてごちそうを食べる顔を見ていたい」

爺さんはチツと舌を鳴らして戻っていった。

「あんた、ちよつと飲みすぎじゃないの？ ほら、あとはもうジュースにきなさい」

大悟は盃にオレンジジュースを注いで飲んだ。少し、わけが分からなくなっているようだった。

「お、始まるぞ」

特等席からは、遠くで職人達が準備している姿までよく見えた。放送が開始を告げ、花火の名前など解説しながら花火大会が始まったのだった。

腹に響く大きな音に葵は縮こまったが、

「ほら、綺麗だから見てごらん」

と、大悟が言う空を見上げて目を輝かせた。

「たゝまやゝ！」

大悟が叫んだのを見て不思議そうに見つめる葵だったが、咲希が叫んで見せると一緒になって叫びだした。たまや、かぎやと叫びながら、ケラケラと笑う無邪気な少女。いつの間にか唯依と美夜もそばにきて、賑やかな掛け声が続いた。

花火が小休止になると、神代がそばにいるのに気付いた。

「楽しんでるようだな」

「はい、おかげさまで。すっかりご馳走になってしまつて……」

美夜が代表して大人のやりとりをしていると、葵は怖ず怖ずと神代に歩み寄った。

「巫女様……あたし、我慢出来なくて、ご馳走を分けていただきまして。ごめんなさい」

神代は葵の頭に手を置いて、穏やかな笑顔を浮かべた。

「よいのだ。そなたのような小さきものには修行などまだ早い。いつも言うておるのに、年寄りどもの頭のかたいことときたら」

大悟は、ふいに思い詰めたような顔をして神代を見る。

「この子を、守ってやってくれ！ あんた偉いんだろ？ 他のやつらにいいじめられないように、真つ当な大人に育つように……」

神代は小首を傾げていたが、

「案ずるな。この子は龍神様より授かった子だ」

と、よく分からない返答をした。

「すみません、こいつ酔ってるんです」

咲希がフオローに入ったが、大悟は「へーきへーき」と、また盃に注ぐ。

「あんた、花火のどさくさに紛れてまだ飲んでたのね？」

咲希は大悟が盃を空けるのを見届けて、ペシッと右手を叩いて盃を取り上げた。

「咲希ちゃんはやけだなあ。祭のときぐらい、いいじゃんか」

大悟は咲希の太ももをさすりながら、盃を取ろうともがいていた。

「やめなさいよ、恥ずかしい」

美夜が盃を遠ざけてしまうと、大悟は咲希の膝枕に頭を預けていびきをかいた。

「ちよつと、一人で寝ると危ないわよ？」

咲希が揺り動かしてみても大悟は眠り続けた。うなされるようなことがあつたらかけて起こそうと、手元にウーロン茶のボトルを引き寄せた。

「じきにクライマックスの大スターマインと、龍神花火が始まるぞ」
神代は似合わないカタカナ語を残し、葵の手を引いて戻っていくのだった。

放送がかかって、大スターマインが始まった。パラパラという小

さな花火から始まって、次第に盛り上がっていく。大輪の花火が折り重なるようになってくると、広い敷地をぐるり取り囲むように、一直線の仕掛け花火が駆け抜けた。永遠に続くのではないかと錯覚するほどの連発が続き、仕掛け花火は八つに枝分かれした。空を焦がした花火が止むと、職人達がいた敷地中央に教壇のロゴにもなっている龍の顔が浮き上がった。仕掛け花火から枝分かれして、八つの頭を持つ巨龍。八岐大蛇やまたのおろちを象った（かたどった）ものらしい。丘の向こうから「龍神様ご光臨！ 万歳！」と、掛け声が上がった。

「……ど、ドラゴンだ……逃げろ！ 唯依、逃げろ！」

大悟が妙なうわごとを言い始めて、咲希はウーロン茶をかけた。気付けば唯依も縁台に横たわっていた。咲希は大悟に往復ビンタを繰り返して、美夜は唯依を揺すって起こした。

「いててて……頭いて」

大悟は起きるなり草むらに走って行ってオエーつとやった。唯依は起きるなり美夜にしがみついてプルプル震えていた。

「なんか、凄いのがいました。頭が八つあって真っ黒なドラゴンみたいなやつ」

甚平の男が立ち上がり、唯依に声をかけた。

「真っ先に龍神様に会ったとは、めでてえじゃねえか。さてと、俺は寝るぞ」

男が行ってしまったと、辺りには誰もいなくなった。唯依が「そこにドラゴンがいたんです」と気味悪いことを言いだして、女達は大悟を引きずりながら、そそくさと退散するのであった。

別荘には二人組のガードマンが到着していた。ようやく味方が増えたことでいくらか安心する女達と、トイレから出られない酔っぱらい。

「なるほど、大蛇大社が住み着いた土地周辺には謎の集団精神病……だそうです」

唯依がノートパソコンで調べた結果だった。薬物や人には聞こえない周波数の音声で洗脳されているんじゃないか、というような憶測が流れていたが、真相は不明ということだ。

「例のバクとそのドラゴンと、やっぱり関係があるのかしら」
咲希が問うともなしに言うのと、

「そういえば……ドラゴンがバクを食べてました。なんだかバクのほうから進んで食べられにいったようにも。私達には見向きもしなかったし」

真っ青な顔の大悟が合流してきて、咲希がかいつまんで説明した。大悟は確かめたいことがあると、唯依のパソコンで検索を続行した。
「やっぱりか。あのバクの正体は信者だ。『御柱様』だの『龍神様』だのとわめきながら食われにいったからな。見てみる」

大蛇大社では『大龍神命』を名乗る教祖のことを『御柱様』と呼ぶ。龍神の化身で、人の姿をした神、『現人神』あらひとがみなのだという。教祖の本名は山田龍造、五十三歳。元々は神々の頂点に君臨していた龍神こと八岐大蛇が神々の謀反に遭い、秩序を失った天界はいまだ混沌の状態で、龍神を復活させなければこの世は滅亡する、という教義らしい。

「ありがちな終末思想だな。おそらくあのドラゴンの正体は教祖だろう。信者は夢の中で教祖に食われることで精神エネルギーかなにかを提供して、ドラゴンに力を与えているんだと思う」

「よりによってバクの姿をしているってことは、バク自身もどこか

からエネルギーを集めているんじゃないかしら？」

一同は顔を見合わせた。

「それが昼間行った町で起こったことの真相か。バクに食われると精神を侵されるのかもしれないな。いや、精神力を吸われて無気力になるってどこか」

美夜が浮かない顔をしている。

「まさか、そのドラゴンを倒しにいくなんて言わないでしょうね？ たった四人で一教団の企みをどうこうできるはずがないし、危険すぎますわ」

大悟は美夜の肩に手を置いて、優しい目をした。

「怖かったら美夜さんは行かなくていいよ。咲希も唯依も、怖かったら俺に任せればいい」

「かつこつけてんじゃないわよ。あんた一人で行ったら、お酒でも振る舞われて、油断したところをパクつと食べられておしまいじゃないの」

と、咲希は憎まれ口を叩く。

「先輩なら、綺麗なお姉さんに誘惑されて、そこをパクツと食べられるんじゃないかしら？」

唯依も便乗した。つまりは一緒に行くと言いたいのだろう。

「だめですよ、あなた方にもしものことがあつたら……」

「美夜さんの言いたいことはわかるけど、このまま教団を野放しにしたら『集団精神病』がますます広がるかもしれないわ。それに、ドラゴンを復活させて、もっと悪いことをするかもしれないじゃない。今のところ、あいつらと戦えそうな人なんて、わたし達しかないでしょ？」

美夜はプーっとふくれっ面になって言った。

「私だって、こんな弱虫で卑怯な大人みたいなことは言いたくないんですよ。ただ、私しか大人がいないからと思って、保護者っぽい役回りを一応やってみただけで……」

あゝあ、私も青春したいわゝ、と、投げやりに言ったあとで微笑

んだ。

「じゃあ、青春しようか。くよくよ考えたって始まらないだろ？『不安に思うから不安な現実がやってくる』って、咲希の親父さんも書いてたしな」

「そうよ、『願って確信したことは実現する』のよ。わたしはみんなと自分自身を信じてる。絶対出来るわ」

なんとなく肩を組んで円陣を作り、『おー！』と、声を上げる。

「やだ、先輩ったらお酒くさ〜い」

「あんた、寝ながらゲーってして、わたしにかけたら承知しないかなね？」

「え、今晚は一緒に寝てもいいの？」

大悟は咲希に抱きついて、ほっぺを吸う。咲希は「酔っぱらい」と迷惑そうな顔で言うが、振りほどく気はないようだ。

「『いいこと』してて遅刻とかは無しですよ？でも、どうしてもなさるなら『対策』を……」

美夜がからかうと、

「だ、だ、だから、そそ、そんなことしないってば！」

咲希は慌てて大悟を突き飛ばした。唯依がささず受け取って言う。

「あら、咲希ちゃんがしないなら、是非私と。冒険ものに濡れ場はつきものでしょう？ね、セ・ン・パ・イ」

酔った勢いか唯依のお尻を撫でまわしていた大悟だったが、咲希の凝視で凍りつき、

「唯依が相手じゃあ、なんだか犯罪チックな絵面になりそうだな」と、冗談めかして言うのだった。

「もう、先輩の意地悪！」

決戦を控えながらもお気楽な四人であった。

眠りについた四人は、大蛇大社上空から様子をうかがっていた。上から見てみると敷地が龍神の顔の形になっている。花火を打ち上げていた、校庭のような場所に、巨大なドラゴンが鎮座していた。

八つに枝分かれた首を持っているが、胴から四本脚が生えていて、尻尾が八本ある。大蛇というよりはドラゴンのほうがしっくりくる。そのまわりにはおびただしい数のバクがいて、人間をかついでいってはドラゴンに差し出し、ドラゴンの八つの頭がそれぞれに食らいついていた。中にはバクが人を食べ、その身をドラゴンに捧げる姿もあった。

「あつちや、これは物凄い数だな。いっそのこと爆撃でもするか？」

「そんなことをして片付けたとしても、信者達が眠り直せば、また湧いてくるんじゃないかしら？」

咲希が難色を示すと、唯依も付け加えた。

「うかつにこちらの存在に気付かれると、厄介かもしれませんね」
ウーンと唸る一同。

「そうだわ！ 信者の皆さんを怀柔してみましよう」

と、美夜。葵のように粗食を強いられて、ストレスをためている者が大勢いるはずだから、美味しいものを食べさせれば誘惑できるかもしれないというのだ。

「なるほどね。美味しいものだけだと引つ掛からない人もいるだろうから……」

咲希は美夜に手のひらを向け、強制的に着替えさせた。黒い上下のランジェリーにパツンパツンのフリルエプロン、頭にはフリルカチューシャというエロメイドスタイルである。大慌てで目をそらすのは大悟だった。

「もう、夢の中だからってこんな格好させて……」

美夜は「えいつ！」とお返しをした。咲希はバニーガールの姿になった。キヤーキヤー騒ぎながらも、大悟のほうをチラチラ見ている咲希。

「に、似合うかしら？」

両腕を広げてむしゃぶりつきそうな大悟に、咲希は命じた。

「待て、おあずけ」

大悟は空中でおすわりのポーズをして、クーンクーンと鼻を鳴らしそうな顔をする。

「私は何に変身すればいいですか？」

唯依は目をキラキラさせて、なんらかのコスプレをしたがっているようだった。

「うーん、唯依は露出を増やしたところで……」

「先輩、いいかげんにしないと、ドラゴンのエサにしちゃいますよ？」

プンプン怒っている唯依に大悟は手を向けた。唯依は巫女の格好になった。

「唯依は見るからに『乙女』だからな。神代なんかより、よっぽど説得力があるかもしれないぞ」

遠回しに幼児体型と言われているのにも気付かず、無邪気に喜ぶ唯依だった。

「じゃあ、わたし達がバクを足止めしている間に、大悟はドラゴンを探ってきてくれるかしら？」

「三人で大丈夫か？ かじられそうになったら逃げるんだぞ？」

「あんたのほうこそ、一人で倒してやるうとか無理しちゃだめよ？」

あんたに、もしものがあつたら……」

「あつたら？」

大悟が興味津々の顔で見つめると、咲希はプイツと顔をそむけた。「もしものがあつたら、明晰夢を見られる家来を探し直さなきゃいけないでしょ」

へいへいと呟く大悟。四人は早速、バクの群れの外周あたりに降

下し、炊き出しの屋台を発生させた。

「さあさあ皆さん、お疲れになったでしょう。少し休んで、龍神様の復活を盛大にお祝いしましょう！」

美夜が叫ぶと、バク達は一斉に振り向いた。薄気味悪い光景だったが、女達が豪華な料理を発生させ、美味しそうな匂いと湯気が漂いだと、バクの変身が解けて人の姿が詰めかけたのだった。

「ほほあゝめんこくて、ボインボインなメイドさんじゃの〜」

「こっちのバニーちゃんもまた萌へえ〜」

またたく間に美夜と咲希の屋台に行列ができた。唯依のところには数えるほどしか集まっていなかった。まるで人気投票でもしているかのようだった。

唯依は形勢不利と悟ったのか、屋台の影に隠れて着替えた。いつも学校で着ている制服姿になり、ひよこがプリントされた真新しいエプロンをしている。髪は二つに結んだツインテール。そして、ちよつと上目遣いになり、必殺の一言が飛び出した。

「お兄ちゃん達、早くこないとご飯抜きなんだからね！ 今日わたしが生懸命作った手料理なんだぞ！」

たまらん！ と、切なそうに叫んで唯依の列に加わる者が増えた。ちよつとイケナイ趣味のお兄さんやおじさんかもしれない。

料理がある程度行き渡り、酒なども振る舞って、そこらじゅうが宴会ムードになってくると、かたくなにバクのままでいた者達に変身を解いた。中身はいろんな年格好の女達であった。「あの子、絶対、計算よね〜」とかなんとか文句を言いながらも、ちゃっかりと、もらうものはもらって楽しそうにしている。

大悟はこっそり抜け出してドラゴンに駆け寄った。近くで見るとやはりでかい。首の一本一本がビルのようにそびえていて、赤く光る目が、ちょうど高い建物に設置される航空障害灯を思わせた。黒々としていて、濡れたようにいやらしく光る爬虫類の肌。連中は神として崇めているが、それはまるで悪の象徴にしか見えない。バクたちが途切れて退屈しているのか、苛立ったように唸っている。鼻

息だけでもブシューブシューと突風が巻き起こるほどだ。

しかし、これだけの大物にどうやって対抗するべきか。思案する大悟の後でジャリツと地面が鳴った。

「そなたも龍神様を拝みにきたのか。殊勝な心掛けだな」

神代がいた。大悟は振り返って頭をかきながらヘラヘラと笑う。

「じ、実はそうなんだ。それにしてもでっかいな。さすがは神様だ」

神代はフンツと鼻を鳴らす。

「ところで、あの乱痴気騒ぎはなんだ？ そなたの仲間が仕掛けているようだが？」

このままでは計画が露呈してしまう。大悟は答えるよりも早く神代の背後にワープし、神代の口元を手で覆った。

「たんまりご馳走になったから、おとなしくすれば手荒な真似はしない。さあ、一緒に来てもらおうか」

神代はフッフッフと笑いだし、しまいには腹を抱えて涙が出るほど大笑いしている。

「なんの真似だ。そなた、この龍神の巫女にかなうとも思っているのか？」

大悟の体が宙を舞った。背負い投げされたようだ。そのままみぞおちを踏み付けられ、呼吸困難に陥った。大悟は顔を歪めながらも、手の中にサイレンサー付きの拳銃を発生させる。

「悪いが、あんたには目を覚ましてもらうぜ」

トストストスつという音と共に、鉛の銃弾三発が発射された。神代の姿が消え、大悟は体勢を立て直した。

「危なかったぜ……」

「危なかったとは、危ないものが去ってから言う言葉だ」

大悟が振り返ってみても誰もいない。姿を消しているのか、と、気付いたときには背中に違和感を感じたあとだった。

「手が汚れるではないか。この巫女の手を穢すとは、万死に値する罪だぞ？」

背中の中でボキツという大きな音がした。痛みすら感じることなく、体の自由が全くきかなくなった。

「それ、お前も龍神様の糧にしてやろう」

神代は大悟の首根っこをつかんで飛びあがり、ドラゴンの顔の近くまで上昇した。大悟は口をきくことさえできない。

「こちらで死なせたところで意味は無いからな。龍神様の腹の中でせいぜい奉仕するがいい」

神代が大悟を放り投げると、八つの巨大な頭が競うようにして迫った。そのうちの一つがパクツと大悟をとらえ、飲みこんだ。

神代は急降下すると、炊き出し屋台に向けて火炎を放った。

「そやつらは天界の間者ぞ！ とらえて龍神様に差し出せ！」

叫び声は、どんちゃん騒ぎしている信者達には届かなかったようだ。

「ええい、役立たずどもめ」

神代は、屋台から逃げた咲希達のそばに着地した。

「このめでたい日に、とんでもない狼藉をやらしてくれたものだな」

咲希は神代の姿に気付き、「大悟……」と呟く。

「あんた、大悟をどうしたのよ！」

神代はせせら笑って言う。

「今頃は龍神様の腹の中だ。そなたらも後を追うがいい」

神代が三人に向けて手のひらを掲げる。

「返して……わたしの大悟……返せ！」

咲希が土煙を上げる勢いで駆け出し、神代に殴りかかる。唯依は屋台のがれきからフォークを拾って続く。神代は涼しい顔でかわし、受け流して二人をからかっているようですらあった。

「それぐらいにしておけ」

神代の拳が咲希のみぞおちをえぐり、続けざまに唯依を下段回し蹴りでなぎ倒した。お嬢様二人は倒れたまま動けない。暴力を振るわれた経験などなかったのだろう。

神代は手錠を発生させた。

「お転婆娘には別の仕置きが必要だな」

神代が咲希の手首を持ち上げた瞬間、

「手ぬるいですわ、巫女様」

と、美夜が歩み寄ってきた。そして、銃声が二発鳴り響いた。

「な……ん？」

美夜が咲希と唯依を続けざまに撃つたのだ。

「私、大蛇大社の一員でしたのよ、お嬢様」

咲希と唯依は目を見開いた。そのまま存在が半透明に薄れて消えてゆく。

神代は美夜を値踏みするような目で眺めた。

「何を企んでおる」

美夜はクスッと笑って首を振った。

「何も。私は保護者として、あの子達をこれ以上関わらせるわけにはいかない、起こしただけですわ」

美夜は神代に銃口を向けて乱射した。神代は銃弾を素手でつかみ取り、地面に捨てた。

「当たったところで、どうということはないが」

美夜は続けざまに叫んだ。

「止まりなさい、ひざまずきなさい、私の言うことをききなさい！」

と、命令したが、神代は微動だにしなかった。

「ふむ、そなたら、我らが夢現ゆめうつろの法ほうを学んだわけではないようだ。しかし、こちらの世界で自在に動く原理は同じだろう」

神代は美夜に歩み寄りつつ言う。

「思ったより厄介な連中だったようだ。そなたには、もうこちらに出入りできないほどの屈辱でも受けてもらおうとするか」

「屈辱？」

「幹部連中が田舎暮らしに退屈しておつてな。同じ女性として不本意ではあるが、慰み者の一人や二人あてがってやるのもまた、巫女の甲斐性というものだろう」

美夜はフリルエプロンの首根っこをつかまれ、引きずられるようにして歩かされる。

「ちょ、ちょっと待って、そんなつもりじゃ……」

てつきりドラゴンのエサにされて、大悟を救出する機会もあるだろうと踏んでいたのだ。

「そなたの『つもり』に付き合う馬鹿がどこにおる」

美夜は「あーれー」と悲鳴を上げながらも、銃をこめかみに向けて発射した。

「おやおや、それはいかんぞ」

半透明になった美夜のこめかみに、神代が手を当てる。その手がボウツと白い光を帯びると、美夜の傷は癒え、存在感が元通りに復活した。

「そなたもメイドなら観念して男達に尽くすがよい」

神代は美夜を連れたままテレポートして、どこかの建物に移動した。畳敷きの大広間だった。神代がテレパシーでも使って知らせたのか、五人ほどの男がテレポートしてきた。花火大会で酒を飲んでいた男もいる。

「おお、さっきのねえちゃんか。あんたみたいないい女は久しぶりだぜ。可愛がつてやるからこつちこいよ」

男が手招きすると、別の男が美夜の背を押した。

「ほら、若旦那様をお待たせするんじゃない」

敵ながら見知った顔にホツとする。事情を知らずに出会ったなら、デートぐらいしてもよさそうな男だった。神代の気配が消えると、美夜はためらいがちに『若旦那様』に抱きつく。

「さっきお会いしたときから、あなたのことが気になっておりましたの。もしよろしければ、二人きりで……ご奉仕させていただきたいのですが」

「こりゃいいや。俺様に一目惚れしたってわけか」

若旦那は背後から美夜を抱き直し、豊かな胸をむんずとつかんだ。男達はほーっと酒臭いため息をついて、羨ましそうに眺めている。

美夜はきつく目を閉じて、おじいちゃん、おばあちゃん、ママ、ごめんなさい。……中条さん。と、それぞれの顔を思い浮かべる。なぜこんなときになって中条のことを思い出すんだろうと、思案を巡らす。そして自分の気持ちに気付いたときには手遅れだった。

「まあ、あんたも何かやらかして連れてこられたようだからな。二人きりってのはまずいだろ」

若旦那が目配せすると、男の一人が布団を発生させて美夜を組み敷く。

「いや、やめて……中条さん助けて……」

「へっへっへ、あんた男がいるのかい？　まあ、これだけのべっぴんさんなら当然だろうがな」

坊主頭をした不潔そうな男が美夜に口付けようと顔を寄せる。美夜が甲高い悲鳴を上げると、頬をいやというほど殴られた。何発も、何発も……。

美夜さん起きて！

美夜の頬を往復ビンタしていたのは咲希だった。間一髪のところ、美夜は起こされたのだ。しかし、いつかの大悟のようにすまきにされていた。

「さてと、事情を説明してもらいましょうか」

美夜はホッとしたせいか涙が止まらなくなって、ワーッと泣いた。咲希がブツブツ言いながらロープを解く。

ようやく泣き止んで、美夜は事情を説明した。二人を逃がそうと思ったこと、大悟を救いに行こうとして神代に捕まり、男達に差し出されてしまったこと、そして、ついでに中条の顔が思い浮かんだことまで。

「なるほど、美夜さんは先輩のこと諦めてくれるんですね。たしかに、中条さんもかつこいいし、凄い人だし、お似合いだと思います」
咲希に「いまはそれどころじゃない」と突っ込まれて、小さな舌をのぞかせる唯依だった。

「問題は、大悟が帰ってこないことなのよ」

三人は部屋を移った。大悟がなんだかニヤニヤした顔で眠っていた。水をかけられた形跡があり、頬が真っ赤に腫れあがっている。相当手荒に起こされたようだが、それでも起きなかつたらしい。

「先輩のことだから、きつと、なにかエッチなことでもしてて、こっちに戻りたくないんですね」

唯依の言葉に二人もウンウンとうなずいた。

大悟は一つ大きくしゃみをした。唯依の予想に反してエッチなことはしていなかった。何本もの配線がつながった金属製のヘルメットをかぶらされ、精神エネルギーを吸われていたのだった。

「きゝもちいいゝ」

周囲には無数に同様の電気椅子みたいな装置があつて、バクや人間達がよだれを垂らしてエネルギーを吸われている。ドラゴンの腹の中は生き物の体内というより、何かの研究所みたいな場所だった。リノリウムの床にまぶしくない明るさの白い壁。それ以外には窓があるわけでもなく、殺風景なところだ。

はるか向こうには、この『施設』を管理しているらしい中年男がいた。男のデスクから、モニターとキーボード、マウスなどが馬鹿でっかい箱につながっている。いわゆるパソコンとは違う、高性能なコンピュータなのだろう。

大悟は遊園地の巨大滑り台にも似たドラゴンの喉を滑ってくるうちに、『自分の体が元通りだ』と思えば元通りになることに気付き、とつくに復活していた。ついでだからドラゴンの弱点でも発見できないかとウロウロしていたら白装束達に捕まり、装置にかけられたのだった。それも調査のためにあえてしたことであつた。しかし、エネルギーを吸われる装置が強烈な快感を伴って、一緒になつてよだれを垂らしていたのである。

アホ丸出しの顔で座っている大悟の袖を誰かがクイクイツと引つ張った。大悟はその手を「うるさいな」と何度か払いのけたが、しつこさに負けてそちらを見た。葵だった。声をかけようとする、と、シーッと人差し指を立てる。

葵は慣れた手付きで大悟のヘルメットをはずし、大悟の手をとってどこかヘレポートした。

淡いピンクの壁にカラフルな風船模様が散りばめられた部屋だっ

た。シングルベッドとシステムキッチン、二人がけのテーブルセツト、冷蔵庫があるだけのシンプルな部屋だが、ベッドの上は大きさまざまぬいぐるみで埋め尽くされていた。

「葵のお部屋へようこそ、おにいちゃん」

大悟は座るともなしにテーブルセットの椅子に腰かけた。葵も向かいに腰かけて、部屋の真ん中で二人は対面する形になった。

「ここはいつたい……？」

葵は少し自慢げな顔をして言う。

「葵のお部屋だよ。ここも龍神様の体の中だけど、いつもこっそり抜け出してきた遊んでるの」

気付けば出入り口も無く、この空間があると知った上でテレポートしてこなければ入れないような部屋だ。葵好みの部屋らしいが、葵一人で考えついて作り上げたものとも思えない。

「ここは誰が作ったんだ？」

葵は「内緒なんだけど……」と、ためらいながらも、

「巫女様が作ってくれたの。忙しくないときには遊びにきてくれるのよ。いいでしょ？」

よくない、大変よろしくないと叫びたい大悟だったが、葵は神代のことが好きなのだろう。背骨をへし折られてドラゴンのエサにされたなどとは言いづらかった。

神代が来るかもしれないと思うと、途端に逃げ出したくなる大悟だったが、葵が冷蔵庫からフルーツ牛乳のパックを取り出してきてコップに注いだ。それを振る舞われて立ち上がるわけにもいかなくなる。

「夢の中ならなんでも好きに出して、飲んだり食ったりできるだろう。なんでそんな面倒なことをしてるんだ？」

「巫女様が用意してくれたものしか食べちゃだめなの」

また子どもに変なルールを押しつけているのかと、大悟は顔をしかめた。しかし、どうやら事情が違った。夢の力に目覚めたばかりの葵はお菓子を山ほど出して食べていた。それを神代が、「夢の中

で癖になると現実世界でも食べたくなくて、おデブになっちゃうぞ」と、適量のおやつを用意してくれることになったらしい。

「へへ、あの神代も葵の前ではそんな喋り方するんだな」

「巫女様はえらい人だから、周りに大人がいるときには、えらい人の喋り方をするんだって」

大悟が懐かしく甘いフルーツ牛乳に手をつけていると、葵はポケットをまさぐって、なにやら取り出した。細い金のチェーンと卵形のトップがついたペンダントだった。

「御柱様に取り上げられちゃったけど、思い出して作ってみたんだ」

渡されてつまみを押してみると、ペンダントがパカッと開いて、中には写真があった。

「これは……」

赤ん坊を抱く神代と教祖の山田龍造が三人で写っていた。ここは宗教施設だから、赤ん坊にありがたい洗礼でもほどこしている図に見えなくもないが。

「葵のパパとママなのか？」

葵は唇に人差し指を当てて、シーっと言いながら、心底嬉しそうに微笑んでいる。

「……そなた、ここで何をしている？」

背後で突然声がして、大悟は腰を抜かす寸前だった。

「巫女様！」

葵は椅子をひっくり返しながら立ち上がって、大悟の後に駆けていった。大悟はチャンスとばかりに小さくレポートして、葵が座っていた椅子のそばに出る。葵に抱きつかれている神代は、黒地に白い水玉のワンピース姿だった。

「見たな……」

朝顔の花を重ねたようなスカートのフェミニンなワンピース姿を言っているのか、それとも写真のことなのか。どちらにしても神代の秘密を知ってしまったらしいと、物凄く嫌な予感がする大悟。葵

の前だが仕方ないと、ためらいがちにファイティングポーズをとったが……。

「帰ってくれないか。あの娘達を連れてこの土地を出ていくなら、手荒な真似などしたくはないのだ」

威厳に満ちた低い声ではなかった。ワンピースに負けないくらい可愛らしい声だった。そういう目で見てこなかったから気付かなかったが、これは美夜さんに匹敵するぐらいの素敵なお姉さんかもしれない。しかし、人妻で娘がいるのだとちょっと残念な大悟。なんとなく拍子抜けして握りかけた拳を解いた。

「あんた、本当はいい奴だろ？ 葵にこれだけ愛されてるんだから。そんなあんたがどうして……」

神代は屈み込んで葵の目の高さになり、我が子をひしと胸に抱いた。

「私は物心ついたときから孤児^{みなしこ}だった。もしも自分が子を持つようなことがあれば、その子には決して苦勞をかけたくない。そう思っ
て金と力を持つ者を頼った。山田を利用してやろうと近付いたのだが、このさまだ。奴は龍神復活に執着し、多量の精神エネルギーを人間の体に吸い上げて気が触れた」

龍神は既に教団のシンボルとして、無くてはならない存在だ。山田は生きる屍のようになって、神代が手を引き、代わりに喋ってやらないと何もできない。実質、教団を運営しているのは神代なのだ。自分がとんでもない悪事を働いていると知りながら、もう後には引けない。葵を路頭に迷わせることはできない。

神代は吐き捨てるように言い終わると、大悟に手のひらを向けた。
「立ち去れ」

大悟は抵抗する気も失せたまま、目覚めていくのだった。

大悟は咲希に付き合わされて近所の町営温泉に来ていた。旅行雑誌でチェックしていた美肌の湯らしい。大悟が目覚めたときには朝の十時を過ぎていて、唯依と美夜はお土産を求めに出かけていたのだった。

「おまえは土産とか買わなくていいのか？」

「うん、わたしはそんなに親しい友達って多くないから。美夜さんに頼んでおいたわ」

泣きはらしたような赤い目をしていて、鼻声の咲希。大悟が無事に目覚めたら地元に戻ろうと提案したのも咲希だったらしい。

「やだ、臨時休業だって。せつかく歩いてきたのに」

美夜達が車に乗って出掛けたため、二人は二十分ほどの道のりを歩いてきたのだ。食べるところもあるみたいだから、と、朝食抜きで歩いてきた大悟はエントランスの石段に座りこんだ。

「腹減ってもう歩けない。美夜さんに拾ってもらおう」

大悟が携帯を取り出していると、腰の曲がったシワシワの婆さんが現れた。

「おや、どうなさったね？」

咲希が事情を説明する。

「今日で帰るのにそれは気の毒だねえ」

と、婆さん。「特別サービスだよ」と言っつて、自動ドアのロックを解除した。

「点検日で休みなんじゃが、業者さんはお昼過ぎにならないと来ないからねえ」

スタスタと先に入っつていった婆さんに二人も続いた。大悟は発券機に小銭を入れてみたが、電気が消えていて素通りしてしまった。婆さんは、「いいから、いいから」と言いながら、喫煙所に入っつていく。入りかけて振り返り、

「そうじゃった、男湯は湯船のお湯を止めてあったのさね。あんたらカップルなんじゃろ？」

え？ どうだっけ？ と、大悟は咲希に問う。咲希は曖昧な顔をして、さあ？ と、とぼけた。

「あんちゃんのはつきりしないから、嬢ちゃん困つとるじゃないかしっかりせえよ？」

ニヤニヤ顔の婆さんは、ウリウリと肘を突き出すジェスチャーをした。大悟は背筋を正し、「カップルです」と宣言して応える。咲希を振り返って見ると、やっぱり明後日の方角を向いていた。

「じゃあ、一緒に女湯に入ってもかまわないやねえ。湯船の中で『いたしたら』いかんよ」

婆さんはムヘヘへと妙な笑い声を上げながら、喫煙所に入って扉を閉めてしまった。

大悟はホヘ？ と間抜けな声を出した。カップルなのかと訊かれただけで舞い上がっていて、言葉の脈絡を考えていなかったのだ。つまりは禁断の女湯で咲希と混浴して、湯船の中でさえなければ……。油の切れたロボットみたいな左手で、咲希の手をとろうか、腰に手を回してエスコートでもしたほうがいいのかと迷う。

「十分経ったら入ってきて。……恥ずかしいから」

咲希はそう言い残して赤いのれんをくぐっていった。

これはいよいよ本当に大人の階段を登っちゃうのか？ と、硬直した喉で硬いツバを飲みこむ大悟。心の中で「母さん、僕は……」と、数々の報告を済ませ、果てしなかった十分が過ぎた。

大悟は赤いのれんをくぐってドキドキ、シャツを脱いでドキドキ、下着をおろしてタオルを腰に巻き付けたときには気が遠くなるほどだった。

ガラガラとスライド式のガラス戸を開けると、湯気の間こうに咲希のうなじが見えた。普段は下ろしている肩までの髪を、入浴のために結い上げたのだろ。すぐそばに風呂道具一式の入った桶があって、その上にはバスタオルが載っている。と、いうことは、咲希

はいま生まれたままの姿で……。いよいよスクラップ寸前になった錆びたロボットは、歩いても歩いても景色がかわらない悪夢でも見るかのようにして洗い場にたどり着いた。咲希の姿が視界に入らなくなると、物凄いスピードで体を洗い、シャンプーを済ませた。

他にすることが無くなると、いよいよ湯船に入らなくてはならない。咲希との混浴が嫌なわけではないが、何故か『入らなくてはならない』と感じる大悟。最上級の幸せを手にかかって、本当にこれでいいのだろうか？ と、臆病風に吹かれたのかもしれない。

「ちよつと、のぼせちゃうでしょ。……早くいらっしゃいよ」

今日のお嬢様はずいぶんと積極的じゃないか。風呂に入ってみたら実は咲希に変身していた神代がいて、また背骨を折られてドラゴンに食われるんじゃないか、と、大悟は怖じ気づく。しかし、チャンスの女神は気が短いものだ。これまでに何度もためらっては、せっかくのチャンスを無駄にしてきたではないか。大悟はウォーッと叫んで浴槽に飛び込んだ。咲希は大悟のほうを見ながらも、エビのように後ずさりして壁際まで逃げた。

「お風呂にタオル入れちゃだめよ」

大悟は前を隠していたタオルを恐る恐るはずし、浴槽の縁に放る。お湯は乳白色の濁り湯で、胸までしか見えない。なるほど、これなら出入りのときに気をつければなんてことないか、と、安堵する大悟だった。

咲希がよいしょ、よいしょとにじり寄ってきて、大悟は逃げ出したいような、それでいてワーツと襲いかかりたいような板挟みの気分で固まっていた。咲希は大悟の隣に来て、動きを止めた。二人揃って窓の外の深緑を眺め、脚を伸ばしてのんびりの図であった。

「やっと二人きりになれたわね」

大悟はゴクリとツバを飲みこんで「う、うん……」と、うなずいた。

「それで、あのあと何があったの？ あんた、起きてから何も言わないけど、そんなに怖い目に遭ったの？ それとも、エッチなこと

でもしてた？」

「なんでいまその話？ と、ちょっと落胆気味の悟だったが、無視するわけにもいかずに事情を話した。

「そう……。わたしも、神代さんって根はいい人じゃないかなって思ってたのよ。昨夜は怖かったけど、ご本尊を狙ったんだから怒るのも無理はないし」

「まあでも、帰ったら忘れよう。世の中に悪事なんていくらでもある。俺達はたまたまその一つに出くわしたってただだ」

悟が咲希の視線を感じて見ると、ジロリと軽蔑の眼差しを受けていた。そのまま思わず視線が下がると、緩い腕組みで隠された胸の真っ白な肌が見えた。浮力で上げられ、腕組みに寄せられているせいか、見事な谷間を形成している。

咲希は上手いこと片手だけで胸をカバーしながら、左手で悟の頬をつねった。

「わたしは悪事を見逃したりしないわ。いいえ、性格的にできないの。そんな気持ちの悪いこと」

悟は解放されたほっぺをさすりながら言う。

「咲希はもし、大好きなやつが悪いことをしてたらどうする？」

咲希は目を真ん丸くして、

「あんだ、そんな改まって言うほどの悪いことをしてきたの？ 中条さんに弁護団を組んでもらって、出来るだけのことはしてあげるから、早く自首したほうがいいわ」

と、まくし立てた。

「そうじゃなくて、神代のことだ。あいつは山田の気が狂った時点で、葵を連れて逃げることで出来たはずだろ。それをしなかったってことは、山田をまだ愛してるんじゃないのかな。それで、山田のやりたがっていたドラゴン復活の意思を継いでるとかさ」

咲希はウーンと上を向いて思案した。

「わたしは、あんだが悪いことをしてて、救いようがないと思ったら容赦なく叩きつぶすわ。それは、わたしが悪いことをしてても同

じ。できればあんたに悪事を打ち砕いてもらいたいかも。きっと神代さんも、誰かに野望を叩き壊してもらいたいんじゃないかしら？」

大悟は満足げにうなずいた。

「実は俺もそう思ってたんだ。ただ、それがあいつらのためになるのか、ちよつと迷いがあつてさ」

咲希はニヤニヤしながら、

「ほんとに？ 調子合わせてるだけじゃないの？」

と、からかつてみせた。

大悟は咳払いして真顔になる。

「悪いことをして得た地位に縛られてるなら、その地位を奪ってやればいい。あの夫婦には葵がいるし、いくらでもやり直しはきくはずなのに、気付いてないのは本人達だけなのかもな」

問題は、神代や巨大なドラゴンにどうやって対抗するかということだ。それに、風呂を上がって戻れば地元に戻る予定になっていると、大悟がブツブツ言っていると、咲希は大悟の背中にパチーンと紅葉マークをつけた。

「くよくよしないの。男の子でしょ？ 夢の中ではいつでもここに戻ってこられるんだし、これ以上、唯依と美夜さんを巻き込まないために帰るだけよ」

なるほど、と、うなずく大悟。男の子と言われて、あることを思い出した。

「そっか、男の子はくよくよしないでいいんだな？」

「ちよ、ちよつと……」

大悟は咲希にガバツと襲いかかった。夢中で唇を重ね、裸の胸が密着する。咲希もためらいがちではあるが、大悟を抱き返してきて初めての受け入れられたキスが完成した。そのまま押し倒してしまいたいところだが、ここは湯の中だ。大悟は咲希の手を引いてお湯から上がろうとした。

「ば、ばか、隠しなさいよ！ わたしにもタオル取って！」

咲希は目をキョロキョロさせている。大悟は自分のタオルで前を

隠し、咲希にバスタオルを差し出した。

「あっち向いて。見ちゃだめよ」

タオルを巻き終わった咲希は、大悟の腕に寄り添った。大悟は手頃な場所を探して、露天風呂の脇にサマーベッドがあるのに気付いた。そちらに向かって歩き出すと、

「外なんてだめ。……初めてなんだから」

と、咲希。そうなるともう、どこでも同じだった。浴槽の縁に腰かけて、二人はキスを再開する。大悟は夢中で口付けながらも、次はどうするんだっけ、どうするんだっけ……？ と、パニック状態だった。一度冷静になろうと唇を放すと、咲希がはにかんだ笑顔で見守っている。それが可愛くてまた唇を吸うと、パニックに陥って続きが出来ない。

「……大悟は夢の中で世界じゅうの女の子とエッチしてきたんじゃないの？」

「そ、そんな卑怯な真似するかよ。デートしてチュウぐらいまでだ」夢の中でソーランドに行ったことがあるとは、いろんな意味で言えなかった。夢の中でまで変な遠慮をしてプロが相手だったのかよとか、あんた不潔よ、だとか、わたしはエッチしたい女の一人ではないの？ とか、色んな突っ込みを想定したのだ。それにしても、大悟はリアルでは生粋の『少年』であった。これが初の試みだと言っても全くの嘘ではないだろう。

「あんたって、ほんとだらしないわよね。年下のご主人様がなんでもやってあげないとだめなんだから」

咲希は大悟の顔じゅうにチュウチュウとキスをして、首の辺りまで下がる。そこで顔を上げて、「あんたもやってみなさい」という顔をした。

大悟はお手本に従って、咲希の顔にキスしてないところはないというぐらいにした。耳たぶを唇で挟んでみたりしながら、キスの行軍は首筋を目指す。

咲希のタオルがハラリと落ちて、大悟はホヘーっとため息をつ

いた。

「なによ、がっかりなの？ あんたつてば美夜さんぐらいないとダメな人？」

「違うよ、あんまり綺麗だからさ」

大悟が両手で持ち上げて、唇を寄せた瞬間だった。

「咲希ちゃんいますか？」

唯依の声だった。咲希はつつかれたイソギンチャクのような素早さでタオルを巻き直した。大悟は泣き出しそうなほどにがっかりした顔で、重いため息をつくのだった。唯依と美夜が心配してはいけないからと、書き置きを残したのは大悟だ。なんとという自業自得。

唯依はタオルを左腕にかけて、右手には桶を持っている。それ以外はスッポンポンのまま、堂々と歩いてきた。

「やだ、先輩もいたんですね！ ごめんなさい！」

唯依は半身になって縮こまり、体をかばった。

「謝ることはないよ。いいものを見せてもらったから……あはは」

唯依の照れっぷりや咲希の視線が痛くなって、大悟は出口を目指した。

「あら、大悟君、もう上がっちゃうの？」

「うん、ちよつと、いろんな意味でのぼせそうだから」

美夜とそんな言葉を交わしながらすれ違った。そして、「あれ？」と、振り返る。美夜も唯依と同様、隠しもせずに堂々と歩いていたのだ。考えてみればここは女湯。彼女達のテリトリーなのである。しまった、一番大きいおっぱいよく見なかった。と、残念がりながらも大悟はガラス戸に手をかけた。背後から忘れたところに上がった悲鳴は美夜のものだった。

「大悟君がどうして？ 私もうお嫁にいけないわ！」

「美夜さんとはつくに『お姉さん』なんでしょ？ 生娘でもあるまいし、っていうことで、いいんじゃないですか？」

と、唯依が立ち直ってからかっていた。

「で、でも、あんなに堂々と見せちゃったらやっぱり……」

そういつことならもらってあげたいが、俺には先約がいるからね、
と、鼻歌交じりに脱衣所に戻る大悟だった。

大悟と咲希は屋敷に帰るなり、それぞれのベッドに入った。咲希の疲労がピークに達していたのである。

女三人は昨夜、大悟を心配してあまり眠っていなかった。昼間の高速道路にバクは来ないだろうと、美夜と唯依は後部座席で眠り、大悟がずっと運転して帰ってきた。咲希は時折、頭をコックリコックリさせながらも、結局は眠らないで大悟に付き合ってきたのだった。

「さあ、行くわよ！」

夢で合流した途端、咲希は目を爛々と輝かせて、はりきっている。出会った当初は「他人には興味がない」などと言っていた咲希だが、ずいぶんとお節介焼きになったものだ。

「二人だけになってみると寂しいもんだな」

美夜と唯依は四時間の道のりを眠ってきたのだから、しばらくは夢の世界にこないだろう。元より誘うつもりもなかった二人であるが。

「あんた、よくそういうことが言えるわね。……お婆さんには『カップルだ』って言ったくせに」

大悟は、いじけ顔の咲希を抱き締めて唇を奪った。

「小早川咲希、俺の彼女になれ」

大悟の腕の中、咲希はビクリと硬直した。大悟が家来になって以来、初めて咲希に命令が通ったようだ。咲希はコクリと満足げにならずいて、自ら唇を合わせにいった。

「これで、俺も家来じゃなくなったな」

シメシメという顔の大悟だったが……。

「あんたはわたしの家来よ。たとえば、社内恋愛してる上司と部下がいたとして、付き合い始めたからってポジションはかわらないでしょ？」

あんたはわたしの犬よ、奴隷よ、下僕なのよ。と、高笑いする咲希。こういうところは、ちょっとアレな子のまもらしい。

大悟は目を閉じて大蛇大社をイメージする。そして、咲希の手をとった。

「行こうか、ご主人様」

咲希は満足げに手を差し出して握らせ、二人揃ってテレポートしたのだった。

大蛇大社上空から見下ろすと、例のドラゴンとバクがちらほらいるだけだった。まだ夕方だったから、眠っている人間も少ないのだろう。

「チャンスだ」

大悟は肩にロケットランチャーを発生させる。ドラゴンの胴辺りに狙いを定め、「離れる」と、咲希に指示する。ボフッと空気の塊を耳に押しこんだような衝撃があつて、ロケットが発射された。みるみる加速したロケットは、ドラゴンの背中に命中した。その瞬間、目の前が真っ白になるほどの光が溢れ、追ってキノコ雲が発生した。大悟は咲希を抱き寄せて球状のバリアーを張っている。

「初めからこうしとけば楽だったんだな」

突然の出来事に咲希はポカーンとしている。

「……あんた、あれって」

「小型の核爆弾をイメージしてみたんだ。でも、すぐに辺りがクリンになるっていう、都合のいい設定もあるから大丈夫だ」

キノコ雲が散って視界がひらけてくると、大悟はバリアーを解いた。

「だめか……」

大蛇大社の敷地全体がクレーターになっていたが、ドラゴンには傷一つ負わせられなかったようだ。

「危ない！」

咲希が叫びつつ、大悟を連れてテレポートする。二人がいた位置

に、まぶしく青白い極太の光線が駆け抜けた。

「ゴジラかよ！」

と、大悟が突っ込みを入れている間にも、八つの頭が次々に光線を放って攻撃してくる。

「もう、馬鹿！ 無闇に攻撃したから怒らせちゃったじゃないの！」

咲希は大悟を連れて唯依の別荘にレポートした。歩いて十分ほどのこの場所までドラゴンの咆哮が聞こえて地響きを起こしている。八つの首が山からニョキッとそびえているのまで見えた。

「困ったわね。核攻撃でもかなわないなんて」

咲希は腕組みしてウーンとうなっている。

「まだ考えてたことがあるんだ。バクに見つからないように隠れてくれ」

大悟はそう言い残してさっさと飛び上がった。ジュワッ！ っと、妙な掛け声をかけて。その姿は離れていくにつれて小さくなるどころか巨大化し、しまいには銀と赤のピツタリしたタイツマンになり、どこかで見たことのあるヒーローっぽい姿に変身を遂げた。

「……さすがに妄想力だけは逞しいみたいね」

咲希は呆氣にとられながらも、プツと吹き出して笑うのだった。

大悟マンが着地すると同時に周囲を大地震が襲った。咲希は慌てて飛び上がり、離れた空から観戦する。

大悟マンは、光線をひらりひらりとかわしてドラゴンの頭の一つに近寄り、ヘッドロックをきめてガツンとゲンコツをはった。殴られた頭は気を失って、キューッと地面に伏せた。同様の手順で八つの頭全てを気絶させ、だらんとした長い首を結びつける大悟マン。

「やったわ！」

咲希はテレビの前のちびっ子みたいに喜んだ。

しかし、そのあとがちよっとお粗末だった。大悟マンはドラゴンの胴体にパンチを入れたが、相当に硬いらしく、拳をフーフー吹いて痛がった。腹いせとばかりに結んだ首を引っ張っているが、ちぎれたり傷付いたりしているようには見えない。そうこうするうちに、

大悟マンの胸で赤いランプが点滅し始めた。

大悟マンは大きな体で「しまった」というジェスチャーをしながらも、腕をクロスさせて、何とか光線を放った。しかし、核攻撃さえも受け付けなかったドラゴンの皮膚は、大悟マンの必殺光線でもびくともしなかった。

大悟マンはやれやれと首を振りつつ、ジュワツ！ と、飛び上がる。大悟の姿に縮小しながら飛んできて、咲希のそばに合流した。「ちくしょー、三分つて意外と短いのな」

「あんた、なんでそんなところまで忠実に再現してるのよ！ 馬鹿じゃないの？」

「あ、そっか」

きつい口調で突っ込んだ咲希だったが、思い出したように肩を震わせ、アーツハッハと大笑いした。大悟に抱きつき、大悟の肩をバンバン叩いて笑い続けた。

「……それにしても、『あの大悟マン』でさえかなわないなんて。他にもっと凄いヒーローはいないの？」

今さら顔を赤らめて恥ずかしがる大悟だったが、

「あ、そうだ！」

と、ひらめいたようだった。

大悟は右手に大きな剣を発生させた。

「ドラゴンスレイヤーだ」

咲希は「何それ？」と、問う。

「よくゲームなんかに登場する伝説の剣で、ドラゴンの鋼のような肌をまるで豆腐でも切るように切り裂くという最強アイテムだ。…

…あれ、バターのようになっただけかな？」

「ふーん。でも、なんか伝説っぽく見えないわね。ちょっと貸して咲希は左手に色とりどりの宝石を発生させ、剣の柄に埋め込んでいく。携帯電話をデコレーションするようにして、どんどんきらびやかになっていった。

「まだか。重いんだけど……」

鞘をかぶった刀身を支えている大悟が文句を言い出した。咲希はすっかり熱中していたのだ。

「羽毛のように軽いかという設定にすれば？」

「あ、そうか」

大悟がつぶやいた瞬間、大きな剣がフワツと浮き上がりそうになった。そのまましばらく待つと、咲希が「かわいく！　ね、可愛いでしょ？」と、目を輝かせて顔を上げた。

「って、可愛くしてどうするんだよ」

咲希は「それもそうね」と、宝石に手のひらを向け、ルビーやサファイアのような高級感のある彩りに変更していった。鞘と刀身にアラベスク（唐草）模様を浮き彫りにして、満足そうにうなずいた。「これなら、なんでも切れる伝説の剣に見えるな」

咲希は早速同じ物を発生させて、腰に装着した。一度イメージが固まってしまえば複製はたやすいのだ。

「咲希はここで待ってるよ。危ないから」

「気持ち嬉しいんだけど、あんたってば、どうも詰めが甘いのよね。任せておいたら日が暮れちゃうわ」

二人はドラゴンの背にレポートして、それぞれのドラゴンスレイヤーを抜いた。咲希が逆手に持った剣でドラゴンの背中を突こうとすると、大悟が制止した。

「どうせなら、二度とこっちに来たくないってぐらい、痛い目にあわせてやらないとな」

大悟はドラゴンの皮膚に刃を立てながら剣を引きずって歩き回った。豆腐のように切れるというだけあって、ひっかき傷ではすまないような痛々しい傷が大悟を追いかけていく。咲希はドラゴンのうめき声を聞いて顔を歪めながらも、大悟とは別の筋をつけて歩き回った。

「急所をはずしてバラバラにしてやろうか」

咲希は一層顔をしかめる。

「あんたって、ゲームのやりすぎで感覚が麻痺してるんじゃないの？」

大悟は気まずい顔でうなつたが、それどころじゃないと言ってドラゴンの足に向かった。到着するや否や、足指の一本を切断した。ドラゴンは地響きがするほどの咆哮を上げ、水色ビームを乱射している。しかし、大悟マンが首を結んだおかげでこちらには届かない。「急げ、気絶する前に出来るだけ苦痛を与えるんだ」

急かされた咲希は「ごめんね!」と、叫びながら、目をつむったままドラゴンの指を切断していく。

「よし、次は尻尾、それから一気に脚と首を落とすぞ!」

大悟は体じゅうに浴びた返り血を浄化しながら叫んだ。咲希もまた血を消し去りながら、文句を言う。

「これじゃあ、わたし達が悪者みたいじゃないの」

「俺だって好きでやってるわけじゃないんだけどな。つらかったら戻って待っててくれ」

大悟は咲希の肩を一つ叩いて尻尾に向かった。咲希は「もう！」と唇を尖らせながらも後を追う。

尻尾を何本か切り落としたときだった。大悟は視界の隅で嫌なものを見た気がした。

「山田がうなされているから何かと思えば、おまえ達だったか。もう容赦はせぬぞ！」

どこからか神代がレポートしてきたのだ。

神代もまた、手に長剣を発生させた。日本の神様が持っていそうなデザインの古くさい直刀だった。そのまま神代は分身して、二人をぐるりと取り囲んだ。

「我が夫が受けた痛みを貴様らも味わうがいい！」

神代は長すぎる黒髪を振り乱し、鬼の形相で二人を斬りつける。四方八方からの斬撃は、それでも致命傷を与えない。トラウマを負わせる作戦を、そっくりそのままお返しされているのだ。

「咲希、逃げろ！ こいつは俺がなんとか……」

「痛くて……レポートに集中できないわ！」

生きたままフードプロセッサーにかけられたらこんな痛みだろうかという激痛の嵐。二人は対抗する術もなく、へたり込んで痛みを受け続けるしかなかった。

「どうだ、これで少しは懲りたか、虫けらどもめ！」

一つの体に戻った神代が振りかぶる。咲希の首を狙っているようだった。大悟は、かばってやろうにも激痛で身動きが取れない。目はかすみ、呼吸する度に血を吐く有り様だった。

長剣がうなりを上げて振り下ろされ、バチンツと骨を断つような嫌な音がした。

大悟が恐る恐る目を上げて見ると、赤い袴に包まれた脚が落ちていた。

「……誰が虫けらですって？」

咲希は表情のない顔で神代を見つめている。神代は左脚を失ってバランスを崩し、仰向けの体を腕だけで後ずさりさせていた。咲希

が剣を逆手に持ち替えて突きを繰り出そうとした瞬間、神代は茶色い瓶を発生させて掲げた。そして、余裕の表情を浮かべる。

「これは、マスタードガスよりも凶悪な劇薬という考えで出したものだ。この瓶が割れれば三人とも瞬時に皮膚がただれておぞましい姿になることだろう。さあ、観念しろ、虫けらの小娘」

神代の高笑いが響く中、咲希はうつむいてブツブツ言いだした。

「……姫……だもん。……世が世なら……わたしは一国の姫なんだもん！」

咲希の髪が立て巻きロールの長髪にかわり、色が抜けていつて金髪になった。よく見れば目も青い。続いて、着ていたものが豪華な白いドレスに生まれ変わった。ゴゴゴゴと薄ピンクのオーラをまとい、剣を再び振りかぶる。

「忘れたか？ 小僧の前で、皮膚のただれた醜悪な姿になってもいいのか？」

咲希は「おだまり」と、静かに呟いて歩を進めた。

「寄るな！ 割るぞ！ 瓶を割るぞ！」

神代の震える手が瓶を放した。その瞬間、咲希が叫ぶ。

「わたしの威厳が二人を守るわ！ わたし達は無敵よ！」

咲希はガラスが割れる音も無視して神代を突きまくった。血まみれになった神代の体は瞬時にただれ、刺し傷と皮膚を焼かれる苦痛にのたうちまわる。そして、半透明になって消えていった。咲希は割れた瓶を消滅させると、ペタリと座りこんで元の姿に戻る。

「あら……わたし、何をしていたのかしら？」

大悟は自分の体を回復させ、咲希に歩み寄る。咲希の傷は、変身した拍子に完治していたようだ。

「いまのは一体？ おまえ、姫だったの？」

咲希はある種のトランス状態にでも入っていたのか、自分が何をしたかはつきりとは覚えていないらしい。大悟が説明すると、咲希は耳まで真っ赤になって大悟の腕を引っぱたく。

「そ、そんなお子様みたいな妄想……。でも、たしかに、うちの先

祖は大家家だったとかなんとか聞いたことはあるけど」

大悟は面白がって、おだてたり、からかったりしながら詮索した。どうやら、咲希は占い師に言われて前世が姫だったと信じているらしく、先祖も大家家かもしれないし、ということで、自分はいまでも姫なのだと思い込んでいるようだ。ヨーロッパなお姫様の姿だったのは、咲希の好みなのだろう。よりにもよって、その姫様に向かって虫けら呼ばわりなどしたのだから、神代はいわば、『逆鱗に触れて』しまったのである。

「……あれ、ドラゴンがいない。しまった、気絶したか」

「大悟、うしろ！」

大悟は振り返って剣で防いだ。神代同様古くさい直刀で襲ってきたのは日本神話に登場する、なんとかの命みことみたいな格好の男だった。「……大龍神命……教祖か！」

咲希はとっさに教祖の背後に回り込み、剣で突こうとした。しかし、教祖の背中から槍のようなものが飛びだして、咲希の胸を射貫く。ミニチュア化したドラゴンの尻尾の一つだった。咲希は目を見開いて驚いたあと、重そうにまぶたを閉じていく。

「咲希、俺達は無敵なんだろう、まともに取り合うな！」

教祖は振り向きもせず、大悟と力比べの直刀に力を込め続けた。

「人の心配をしている場合か。よくも我が妻を！　よくも俺の涼香ちゃんをあんな目に！」

『涼香ちゃん』って誰だ？　と、大悟は首を傾げながら力攻めに耐える。あ、神代のことか。と、気付いてスツキリした表情を浮かべ、右足で蹴り上げる。

教祖が一步退いて間合いを取り直す。串刺しだった咲希の体は地面に落ちた。

「おまえの女も痛めつけてやろう。愛しい者を目の前で傷付けられるむごたらしさを味わうがいい！」

大悟は「あれ？」という顔をした。

「なあ、おっさんもひよつとして、いい奴なんじゃないのか？」

教祖の肩がビクつとして、動きを止めた。

「あんたといい、神代といい、戦闘中に我が妻だの我が夫だのつて、ずいぶんと仲良さそうじゃないか。葵だって、あんなに素直でいい子だし」

咲希はそーつとそーつと後ずさりして、立ち上がった。そして、剣をかまえて教祖に襲いかかろうとする。

「咲希、待て！」

咲希の動きがピタリと止まった。

「俺、気付いたんだ。俺達に必要なのは戦いじゃなくて、話し合いじゃないのか？」

教祖の直刀が大悟の胸をえぐった。

「それでは私の気が済まんだ。苦しめ、小僧！」

大悟は冷や汗をたらし、奥歯をガチガチいわせている。

「悪かったな、おっさん。気が済むまで付き合うから、いくらでも

やれ」

「いきがるな、小僧！」

教祖は直刀を引き抜くと、倒れた大悟に馬乗りになって殴打した。咲希が背後から教祖をめがけて振りかぶる。

「いいんだ、咲希……手を出すな……」

咲希は振りかぶったまま身動きが取れないようだ。葛藤しているのだろう。

「パパ、おにいちゃんをいじめちゃだめ！」

葵の声がした。見れば神代が葵の手を引いて歩いてくる。教祖は立ち上がり、殴打の嵐がやんだ。咲希は大悟に駆け寄って傷の手当てをした。大悟もまた咲希の胸に手を当てて、えぐられた傷口を癒す。

「おにいちゃんったら、おねえちゃんのおっぱい触ってる。えっち」

「こ、これは、傷の手当てだ。よく見る、ここはおっぱいよりちよつと下であってだな……」

大悟の弁解を眺めていた神代がクスッと笑った。フェミニンな白いワンピースを着ている。

「私達の負けよ、あなた」

神代はそう言いながら、教祖こと山田に寄り添った。

「私はまだまだやれるぞ。こんなひよつこどもに邪魔などさせるか」

神代は山田を引き止めるようにして背後から抱き締めた。葵は両親を見上げて嬉しそうに微笑んでいる。

「あなた、人間の姿に戻って、口をきけるようになったじゃないの。この子達のおかげよ」

「おお、言われてみれば……」

だいぶ痛い目にもあったが、ドラゴンの体を傷付けられ、神代がやられるのを見て人の姿に戻った山田。大勢の精神エネルギーを一身に背負って、後戻りできない化け物になっていた山田だったが、咲希と同様のトランス状態に入ったことで、自らの身に築いた呪縛

が解けたらしい。我を忘れたことで、龍神復活という野望への執着を手放したのだろう。

「いくらやっても、この子達は何度でもやり返してくるでしょう。しつこくて、お馬鹿で、正義感に燃えて……これが若さなのかしらね」

神代が楽しそうに笑うと、山田はやる気が失せたともいうように直刀を投げ捨てた。

「さてと、あなたも人に戻れたことだし、教団のお金を持ち逃げして高飛びしましょう。この子達が思いもよらないところで、また新しい教団でも作ればやり直せるわ」

神代は可愛い声で、優しいママの物腰で、新たな悪事を提案するのであった。

「ちよつと待て。おまえらさ、なんで悪いことしようと思うんだ？ 根はいい奴そうなのに、高飛びだの新教団だのって」

山田はうめくように答えた。

「涼香ちゃんと葵ちゃんに楽な暮らしをさせてやりたいからだ。大金を得るためには、欲深い者達の足下を見てつけこむのが一番手っ取り早いだろう？」

咲希は小早川本を発生させて山田に手渡した。

「その本ってわたしのパパが書いたの。こうやって夢の中で出会ったのも何かの縁かもしれないし、よかつたら読んでみて？」

「ほく、とすれば、あなたは小早川会長のお嬢様で？」

途端に改まった態度の山田。昔、パーティーで小早川に出会い、その思想に共感して著書を読みあさった結果『夢現の法』を完成させて教団を立ち上げたのだという。つまり、明晰夢を見られるようになった根っこは同じで、小早川だったのだ。

「パパの本には、悪いことをしないと儲からないって書いてたかしら？」

山田は恥じ入るような顔になる。神代は山田から本を受け取ってパラパラめくった。

「あらあら、ほとんど丸パクリじゃないの、あなた」

教典のほとんどが小早川の著書を盗作したものだった。信者に知られて不利な情報だけを除いたそうだ。それを教典としているうちに、山田自身も『楽しんで願いなど叶わない』という主義に陥ったらしい。

「じゃあ、教団のお金を持ち逃げして、高飛びした先で楽しく暮らしましょう！」

神代が無邪気に宣言する。

「まあ、持ち逃げは決定事項のようだから、とやかく言わないけどな。俺達は警察じゃないし。でも、捕まって葵を路頭に迷わせたりはするなよ」

大悟はしゃがみこんで葵の目線になった。

「もしもパパとママが悪いことを始めたら、俺達に知らせるんだぞ」
咲希がニヤニヤ笑いながら続ける。

「大悟マンとの約束だぞっ」

「うっせ、おまえだつて『姫様』だろ」

そんなやり取りをしてじゃれ合っている二人に葵は言った。

「ケンカしちゃだめ」

ヒーローと姫様が「はい」と揃って返事して、葵は満足そうに微笑んだ。

大悟と葵が指切りげんまんを始めると、咲希も加わった。葵に促されて親達も参加する。

「それにしても、家族三人揃って笑える日が戻ってくるなんて、夢にも思わなかったわ」

神代の目から涙がこぼれ落ちて、葵はポケットからガーゼのハンカチを取り出して渡す。

大悟は咲希の腰に手を回して得意気な顔をする。

「俺だつて、この小早川のお嬢さんと出会って、家来としてたんまり給料もらって、いまでは恋人同士なんだ。夢みたいな話だけだな」

結局、一同は一晩中語り尽くした。持ち逃げにこだわっていた神

代だったが、考えを改め、人のためになる教団として大蛇大社を再建すると誓った。我慢を強いる教えではなく、悩める人々を解放するための教団に。寄り添っていないと不安で仕方がない人達はたしかにいる。だから、その人達を救うのだと。

家来、氣付く（エピソード）

唯依は二人の活躍と、恋人同士になったという報告を受けて、ギヤーギヤーわめいた。

「やっぱり咲希ちゃんばかりずるいです！ 親友だと思ってたのに、裏切ったわね！」

中条に寄り添ってデレデレしているメイドさんが言う。

「唯依さんも自分に素直になって、ただ願えばいいのに」

中条をゲットして余裕のある美夜は、やや上から目線だった。

「……こうなったら、『私も』先輩の彼女にしてください！ 咲希ちゃんの邪魔はしないから、先輩を共有しましょう！」

「それは名案だな」

と、大悟が言うのと、咲希が大悟の尻をつねる。

「と、言うのは冗談だ……あはは。こんど友達を紹介してやるから、そいつで我慢しろ」

唯依はムーっと膨れる。

「よかつたら、私の親友をご紹介させていただいても？ 私と同年ですから、多少年齢差はありますが、事業で成功して悠々自適な日々を過ごしている男です」

中条がそう提案すると、美夜もうなずく。

「芳野家のお嬢様が付き合うなら、そういう方のほうが釣り合うかもしれないわね」

えー、おじさんでしょーと、唯依。ちよつとへこんだ顔の中条。

唯依をにらむ美夜。大悟はなんだか寂しそうな顔になる。

「小早川のお嬢さんと俺じゃ、やっぱり釣り合わないよな……」

咲希はクスッと笑って言う。

「パパが、なかなか見所のある若者だって言ってたわ。パパが若かった頃とそっくりだって」

咲希は「そうそう」と言って大悟の部屋から出て行き、大きな封

筒を抱えて戻ってきた。

「これ、パパの会社の奨学金制度だつて。跡継ぎをしてもらうから、大学に入ってからしっかり勉強してくるようになって言つてたわ」

父親の公認を得られたようなものだから、大悟の表情も明るくなった。しかし、

「俺、大学なんて入れるかな？ 卒業もギリギリだつたし……」

「じゃあ、一浪して私達と同じ大学に行きましょう！ 私が家庭教師してあげます！」

大悟は唯依の志望校を聞いて「無理だ……」と肩を落とした。咲希も志望校は一緒だった。

「ちょうど旦那様のほうの仕事も一段落したので、私も協力しますよ、佐藤君。一日十時間もやれば、まだまだ取り返せるはずです」

中条はサラッと一日十時間などと言う。咲希も唯依もウンウンと微笑んで首肯している。

「頑張つてね」

と、言いながら、美夜だけは気の毒そうな顔をしていた。かと思えば、中条の背中に隠れてウププッと笑った。

「まあ、他にすることもないし、一丁、やってみますか」

まだ「仕方がない」という顔の大悟に、唯依は悪戯っぽく提案した。

「先輩が無事に合格したら……先輩の言うことなんでもきいてあげます」

上目遣いをしてウフーンと色香を漂わせる唯依。美夜は面白がつて言う。

「大悟君はそれまでにお嬢様と経験を済ませちゃうから、あんまり魅力的なご褒美にならないんじゃないかしら？」

咲希はヒイッと飛び退いて、

「しないしない、絶対しない！」

と、大慌て。

「そんなことでは、唯依さんに取りられちゃいますよ？」

「私はむしろ、そっちのほうが大歓迎かも。……じゃあ、模試の成績が上がったら、ご褒美を」

大悟が生暖かいため息をついていると、咲希がゲンコツをはる。
「もてる男はつらいわね」

と、美夜がからかう。

大悟はふと、「ウーン」と伸びをして、

「幸せだな」

と、満足げに言った。

「どうしたの？ いきなり」

咲希が突っ込みを入れる。

「いや、なんとなく。でも、気持ちいいから咲希もやってみたら？」

咲希は言われたとおり伸びをして、

「あゝしあわせ」

と、言う。唯依が続ぎ、美夜が続いて、中条までが参加した。

「なるほど、幸せとは本来こういうものなのかもしれないね。美夜ちゃん、僕はいま、とても幸せです」

中条が真顔でそんなことを言うものだから、一同は大はしゃぎするのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6842m/>

夢見る家来とお嬢様

2011年9月10日03時15分発行